

# Tokyo Institute of Technology Centennial Hall 30th Anniversary

東京工業大学百年記念館

設立30年記念誌

Tokyo Institute of Technology Centennial Hall 30th Anniversary



東京工業大学  
Tokyo Institute of Technology

東京工業大学百年記念館  
設立30年記念誌

東京工業大学百年記念館 設立30年記念誌

東京工業大学博物館

〒152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1 E3-12

TEL : 03-5734-3340

FAX : 03-5734-3348

Mail : centshiryou@jim.titech.ac.jp

<http://www.cent.titech.ac.jp>

東京工業大学百年記念館  
設立30年記念誌

Tokyo Institute of  
Technology Centennial Hall  
30th Anniversary

## 東京工業大学百年記念館 設立30年記念誌

### もくじ

刊行によせて .....	2
東京工業大学 学長 益 一哉	
はじめに .....	3
東京工業大学 総括理事・副学長 博物館長 佐藤 勲	
東京工業大学百年記念館・博物館の歩み .....	4
東工大百年記念館建設の経緯 .....	38
東京工業大学 名誉教授 平井 聖	
寄付・募金活動について .....	44
蔵前工業会 事務局長特任補佐 吉松 明	
百年記念館の建築家・篠原一男 .....	53
東京工業大学 教授 奥山信一	
東工大百年記念館から東工大博物館へ .....	63
東京工業大学 特命教授 道家達将	
百年記念館から博物館へ .....	72
東京工業大学 教授 副館長 亀井宏行	
資史料館部門と公文書室の設置 .....	78
東京工業大学 資史料館部門長・公文書室長 特命教授 広瀬茂久	
百年記念館・博物館館長一覧 .....	83
東京工業大学の沿革 .....	84

# 刊行によせて



2017（平成29）年11月3日、東京工業大学百年記念館は設立30周年を迎えました。この間、種々の催し物の会場として、あるいは昼休みの憩いの場として多くの方々に利用して頂くとともに、博物館機能を併せ持つユニークな施設として、外観と相まって大学のシンボリックな存在となってきました。

百年記念館の歴史を振り返ってみますと、1987（昭和62）年に東京工業大学創立百年記念事業の一つとして百年記念館が建設され、開館いたしました。同窓会のお力添えのお陰と感謝しています。本学は1881（明治14）年の前身校の設立以来、理工系拠点として最先端の教育・研究を通して社会に貢献してまいりました。百年記念館が誕生した頃から大学は激動の時代を迎え、大学設置基準大綱化・大学院重点化・国立大学法人化の荒波にさらされてきました。開学135年を迎えた2016（平成28）年4月にはさらなる飛躍を目指し、本学独自の試みとして、学部と大学院を統合した「学院」による新たな教育体制をスタートさせました。

昨年3月には文部科学省から「指定国立大学法人」に指定されました。これを推進力に有数の理工系総合大学を目指してたゆまぬ努力を続けています。研究成果を中心とする情報発信の場として百年記念館・博物館には一役買って欲しいと大きな期待を寄せています。

30周年を契機として、当館の歩みを省み、あらためて、本学の「これまで」と「これから」を象徴する重要な施設であるとの思いを強くしています。学生・教職員・同窓生をはじめ多くの学内外の関係者の方々に積極的に活用していただけるように、今後一層の努力をしていく所存です。ご支援・ご協力をお願いいたします。

2019年1月  
東京工業大学 学長

益 一哉

# はじめに



2018年4月1日、益一哉学長が就任し、新執行部の一員として戦略と企画、人事と広報という本学の「土台」を任されました。世界最高水準の理工系総合大学の実現に向けてこれまでの教育改革を継承し、指定国立大学法人としてさらなる発展のために取り組んでいきたいと思っております。同時に私は岡田清館長の後を受けて、東京工業大学博物館館長に就任いたしました。これまで当館をご支援くださった多くの方々のご期待に沿うよう博物館の充実に努め、本学関係者の心のよりどころになる空間にしていく所存です。

ここ数年の全教職員が一丸となった努力により、本学が社会から必要とされ高く評価される大学であり続けるためにはどうあるべきかという姿が描かれ、そこに向けた歩みが始まっています。大学には真理の探究という大切な役割の他に社会から期待されているもう一つの役割があります。それは、しばらく前までは“ものづくり”と“ひとづくり”でしたが、これからは社会創り、言い換えると、豊かな未来社会像の提案とそれを実現するための総合戦略の立案です。

こうした難しい課題と向き合うため、一昨年9月に新しい組織として「未来社会DESIGN機構」が設置されました。私はこの機構の長も務めていますので、博物館・百年記念館がこれからの豊かな未来社会像を社会の皆様とともに考えていく共創の場の一つになって欲しいと願っています。博物館の基本的機能である「温故知新」と「リフレッシュ空間の提供」を大切にしつつ、30周年を機に未来をも意識した情報発信にも力を入れていきたいと思っております。

これからの博物館・百年記念館の活動にご期待いただくとともに、これまでも増して皆様方のご支援を切にお願い申し上げます。

2019年1月  
東京工業大学 総括理事・副学長  
博物館長

佐藤 勲

# 東京工業大学百年記念館・博物館の歩み

1973-1977年

昭和48~52年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
1973 昭和48年	4月1日	・教育工学開発センター設置
	4月27日	・大学院に電子科学、社会開発工学、精密機械システムの3専攻を設置。 ・工学部の化学工学科・合成化学科、電気化学科を改組し化学工学科を設置。
	10月	手島精一先生銅像新台座が完成し、遷座式を挙げる。 募金応募額：913万8,000円 なお、募金残額215万4,949円は助手島工業教育資金団へ寄付。また、昭和55年4月14日加藤六美学長による銘記をもって銅像の整備を完了。
1974 昭和49年	11月3日	
	2月13日	全学教授会において、川上学長が創立百年記念事業についての談話の中で挙げた9つの事業名のうち「創立百年記念館の建設をあげ、本学の記念すべき研究機器、その他各種研究成果を取蔵・展示して、我が国工業教育史上、理工学界史に占める本学の地位を明らかにすることに役立てるため、一種の博物館的施設としてはどうかと述べた。〔東工大クロニクル〕No.59, 1974年5月)
	3月29日	・総合理工学研究科教官会議準備会を設置。 ・長津田移転本部を新設。
	4月	「東京工業大学百年記念事業準備会」が発足。 ・創立100年記念事業準備会設置。 ・工学部電気工学、電子工学及び電子物理工学科の各学科を改組。新たに電気・電子工学科・電子物理工学科及び情報工学科を設置。 ・大学院理工学研究科に材料科学、電子システム、化学環境工学専攻を設置。 ・資源科学研究所に附属資源循環研究施設を設置。
	7月	「東京工業大学百年史委員会」が発足。
1975 昭和50年	4月1日	大学院総合理工学研究科を設置。既設の7専攻に生命科学、エネルギー科学、システム科学の3専攻を加えて計10専攻となる。
	9月4日	創立80周年記念募金による「総合研究館」が長津田キャンパスに竣工。(総面積5,603m <sup>2</sup> )
1976 昭和51年	11月8日	工学部附属工業高等学校の創立90周年記念式典を開催。
	5月10日	・総合情報処理センターを設置。 ・工業材料研究所に附属水熱合成材料実験施設を設置。
	11月3日	
1977 昭和52年	1月	「東京工業大学百年記念事業企画委員会」が発足。 委員長：吉見吉昭教授

展示・講演会	備考	学長・館長
 手島精一	谷口吉郎名誉教授（建築設計）、文化勲章受賞	川上正光 学長  任期 1973年10月 ~ 1977年10月
		長津田キャンパス「総合研究館」
		
	芹沢銈介作「壺屋のロクロ」	1975（昭和50）年竣工（延床面積：6467m <sup>2</sup> ）
		芹沢銈介氏（型絵染）と沼地福三博士（水力機械学）、文化功労者顕彰

手島精一 座像



谷口吉郎 名誉教授 (1904-1979)



- ・1904（明治32）年 石川県出身
- ・1928（昭和3）年 東京帝国大学建築学科卒業
- ・1930（昭和5）年 東京工業大学建築学科講師
- ・1931（昭和6）年 同大学助教授
- ・1943（昭和18）年 同大学工学博士号を得、教授に昇任
- ・1965（昭和40）年 同大学名誉教授

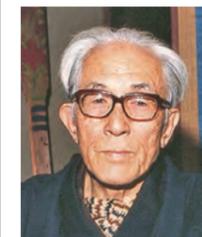
作風は、「清らかな意匠」という彼自身の言葉に要約される。その作品は文学碑から工場建築まで多岐にわたるが、一貫して求め続けたのは、強靱な合理的精神に裏打ちされた詩的で品のある表現であった。昭和初期には当時の西欧の新建築への傾倒が見られ（代表作、東工大水力実験室1932）、ドイツの建築家シンケルの作品に接して以後、日本建築の作風を現代に継承していくことが彼の最大のテーマとなった（代表作、藤村記念堂）。また、明治の文化遺産保存のため博物館明治村を設立し初代館長を務めた。

川上正光 名誉教授 (1912-1996)

- ・1912（明治45）年 栃木県出身
- ・1935（昭和10）年 東京工業大学電気工学科卒業
- ・同大学名誉教授 元学長

電子回路学分野に4端子マトリックスの概念を導入した。この手法は、真空管及びトランジスタの電子回路研究に極めて有力で、これらの能動素子を含む一般の電子回路の体系的構成論の確立に大きな役割を果たした。その他高選択性高周波増幅回路の研究、戸波回路網の研究、素回路の導入で成果を挙げ、特に素回路の概念は、電子回路と戸波回路を組み合わせた能動戸波回路の構成に極めて有用であり国内外で大きな反響を呼んだ。このように日本の電子技術の普及発展に貢献した。

芹沢銈介 氏 (1895-1984)



- ・1895（明治28）年 静岡県出身
- ・1916（大正5）年 東京高等工業学校工業図案科卒業
- ・染色工芸家、人間国宝（型絵染）

当初蠟染を手がけていたが、柳宗悦の論文に触発され、沖縄の紅型染の影響を強く受けて独特の染織物を作り出した。その後、伝統的な型染を発展させ、製作工程に創造性を生かした「型絵染」の世界を築いた。1956（昭和31）年に「型絵染」の重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定される。また、大原美術館（倉敷）の工芸館を増設する際には、内外装等の設計を担当し、建築意匠分野でもその才能を発揮した。



# 1981-1985年

昭和56～60年

1981  
昭和56年  
1982  
昭和57年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
11月3日		
4月		蔵前工業会における学生会員制度の導入。
4月1日		研究・情報交流センターを設置。
5月11日	百年記念館委員会内に建設と展示に関する2つの小委員会が設置された。建設には平井聖教授、展示には道家達将教授がそれぞれ責任者として任命された。1983年には道家教授が「主査」として「展示部門委員会」と改称され、収蔵品の収集・調査・展示を任務とした。	
11月3日		
4月1日		文教施設総合研究センターを設置。
11月30日	吉見委員長から百年記念館委員会「展示部門委員」の選出について、各部署に依頼状が出された。	
1月19日		工業材料研究所附属水熱合成材料実験施設を廃止。
4月5日	第1回展示部門委員会が開催された。(直前に百年記念館委員長が吉見教授から平井教授に交代。)	4月11日工業材料研究所附属新素材セラミックス実験施設を設置。
11月3日		
12月31日	母校創立百年を記念した「東京工業大学創立百年記念事業募金」を終了。 ・応募額 14億1,357万8,377円 法人 10億4,836万5,000円 (317社) 個人 3億6,521万3,377円 (6,561名)	
5月26日	・創立記念日に百年史の発行を完了。(総費用4,112万円) ・百年記念館を母校正門内右側の風洞跡に建設することが決定された。	風洞実験装置

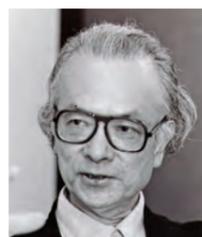
1983  
昭和58年

1984  
昭和59年

1985  
昭和60年

展示・講演会	備考	学長・館長
	高柳健次郎博士 (電子工学)、文化勲章受章	<b>松田武彦</b> 学長  任期 1981年10月 ～ 1985年10月
	川上正光元学長 (電子工学)、文化功労者顕彰	
		内田俊一元学長 (化学工学)、文化功労者顕彰

## 篠原一男 名誉教授 (1925-2006)



- ・1925 (大正14) 年 静岡県出身
- ・1947 (昭和22) 年 東京物理学校数学科卒業
- 東京医科歯科大学で数学の教鞭を執るが、日本の伝統建築の美に憧憬し、1950年東京工業大学建築学科に入学
- ・1962 (昭和37) 年 東京工業大学助教
- ・1970 (昭和45) 年 同大学教授
- 東京工業大学百年記念館 設計
- ・1986 (昭和61) 年 同大学名誉教授
- ・1989 (平成元) 年 芸術選奨文部大臣賞を受賞
- ・2010 (平成22) 年 ベネチアビエンナーレ記念金獅子賞が贈られた。

## 松田武彦 名誉教授 (1921-1999)

- ・1921 (大正10) 年 佐賀県出身
- ・1943 (昭和18) 年 東京帝国大学工学部造兵学科卒業
- ・1955 (昭和30) 年 東京工業大学経営工学科助教授
- ・1963 (昭和38) 年 東京工業大学教授
- ・1981 (昭和56) 年 同大学学長
- ・1985 (昭和60) 年 同大学名誉教授

専門分野：工業経営及びオペレーションズリサーチ

## 田中郁三 栄誉教授 (1926-2015)

- ・1926 (大正15) 年 東京都出身
- ・1947 (昭和22) 年 東京大学理学部化学科卒業
- ・同年 東京工業大学特別研究生
- ・1958 (昭和33) 年 同大学教授
- ・1985 (昭和60) 年 同大学学長
- ・1989 (平成元) 年 同大学名誉教授 学位授与機構初代機構長
- ・2011 (平成23) 年 同大学栄誉教授

戦後の混乱期に先見性をもって、光化学分野の重要性に注目し、その発展の基礎を築いた。

特に、質量分析のイオン源に真空紫外部の光を用いる方法を世界で初めて考案し、光化学分析を開発した業績は、独創性豊かで国際的にも注目された。世界的にも早期に化学の研究にレーザーを導入し、光と物質の相互作用を分子レベルで研究する分子光化学のパイオニアとなり、それは後の光化学研究の一つの道筋をつけるものとなった。

また、光化学協会を創設したほか、同協会初代会長、日本化学会会長などを務め、国際光化学会議の委員など、国内外の学術の振興に多大な貢献をした。

## 高柳健次郎・電子式テレビジョンの開発研究



最初の実験に用いた送像物「イ」の字を墨で書いた雲母板  
1926 (大正15) 年 12月25日

# 1986-1989年

昭和61～平成元年

1986  
昭和61年  
1987  
昭和62年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
4月1日		理学部に生命理学科、工学部に生物工学科を設置。
10月	百年記念館着工	
11月3日	東京工業大学創立百年記念事業「百年記念館」が竣工、式典を行い開館。 ・延床面積 2,682.02m <sup>2</sup> (地下1階地上4階建)  11月1日 日本国民食株式会社と契約を結び、百年記念館1・4階レストラン・ラウンジで営業を開始	
3月31日	「東京工業大学創立百年記念事業資金募金会」を解散。 (1) 応募額 14億1,348万3,877円 (2) 記念事業状況 (略)	
4月1日		・理学部に生体機構学科、工学部に生体分子工学科を設置。 ・留学生教育センター及び草津白根火山観測所を設置。 ・工業材料研究所附属新素材セラミックス実験施設を廃止し、同附属セラミックス研究センターを設置。
5月29日		遺伝子実験施設を設置。

1988  
昭和63年

1989  
平成元年

展示・講演会	備考	学長・館長
	 3F 談話ロビー  4F レストラン  2F 第2会議室  東京工業大学百年記念館プレート	<p>田中郁三 学長</p>  <p>任期 1985年10月 ～ 1989年10月</p>

## 百年記念館設立当時

2F 第1会議室



2F 第4会議室



2F 第6会議室



1F 喫茶コーナー・談話ロビー企画展示スペース



## 末松安晴 名誉教授 (1932- )

- ・1932 (昭和7) 年 岐阜県出身
- ・1960 (昭和35) 年 東京工業大学大学院博士課程修了
- ・1973 (昭和48) 年 同大学教授
- ・1989 (平成元年) 年-1993 (平成5) 年 同大学学長
- ・1993 (平成5) 年 同大学名誉教授
- ・2011 (平成23) 年 同大学名誉教授

工学院大学特任教授、日本学術振興会監事、工技院産業技術融合領域研究所長、高知工科大学学長、国立情報学研究所長等を歴任。  
長距離大容量の長波長単一モード光ファイバー通信、半導体レーザーの研究を行う。研究には卓抜した先見性を、教育には強い熱意を持って、学術と工業教育の発展に努め、日本はもとより世界から敬慕されている。

# 1990-1996年

平成2～8年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
1990 平成2年	4月1日	大学院理工学研究科に生命理学専攻及び生命工学専攻を設置。
	6月19日	生命理工学部を設置。(理学部の生命理学科、生体機構学科ならびに工学部の生物工学科、生体分子工学科を振替)
1991 平成3年	3月31日	極低温エネルギー実験センターを廃止。
	4月1日	・大学院総合理工学研究科生命化学専攻を知能科学専攻に改称。 ・極低温システム研究センターを設置。
1992 平成4年	4月12日	
	4月1日	・大学院生命理工学研究科を設置。(バイオサイエンス及びバイオテクノロジーの2専攻) ・炭素循環素材研究センターを設置。 ・理学部に地球・惑星科学科を設置。
1993 平成5年	4月1日	・大学院総合理工学研究科に環境物理工学専攻を設置。 ・工学部の機械工学科、生産機械工学科、機械物理工学科、制御工学科及び経営工学科を改組し、機械工学科、機械知能システム学科、機械宇宙学科、制御システム工学科及び経営システム工学科を設置。 ・文教施設総合研究開発センターを廃止し、文教施設研究開発センターを設置。
	10月	
1994 平成6年	4月	大学院情報理工学研究科を設置。(数理・計算科学、計算工学及び情報環境学の3専攻)
	6月24日	・留学生教育センターを廃止し、留学生センターを設置。 ・量子効果エレクトロニクス研究センター及び生物実験センターを設置。
1995 平成7年	4月1日	・大学院総合理工学研究科の社会開発工学及びエネルギー科学専攻を改組し、人間環境システム及び創造エネルギー専攻を設置。 ・工学部化学工学科、機械科学科、電子物理工学科及び土木工学科を改組し、化学工学科、機械科学科、電子物理工学科、土木工学科及び開発システム工学科を設置。
1996 平成8年	4月1日	・大学院社会理工学研究科を設置。(人間行動システム、価値システム、経営工学及び社会学の4専攻) ・理学部地球・惑星科学科を地球惑星科学科に改称。 ・大学院理工学研究科に地球惑星科学専攻を設置。 ・大学院総合理工学研究科の知能科学及びシステム科学専攻を改組し、知能システム科学専攻を設置。
	5月	・外国語研究教育センターを設置。 ・工業材料研究所を改組し、応用セラミックス研究所を附置。 ・工業材料研究所附属セラミックス研究センターを改組し、応用セラミックス研究所附属構造デザイン研究センターを設置。

展示・講演会	備考	学長・館長
		<b>末松安晴</b> 学長  任期 1989年10月 ～ 1993年10月
		<b>木村孟</b> 学長  任期 1993年10月 ～ 1997年10月
 [窯変象嵌縄文壺]	 [塩釉象嵌縄文大皿]	島岡達三氏、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。 (民芸陶器 [縄文象嵌])

**木村 孟 名誉教授 (1938- )**

- ・1938 (昭和13) 年 東京都出身
- ・1961 (昭和36) 年 東京大学工学部土木工学科卒業
- ・1961 (昭和36) 年 東京工業大学土木工学科助手
- ・1968 (昭和43) 年 同大学土木工学科助教授
- ・1982 (昭和57) 年 同大学土木工学科教授
- ・1993 (平成5) 年-1996 (平成8) 年 同大学学長
- ・1998 (平成10) 年 学位授与機構 (現: 大学評価学位授与機構) 長

専門分野: 土質力学、地盤工学  
その後文部科学省顧問、東京都教育委員会委員長を兼務。欧米各国の高等教育に精通し、国際的視野から高等教育のあり方に提言・指導を行った。

**生命理工学部設置**



日本初のバイオ系学科である生命理工学部の紹介パンフレット

**島岡達三 氏 (1919-2007)**



- ・1919 (大正8) 年 東京都出身
- ・1941 (昭和16) 年 東京工業大学窯業科卒業
- ・陶芸家、人間国宝 (民芸陶器・縄文象嵌)

1946年、濱田庄司氏に師事し、共に古代土器、縄文の技法を研究していた。その後、組紐の転がし方によってできる様々な縄文の窪みに白土を象嵌することで、新しい文様が生まれる縄文象嵌の技法を編み出した。

また、李朝陶器の三島象嵌にも多大な影響を受けたため、島岡の縄文象嵌は益子の土と釉薬を使う益子陶芸を基礎としながらも、日本古代の縄文土器、江戸組紐、さらに李朝三島手で形成されている。島岡氏は、地釉、流文、塩釉、などの陶技を駆使した独自性のある作品を発表し、90年代以降は、これら技法を互いに重ねて用いている。技術的には複合的、効果としては色彩と釉調の変化が強められ、独創的な作品を数多く残した。また、陶芸における指導は国内外に広く及び、その普及活動は高く評価されている。

# 1996-2000年

平成8~12年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
1996 平成8年	9月6日 ~8日	
1997 平成9年	4月1日	・アイソトープ総合センターを設置。 ・大学院総合理工学研究科の電子化学及び材料科学専攻を改組し、物質電子化学、材料物理学及び物質科学創造の3専攻を設置。
1998 平成10年	11月3日 4月1日	・大学院理工学研究科の数学、物理学、化学、応用物理学、地球惑星科学、金属工学（一部）、有機材料工学（一部）、無機材料工学（一部）、化学工学（一部）及び高分子工学専攻（一部）を改組し、数学、基礎物理学、物性物理学、化学、地球惑星科学及び物質科学専攻を設置。 ・大学院総合理工学研究科の化学環境工学及び環境物理工学専攻を改組し、化学環境学及び環境理工学創造専攻を設置。 ・理学部数学科、物理学科、化学科、応用物理学科、情報科学科及び地球惑星科学科を改組し、数学科、物理学科、化学科、情報科学科及び地球惑星科学科を設置。 ・研究・情報交流センターを廃止し、フロンティア創造共同研究センターを設置。
1999 平成11年	4月1日 4月9日	・理財工学研究センターを設置。 ・大学院理工学研究科に国際開発工学専攻を設置し、金属工学、有機材料工学、無機材料工学、化学工学及び高分子工学専攻を改組し、材料工学、有機・高分子物質、応用化学及び化学工学専攻を設置。 ・大学院生命理工学研究科のバイオサイエンス（一部）及びバイオテクノロジー（一部）専攻を改組し、分子生命科学、生命情報及び生体分子機能工学の3専攻を設置。 ・大学院総合理工学研究科の物理情報工学及び電子システム専攻を改組し、物理情報システム創造及び電子機能システム専攻を設置。 ・生命理工学部生命学科、生体機構学科、生物工学科及び生体分子工学科を改組し、生命科学科及び生命工学科を設置。
2000 平成12年	3月21日 ~3月25日	・中澤三千彦氏が同級生島岡達三氏の人間国宝を祝い、保有の作品110点を本学に寄贈。 ・内藤学長のはからいで本館地階に、陶磁器等収蔵庫（延床面積：43m <sup>2</sup> ）が新設された。

展示・講演会	備考	学長・館長
文部省国立磐梯青年の家からの要望で「磐梯博覧会'96」が開催された。国立科学博物館、東大、東北大等、24団体と共に「東工大百年記念館」が参加し、所蔵品の実物展示とスターリングエンジンやリボン織機、地震振動装置等の実演を行った。展示品には、東工大が発明した歯車、ロボット、マイクロマシン、水晶時計、ホログラム、マイクロ波・ミリ波通信装置、フェライトなどがあり、多数の参観者があった。		
 		
向山光昭名誉教授（有機化学）、文化勲章受章		<b>内藤喜之</b> 学長  任期 1997年10月 ~ 2001年10月
 		
  		
「古賀逸策生誕百年記念展・講演会～光輝く水晶の業績～」 記念講演会：平成12年3月24日		

## 内藤喜之 名誉教授 (1936-2011)

- ・1936 (昭和11) 年 大分県出身
- ・1959 (昭和34) 年 東京工業大学理工学部電気工学課程卒業
- ・1980 (昭和55) 年 同大学工学部教授
- ・1997 (平成9) 年-2001 (平成13) 年 同大学学長
- ・2002 (平成14) 年 大分大学学長
- ・2003 (平成15) 年 大分大学名誉教授

専門分野：電磁波工学

## 本館収蔵庫



## 古賀逸策 名誉教授 (1899-1982)



- ・1899 (明治32) 年 佐賀県出身
- ・1923 (大正12) 年 東京帝国大学電気工学科卒業
- ・1929 (昭和4) 年 東京工業大学助教授
- ・1939 (昭和14) 年 同大学教授
- ・1944 (昭和19) 年 東京大学教授を兼任
- ・1946 (昭和21) 年 東京大学専任 東工大を兼任
- ・1960 (昭和35) 年 両大学を定年退職し名誉教授

水晶板の切り出し方に着目し、1932年に温度変化による影響を100分の1に抑えることができた切り出し方（R1カット、R2カット）を発見し、高安定な水晶振動子を実現した。〈古賀カット〉とも呼ばれるこの水晶振動子の実現により、無線通信の品質は大幅に向上。同時に、日本標準時刻装置などの時計開発へと発展する。

## 向山光昭 名誉教授 (1927-2018)



- ・1927 (昭和2) 年 長野県出身
- ・1948 (昭和23) 年 東京工業大学化学課程卒業
- ・1963 (昭和38) 年 東京工業大学教授
- ・1973 (昭和48) 年 東京大学教授
- ・東京大学名誉教授、東京工業大学名誉教授

尿素ならびに、ウレタン類の熱解離反応の機構に関する研究において、ニトロアルカンが脱水されニトリルオキシドが生成するという新反応を見出した。続いてリン酸化反応・開環重合反応など独創的な反応を次々開発した。さらに「酸化-還元縮合」と呼ばれる新しい形式の縮合反応、そしてアルドール反応など一連の有用な合成反応を開発した。このように立体選択的合性を中心とする独自の研究領域を、有機合成化学の分野に開拓した。

# 2000-2001年

平成12~13年

2000  
平成12年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
4月1日		<ul style="list-style-type: none"> <li>草津白根火山観測所を廃止し、火山流体研究センターを設置。</li> <li>大学院理工学研究科の機械工学、生産機械工学、機械物理学、制御工学、電気・電子工学、電子物理学、土木工学及び建築学専攻を改組し、機械物理学、機械制御システム、機械宇宙システム、電気電子工学、電子物理学、集積システム、土木工学及び建築学専攻を設置。</li> <li>像情報学研究施設を工学部附属施設から大学院理工学研究科附属施設へ移行。</li> <li>大学院生命理工学研究科バイオサイエンス及びバイオテクノロジー専攻を改組し、生体システム及び生物プロセスの2専攻を設置。</li> <li>工学部電気・電子工学科、電子物理工学科及び情報工学科を改組し、電気電子工学科及び情報工学科を設置。</li> <li>精密工学研究所に附属マイクロシステム研究センターを設置。</li> <li>副学長制度を導入し、副学長（教育担当）及び副学長（研究担当）を設置。</li> <li>国際高分子基礎研究センターを設置。</li> </ul>
5月		広報センターを設置。
12月10日		
12月15日		
12月21日		
3月15日		四大学（東京医科歯科大学、東京外国語大学、一橋大学、東京工業大学）連合憲章を締結。
4月1日		<ul style="list-style-type: none"> <li>総合情報処理センター及び理工学国際交流センターを廃止し、学術国際情報センターを設置。</li> <li>極低温システム研究センターを廃止し、極低温物性研究センターを設置。</li> </ul>
5月25日		<ul style="list-style-type: none"> <li>長津田キャンパスをすずかけ台キャンパスと改称。</li> <li>附属図書館長津田分館をすずかけ台分館と改称。</li> </ul>
6月19日 ~6月21日		
11月5日		研究戦略室を設置。（学内措置）

2001  
平成13年

展示・講演会	備考	学長・館長
	白川英樹博士がノーベル化学賞、文化勲章受章。 「導電性高分子ポリアセチレンの発見と開発」	
中澤三知彦氏寄贈 島岡達三作陶展 白川博士のノーベル賞受賞の記念展示コーナーを設置。		
	情報公開法施行	ノーベル賞受賞式
第2回特別展示・講演会 「島岡達三陶芸作品特別展・講演会」 記念講演会：平成13年6月19日		
		

## 中澤三知彦 氏 (1916-2010)



左から内藤喜之、中澤三知彦、島岡達三  
2000年12月15日 東工大百年記念館

- ・1916 (大正5) 年 東京都出身
- ・1941 (昭和16) 年 東京工業大学窯業科卒業
- 品川白煉瓦株式会社入社
- 日本銅管技術研究者
- 大橋化学工業
- 大橋化学工業株式会社代表取締役社長
- ・2000 (平成12) 年 人間国宝 島岡達三作品110点寄贈

## 寄贈作品110点



最後部の大きな壺は島岡達三氏からの寄贈  
他は全て中澤三知彦氏からの寄贈

## 白川英樹 博士 (1936- )



- ・1936 (昭和11) 年 東京都出身
- ・1966 (昭和41) 年 東京工業大学大学院理工学研究科化学工学専攻博士課程修了
- ・1966 (昭和41) 年 同大学資源化学研究所助手
- ・1979 (昭和54) 年 筑波大学助教授
- ・1982 (昭和57) 年 同大学教授
- ・2000 (平成12) 年 同大学を定年退官し名誉教授

ノーベル化学賞を受賞したのは「導電性高分子の発見と開発」であった。1967 (昭和42) 年、濃厚なZeigler-Natta触媒を用いてフィルム状のポリアセチレンが合成されることを発見、さらに構造解析の研究を重ねて発表した。この製法は「Shirakawa Method」として広く世界に知られたが、この時点ではまだ電気伝導度が低かった。昭和47年A.J.Heeger教授、A.G.MacDiarmid教授との共同研究により、フィルムにハロゲンをドーピングすると電気伝導度が12桁上昇することを発見した。この成果は、有機高分子物質が金属に匹敵する高い導電性をもつという高分子化学と固体物理学の新しい研究領域を切り開き、その後の伝導性高分子の発展と応用につながった。



ノーベル賞証書

# 2002-2004年

平成14~16年

年次	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
2002 平成14年	4月1日	・炭素循環素材研究センターを廃止し、炭素循環エネルギー研究センターを設置。 ・総合理工学研究科等事務部をすずかけ台地区事務部と改称。 ・評価室及び国際室を設置。(学内措置)
	7月10日 ~7月12日	
2003 平成15年	10月1日	・総合安全管理センターを設置。 ・広報センターを改組し、広報・社会連携センターを設置。
	1月23日	石井勢津子氏寄贈プログラム点灯式を開催。
	4月1日	・文教施設研究開発センターを廃止、教育環境創造研究センターを設置。 ・遺伝子実験施設、生物実験センター及びアイソトープ総合センターを廃止し、バイオ研究基盤支援総合センターを設置。 ・大学院総合理工学研究科精密機械システム専攻をメカノマイクロ工学専攻と改称。 ・東京工業大学キャンパス・イノベーションセンターを設置。
	4月11日	
	5月15日	教育推進室を設置。(学内措置)
	9月1日 9月5日	・都市地震工学センターを設置。(学内措置) ・産学連携推進本部を設置。(学内措置)
	10月15日 ~10月18日	
2004 平成16年	11月3日	
	4月1日	・国立大学法人 東京工業大学を設立。 ・量子効果エレクトロニクス研究センターを廃止し、量子ナノエレクトロニクス研究センターを設置。 ・企画室及び財務管理室を設置。
	5月28日 ~6月4日	
	10月5日 ~10月10日	特別展示室に展示用大型ガラスケース設置。使用に際し常時安定した開閉をするため、優れた実績を有するドイツ製を採用し、工事に際しても経験豊かなドイツ人に依頼。その万事を建築の安田幸一教授が指揮した。
12月14日 ~12月18日		

展示・講演会	備考	学長・館長
第3回特別展示・講演会 「中田孝記念展示・講演会～学遊一如の多彩な人生～」 記念講演会：平成14年7月12日		<b>相澤益男</b> 学長  任期 2001年10月 ~ 2007年10月
第4回特別展示・講演会 「神原周記念展示・講演会～高分子時代への道～」 記念講演会：平成15年10月17日		
		末松安晴元学長（電子工学）、文化功労者顕彰
辻内順平名誉教授プログラムコレクション 特別展示		
第5回特別展示・講演会「G.ワグネルが開いた近代の日本陶芸・先端セラミックスの美・用・学の世界」 ワグネル記念学術講演会：平成16年10月8日 一般講演会：平成16年10月10日		第5回 特別展示
第6回特別展示 電子顕微鏡がみせる新たな世界 「ナノワールド展」～ナノからピコへの挑戦～		第6回 特別展示

**相澤益男 名誉教授 (1942- )**

- ・1942 (昭和17) 年 神奈川県出身
- ・1966 (昭和41) 年 横浜国立大学卒業
- ・1971 (昭和46) 年 東京工業大学大学院博士課程修了
- ・1986 (昭和61) 年 東京工業大学教授
- ・2001 (平成13) -2007 (平成19) 年 同大学学長

内閣府総合科学技術会議常勤議員  
専門分野：生物工学、電気化学、バイオセンサ、バイオエレクトロニクス

**中田 孝 名誉教授 (1908-2000)**



- ・1908 (明治41) 年 東京都出身
- ・1932 (昭和7) 年 東京工業大学機械科卒業 (大学昇格後第一回卒業生)
- ・1944 (昭和19) 年 同大学教授
- ・1968 (昭和43) 年 同大学名誉教授

歯車工学および制御工学の分野で先駆的研究業績をあげた。

**神原 周 名誉教授 (1908-2000)**



- ・1906 (明治39) 年 東京都出身
- ・1930 (昭和5) 年 早稲田大学理工学部応用化学科卒業
- ・1939 (昭和14) 年 東京工業大学助教授
- ・1945 (昭和20) 年 同大学教授
- ・1967 (昭和42) 年 同大学名誉教授

専門分野：石油化学、高分子化学

**G・ワグネル (1831-1892)**



- ・1831年 ドイツハノーバー出身
- ・1851年 ゲッチンゲン大学卒業
- ・1852年 ゲッチンゲン大学にて博士学位取得
- ・1868 (明治元) 年 来日
- ・1871 (明治4) 年 大学南校ドイツ語・化学・数学教師となる
- ・1881 (明治14) 年 東京職工学校設立
- ・1884 (明治17) 年 東京職工学校の教師となり、窯業学を開講
- ・1886 (明治19) 年 ワグネルの提言で陶器玻璃工科を設置

# 2005-2007年

平成17~19年

2005  
平成17年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
4月1日	地下改修工事	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学院イノベーションマネジメント研究科を設置。(技術経営及びイノベーションの2専攻)</li> <li>工学部附属工業高等学校を改組し、大学附属科学技術高等学校を設置。</li> <li>理財工学研究センター(学内共同教育研究施設)を廃止し、理財工学研究センター(共通施設)を設置、大規模知識資源センター、インスティテューショナル技術経営学研究センター、量子ナノ物理学研究センター、バイオフィロンティアセンター、エージェントベース社会システム科学研究センター、分子理工学センター、地球史研究センター、ものづくり教育研究支援センターを設置。</li> <li>大学院総合理工学研究科物理情報システム創造専攻及び電子機能システム専攻を改組し、物理電子システム創造及び物理情報システムの2専攻を設置。</li> </ul>
9月1日		先進ナノマテリアル研究センターを設置。
10月1日		統合研究院を設置。
11月3日		
1月1日		革新的原子力研究センターを設置。
4月1日		<ul style="list-style-type: none"> <li>応用セラミックス研究所附属構造デザイン研究センターを廃止し、同附属セキュアマテリアル研究センターを設置。</li> <li>スーパーメカノシステム創造開発センター、学生支援センター、世界文明センターを設置。</li> </ul>
5月11日~5月23日		
7月1日		グローバルエッジ研究院を設置。
7月22日~7月30日		
11月13日~11月25日		
12月15日		集積光電子工学研究センターを設置。
3月26日~10月27日		<ul style="list-style-type: none"> <li>4月1日 入試室、技術部を設置。</li> <li>工学部土木工学科を土木・環境工学科と改称。</li> </ul>

2006  
平成18年

2007  
平成19年

展示・講演会	備考	学長・館長
		田中郁三元学長(物理化学)、文化功労者顕彰
第7回特別展示・講演会「ホログラフィ」～サイエンスからアートへ～ 講演会：辻内順平、山口雅浩 平成18年5月19日		
第8回特別展示・講演会「先端ロボットの世界～社会に役立つロボットの創造～」 実行委員長：広瀬茂男教授 講演会：平成18年7月22日～30日		
萬來舎写真展「谷口吉郎とイサムノグチ～建築と彫刻のコラボレーション～」(於:70周年記念講堂) シンポジウム：11月25日		
ローテーション展示「東工大陶磁器コレクション 島岡達三」	<ul style="list-style-type: none"> <li>19年度 第1回サイエンスカフェ 5月31日「これであなかもトレジャーハンター!?—科学の力で遺跡を発見—」</li> <li>第2回サイエンスカフェ 6月22日「コンピューターグラフィックスの世界」</li> <li>第3回サイエンスカフェ 7月20日「言葉の科学でお茶しませんか？」</li> </ul>	

## 百年記念館地下展示室

地下展示室A



地下展示室B

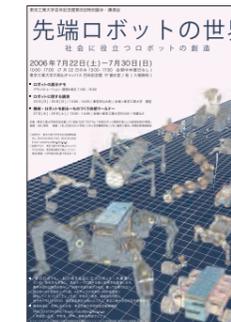


## 特別展示・講演会

第7回チラシ・ポスター



第8回チラシ・ポスター



「東工大陶磁器コレクション 島岡達三」チラシ



# 2007-2009年

平成19～21年

2007  
平成19年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
7月19日～7月28日		・男女共同参画推進センターを設置。 ・プロダクティブリーダー養成機構を設置。
10月10月24日		・情報基盤統括室を設置。 ・広報・社会連携センターを廃止し、広報センター、社会連携センターを設置。 ・経営戦略室を設置。
11月1日		フロンティア創造共同研究センター、総合研究館、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー及びインキュベーションセンターを統合し、フロンティア研究センターを設置。
4月1日		・精密工学研究所に附属セキュアデバイス研究センターを設置。 ・工学部開発システム工学科を国際開発工学科に改称。 ・太陽光発電システム研究センターを設置。 ・情報系教育研究機構を設置。
5月22日6月27日		
7月17日～7月26日		
10月2日～10月21日		
(平成20)年11月22日～(平成21)年3月18日		
3月6日		東工大蔵前会館を設置。
7月1日	公文書管理法公布	

2008  
平成20年

2009  
平成21年

展示・講演会	備考	学長・館長
第9回特別展示・講演会：「進化するスーパーバイオワールド」 広瀬茂久実行委員長 平成19年7月19日～7月28日 講演会：平成19年7月25日		<p>伊賀健一 学長</p>  <p>任期 2007年10月 ～ 2012年9月</p>
	・第4回サイエンスカフェ 10月25日「インターネット大航海時代～インターネットを渡る海図を手に入れろ～」 ・第5回サイエンスカフェ 11月22日「世界の地図とニュースで遊ぼう！」 ・第6回サイエンスカフェ 12月20日「見える！脳の動き」 ・第7回サイエンスカフェ 1月10日「人間とコンピュータの自然なコミュニケーション方法—音声認識・音声合成ってナニ？」	
	・20年度 第1回サイエンスカフェ 5月22日「オアシスのいざない～エジプト西方砂漠～」 ・第2回サイエンスカフェ 6月27日「計算で何が出来るか？～日本最速コンピュータ、TUBAMEを体験してみよう～」	
第10回特別展示・講演会：末松安晴・伊賀健一「光で拡がるネットワーク～レーザと光通信～」 平成20年7月17日～7月26日 講演会：平成20年7月24日	第3回サイエンスカフェ 7月18日「光と通信、そして私たち」	
第11回特別展示・講演会「坂本一成 建築展『日常の詩学』」 平成20年10月2日～10月21日 シンポジウム：平成20年10月8日		
特別企画 機械遺産第3号「足踏旋盤」里帰り展示・講演会～マザーマシンの原点にみる～ 平成20年11月22日	第4回サイエンスカフェ 11月20日「篤姫、江戸城、大奥」	
	・21年度 第1回サイエンスカフェ 6月25日「土づくり～形づくり～焼きものづくり」 ・第2回サイエンスカフェ 7月31日「地域を知って見えてくる～安心・安全と防災情報システム～」	

## 伊賀健一 名誉教授 (1940- )

- ・1940 (昭和15) 年 広島県出身
- ・1959 (昭和34) 年 東京工業大学入学
- ・1968 (昭和43) 年 同大学大学院理工学研究科博士課程修了
- ・1979 (昭和54) 年～80 (昭和55) 年 ベル研究所客員
- ・1984 (昭和59) 年 同大学教授
- ・2007 (平成19) 年 同大学学長
- ・2012 (平成24) 年 同大学名誉教授

半導体レーザーや微小光学を中心とした光エレクトロニクスの研究を推進した。半導体表面から垂直に光を発する面発光レーザーのアイデアを生み出し実用化を成し遂げた。2007年-2012年東京工業大学学長を務めた。創立130周年を迎えた2011年記念事業を推進した。

## 東工大蔵前会館



## 特別展示・講演会

第9回チラシ・ポスター



第10回チラシ・ポスター



第11回チラシ・ポスター



# 2009-2011年

平成21～23年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
2009 平成21年	(平成21)年7月1日～(平成22)年3月31日	IEEEマイルストーン受賞記念式典「フェライトの発明とその工業化」 2009年10月13日
2010 平成22年	4月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>精密工学研究所附属マイクロシステム研究センターを廃止し、同附属フォトニクス集積システム研究センターを設置。</li> <li>原子炉工学研究所に附属原子力国際共同研究センターを設置。</li> <li>大学院理工学研究科附属像情報工学研究施設を廃止し、像情報工学研究所を設置。</li> <li>フロンティア研究センターを廃止し、フロンティア研究機構を設置</li> <li>ソリューション研究機構を設置。</li> <li>炭素循環エネルギー研究センター（学内共同研究教育施設）を廃止し、炭素循環エネルギー研究センター（共通施設）を設置。</li> <li>先進教育研究機構を設置。</li> <li>浸透圧発電研究センターを設置。</li> <li>大規模知識資源センターを廃止。</li> <li>旧統合研究院を廃止し、新たに新統合研究院を設置。</li> </ul>
	7月22日	百年記念館2階展示室及び地球史資料室新展示室を開室。
	10月1日	省エネルギー推進室を設置。
	11月1日	<ul style="list-style-type: none"> <li>極低温物性研究センター（学内共同研究教育施設）を廃止し、極低温物性研究センター（共通施設）を設置。</li> <li>ライフ・エンジニアリング機構を設置。</li> <li>経営戦略室を廃止。</li> </ul>
	11月4日～12月3日	
2011 平成23年	1月7日	リベラルアーツセンターを設置。
	2月18日	東京工業大学博物館（仮称）設立準備部会報告書（議決日 平成23年2月7日）報告書の日付は平成23年2月18日 委員：大学院総合理工学研究科教授 三島良直（主査）、大学院情報理工学研究科教授 亀井宏行、大学院生命理工学研究科教授 広瀬茂久、大学院理工学研究科准教授 奥山信一、道家達将 特命教授 オブザーバー：大倉一郎 理事・副学長（企画担当）、牟田博光 理事・副学長（経営担当）、遠藤康一 百年記念館特任助教、阿見雄之 百年記念館特任助教、久保進 財務部長、真子博 研究推進部長、佐藤正弘 総務部長

展示・講演会	備考	学長・館長
ローテーション展示「島岡達三 回顧ローテーション展示」	・第3回サイエンスカフェ 9月5日「古くて新しいエコ～スターリングエンジンと燃料電池～」 ・第4回サイエンスカフェ 3月17日「ロボットと心」	
	22年度 第1回サイエンスカフェ 7月9日「計算で世界を見てみよう 数学とコンピュータの現在」	
第12回特別展示・講演会「東工大大岡山キャンパス～その歴史と未来～」 シンポジウム：平成22年11月12日		

## 百年記念館2階展示室・地球史資料室

旧地球史展示室（現在：企画展示室）



撮影：上田 宏

東京職工学校創設～新制東工大の発展展示室



## 百年記念館2階展示室

電気～光／通信の先端研究史展示室



百年記念館 篠原一男展示室



## 特別展示・講演会

第12回チラシ・ポスター



# 2011-2012年

平成23～24年

2011  
平成23年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
3月4日	・東京工業大学博物館規則制定 ・すずかけ台キャンパスに博物館 すずかけ台分館を設置。	
3月31日	22文科生第1038号 博物館に相当する施設の指定認定。	
4月1日	・東京工業大学博物館設立 東京工業大学百年記念館の管理運営は博物館が行うことになり、東京工業大学百年記念館規則（平成16年規則第146号）は、廃止された。 ・公文書管理法施行	・教育学開発センター（学内共同研究教育施設）を廃止し、教育学開発センター（共通施設）を設置。 ・地球データベースセンターを設置。 ・異種機能集積研究センターを設置。 ・総合分析支援センターを廃止。 ・グローバルリーダー教育院を設置。
5月30日	第1回博物館運営委員会を開催 館長：大倉一郎 議長：三島良直教授	創立130周年
8月1日		大学情報活用センターを設置。
10月1日		・バイオ研究基盤支援総合センターの一部を改組し、放射線総合センターを設置。 ・アドミッションセンターを設置。
12月7日		・環境エネルギー協創教育院を設置。 ・情報生命博士教育院を設置。 ・グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院を設置。
3月24日		
4月1日		・先進ナノマテリアル研究センターを廃止。 ・集積光電子工学研究センターを廃止。 ・アーカイブ推進機構を廃止。

2012  
平成24年

展示・講演会	備考	学長・館長
	<b>3.11 東日本大震災</b>	
	・3月5日 目黒区教育委員会連携講座「もっと身近にサイエンス！」分科会1：中川茂樹/分科会2：齊藤卓志 ・22年度 第2回サイエンスカフェ 3月25日「地球ってなに？～生命・地球・宇宙の研究を体験しよう！～」 東日本大震災のため2011年12月12日に延期	<b>大倉一郎</b> 館長  初代館長 任期 2011年4月 ～ 2011年9月
常設企画「技術と芸術のはざままで」	23年度 第1回サイエンスカフェ 10月23日「きて、みて、しる はじめての東工大・大岡山キャンパス」	<b>飯塚久夫</b> 館長  二代目館長 任期 2011年10月 ～ 2012年10月
	23年度 第2回サイエンスカフェ 12月12日「地球ってなに？～生命・地球・宇宙の研究を体験しよう！～」	
	目黒区教育委員会連携講座「もっと身近にサイエンス！みんなの未来のエネルギー」山田明 教授・齊藤卓志 准教授・川本思心 特任助教・植田譲 助教	

## 22文科生第1038号



博物館に相当する施設の指定認定書

## 大倉一郎 初代館長（1944-）

- ・1944（昭和19）年 東京都出身
- ・1968（昭和43）年 東京工業大学理学工学部卒
- ・1973（昭和48）年 同大学大学院理工学研究科博士課程修了
- ・1973（昭和48）年 プリンストン大学化学科博士研究員
- ・1974（昭和49）年 東京工業大学助手
- ・1988（昭和63）年 同大学工学部教授
- ・2007（平成19）年 同大学理事・副学長
- ・2011（平成23）年 同大学博物館初代館長

専門分野：生物工学、触媒化学

## 飯塚久夫 二代目館長（1948-）

- ・1948（昭和23）年2月18日 群馬県出身
- ・1972（昭和46）年 東京工業大学大学院理学研究科博士課程修了
- ・1972（昭和46）年 日本電信電話公社（現：日本電信電話株）入社
- ・2011（平成23）年10月～2012（平成24）年10月 東京工業大学理事・副学長  
同時に同大学博物館館長就任

専門分野：音響工学

## 東日本大震災情報



大岡山キャンパス ウッドデッキの様子

# 2012-2013年

平成24～25年

2012  
平成24年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
7月20日	「21世紀の個性輝く東京工業大学検討委員会」の下に伊賀学長の指名により、小委員長に飯塚久夫 主査（理事・副学長、博物館館長）、岸本喜久雄教授（副学長）、広瀬茂久 生命理工学研究科教授（副査）、亀井宏行（情報理工学研究科教授）、奥山信一（理工学研究科教授）ら19名が選出された。	
8月1日		元素戦略研究センターを設置。
10月		アジア・アフリカ生物多様性・バイオテクノロジー研究センターを廃止。
10月18日～10月28日		
11月	部局長の交代を受け東京工業大学博物館運営委員会を飯塚久夫氏・西森秀稔氏・丸山俊夫氏に変更	
12月7日		地球生命研究所を設置。
3月23日		
3月31日	株式会社ニッコトラストとの契約終了 1・4階「角笛」閉店	
4月1日	東京工業大学博物館に資料館部門が設置された。（クロニクル No.488, Jun 2013, 11-12頁）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会連携センター及び創立130周年事業統括本部を統合し、社会連携本部を設置。</li> <li>・大学院理工学研究科集積システム専攻を通信情報工学専攻に改称。</li> <li>・教育環境創造研究センターを廃止し、教育施設環境研究センターを設置。</li> <li>・地球史研究センターを廃止。</li> <li>・計算世界観研究センターを廃止。</li> <li>・量子ナノ物理学研究センターを廃止し、ナノサイエンス・量子物理学国際研究センターを設置。</li> <li>・イノベーション人材養成機構を設置。</li> <li>・プロダクティブリーダー養成機構を廃止。</li> </ul>

2013  
平成25年

展示・講演会	備考	学長・館長
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・24年度 第1回サイエンスカフェ 7月21日「超分子化学：ナノサイズのカプセルを作る！」</li> <li>・第2回サイエンスカフェ 9月13日「シロアリはマトリョーシカ!？」</li> </ul>	
特別展示2012「東工大で益子焼～知る・ふれる・つかう～」 講演会：10月19日 シンポジウム：10月23日		<p>三島良直 学長</p>  <p>任期 2012年10月 ～ 2018年3月</p>
	目黒区教育委員会連携講座「もっと身近にサイエンス！～エネルギー変換って何だ？太陽電池、燃料電池のしくみとこれからのエネルギーシステム～」井原学 准教授	<p>大谷清 館長</p>  <p>三代目館長 任期 2012年10月 ～ 2016年3月</p>

## 特別展示2012 (H24.10.18～10.28)

「東工大で益子焼～知る・ふれる・つかう～」



## 三島良直 名誉教授 (1949- )

- ・1949 (昭和24) 年6月10日 福岡県出身
- ・1973 (昭和48) 年3月 東京工業大学工学部卒業
- ・1975 (昭和50) 年3月 同大学大学院理工学研究科 修士課程 修了
- ・1979 (昭和54) 年8月 カリフォルニア大学バークレー校 大学院 博士課程 修了
- ・1981 (昭和56) 年5月 東京工業大学 精密工学研究所 助手
- ・1989 (平成元) 年11月 同大学精密工学研究所 助教授
- ・1997 (平成9) 年4月 同大学大学院総合理工学研究科 材料物理学専攻 教授
- ・2012 (平成24) 年10月 同大学学長
- ・2016 (平成28) 年 教育研究組織改革を実施
- ・2018 (平成30) 年4月 同大学名誉教授

専門分野：耐熱材料 熱電材料 材料制御

## 大谷清 三代目館長 (1947年- )

- ・1947 (昭和22) 年11月 兵庫県出身
- ・1970 (昭和45) 年 東京大学法学部卒業
- ・1993 (平成5) 年 日経ビジネス編集長
- ・2011 (平成23) 年 (株)大阪チタニウムテクノロジーズ監査役
- ・2012 (平成24) 年～2016 (平成28) 年 東京工業大学理事・副学長  
同時に三代目博物館長就任

## サイエンスカフェ

第1回サイエンスカフェ  
チラシ



第2回サイエンスカフェ  
チラシ



# 2013-2015年

平成25～27年

2013  
平成25年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
8月		国際高分子基礎研究センターを廃止。
10月1日～10月8日		総合プロジェクト支援センターを改組し、研究戦略推進センターを設置。
10月1日～10月13日		
(平成25)年10月18日～(平成26)年3月		
4月1日		・インスティテューショナル技術経営学研究センターを廃止。 ・浸透圧発電研究センターを廃止。 ・グローバルエッジ研究院を廃止。
5月25日～6月30日		
7月4日		教育改革推進本部を大学改革推進本部に名称変更。
10月11日～10月31日		
12月5日	平成26年12月15日～平成27年6月30日 百年記念館1・3・4階改修工事のため一部閉鎖(エレベーター及び博物館と融合した情報発信・ラーニングスペースの整備のため)	国際教育研究協働機構を設置。
3月		
4月		・教育工学開発センターを廃止、教育革新センターを設置、コンプライアンス室を教育研究資金適正管理室に改組。 ・『以心電心』ハビネス共創研究推進機構を設置。 ・情報活用IR室を設置。

2015  
平成27年

展示・講演会	備考	学長・館長
常設企画 新規収蔵品紹介(1)		
日本ポルトガル友好470周年記念行事「エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ コンペティション」巡回展 シンポジウム：10月5日		
日本ポルトガル友好470周年記念行事「白須純 ポルトガル・アズレージョとの語らい」展 シンポジウム：10月12日		
常設企画 電気を見る/大正～昭和の機器 新規収蔵品紹介(2)	25年度 第1回サイエンスカフェ 11月12日「計算の限界って？」	
	3月15日 目黒区教育委員会連携講座「もっと身近にサイエンス! バイオを学ぼう!」 田守正樹 助教	
企画展示「東工大 POTTERY CAMP」報告展		
特別企画展示2014『核時代を生きた科学者 西脇安』 記念シンポジウム：10月24日	11月 山本明夫名誉教授(有機金属化学)、文化功労者顕彰	
		
	・3月8日 目黒区教育委員会連携講座「もっと身近にサイエンス! 超分子化学: ナノカプセルを作る!」 吉沢道人 准教授 ・3月27日 サイエンスカフェ「腸内細菌ってなんだ?」 山田拓司 准教授	

## 日本ポルトガル友好470周年記念行事



「エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ コンペティション」巡回展



「白須純 ポルトガル・アズレージョとの語らい」展

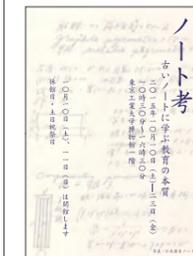
## 「東工大 POTTERY CAMP」成果報告展

ポスター



## ノート孝—古いノートに学ぶ教育の本質—

チラシ・ポスター



# 2015-2016年

平成27~28年

2015  
平成27年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
5月19日～6月26日		
7月3日		危機管理室をコンプライアンス・危機管理室に改組。
10月10日～10月23日		
(平成27)年11月2日～(平成28)1月29日		国際アドバイザーボードを設置。
2月20日		
3月30日		
4月1日		<p>教育研究組織の改革により、次の通り組織の設置改廃及び名称変更が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学院理工学研究科、大学院生命理工学研究科、大学院総合理工学研究科、大学院情報理工学研究科、大学院社会理工学研究科、大学院イノベーションマネジメント研究科、理学部、工学部及び生命理工学部を理学院、工学院、物質理工学院、情報理工学院、生命理工学院、環境・社会理工学院に改組。</li> <li>リベラルアーツ研究教育院及び科学技術創成研究院を設置。</li> <li>留学生センター、外国語研究教育センター及びリベラルアーツセンターをリベラルアーツ研究教育院に改組。</li> <li>資源化学研究所、精密工学研究所、応用セラミックス研究所、原子炉工学研究所、像情報工学研究所、フロンティア研究機構、ソリューション研究機構、量子ナノエレクトロニクス研究センター、建築物理研究センター、異種機能集積研究センター及び統合研究院を科学技術創成研究院（未来産業技術研究所、フロンティア材料研究所、化学生命科学研究所、先端原子力研究所、先進エネルギー国際研究センター、社会情報流通基盤研究センター及び10研究ユニット）に改組。</li> <li>理財工学研究センターを理財科学研究センターに名称変更。</li> <li>国際教育推進機構を設置。</li> <li>社会人教育院を社会人アカデミーに名称変更。</li> <li>極低温物性研究センターを極低温研究支援センターに名称変更。</li> <li>炭素循環エネルギー研究センター、都市地震工学センター、バイオフロンティアセンター、エージェントベース社会システム科学研究センター、分子理工学センター、革新的原子力研究センター、スーパーメカノシステム創造開発センター、世界文明センター、太陽光発電システム研究センター、情報系教育研究機構、環境エネルギー機構、先進教育研究機構、ライフ・エンジニアリング機構、地球データベースセンター、ナノサイエンス・量子物理学国際研究センターを廃止。</li> <li>大学改革推進本部及び国際教育研究協働機構を改組し、企画戦略本部を設置。</li> <li>内部監査室を監査室に名称変更。</li> </ul>
6月26日～7月24日		キャンパス整備計画室を廃止。
10月3日		

2016  
平成28年

展示・講演会	備考	学長・館長
企画展示「東工大POTTERY CAMP」成果報告展 於：益子陶芸美術館第3展示室		
特別展示2015『ノート孝—古いノートに学ぶ教育の本質—』		
・日立ソリューションズ・コレクション 寄贈記念展示 ・東工大POTTERY CAMP2014*2015 報告展	・1階ラーニング&インフォメーション・commons デモンストレーションイベント「Launch up!」開催 ・1階の名称が「T-POT」に決定 ・末松安晴栄誉教授、文化勲章受章	<p>岡田 清 館長</p>  <p>四代目館長 任期 2016年4月 ～ 2018年3月</p>
	目黒区連携講座 色の世界を体験しよう「視覚と色のサイエンスを学ぶ」内川恵二 教授	
	サイエンスカフェ「腸内細菌ってなんだ？」山田拓司 准教授	
	 <p>ノーベル賞受章画像</p>	
	 <p>ノーベル賞証書</p>	
東工大POTTERY CAMP2015*2016 報告展 於：益子陶芸美術館	・大隅良典栄誉教授がノーベル生理学・医学賞を受賞。 「オートファジーの仕組みの解明」 ・11月 古井貞熙名誉教授（音声工学分野）、文化功労者顕彰	

## 岡田 清 四代目館長 (1948- )

- ・1948 (昭和23) 年 9月 愛知県出身
- ・1971 (昭和46) 年 東京工業大学工学部卒業
- ・1973 (昭和48) 年 同大学大学院理工学研究科修士課程修了
- ・1976 (昭和51) 年 同大学大学院理工学研究科博士課程修了

専門分野：無機材料工学、環境材料、鋳物工学

## 1階ラーニングインフォメーションcommons デモンストレーションイベント

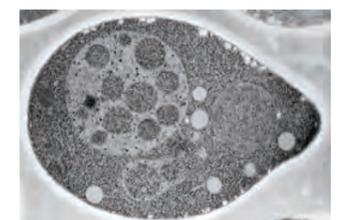
「Launch Up!」 イベントチラシ・Webページ



## 大隅良典 栄誉教授 (1945- )



- ・1945 (昭和20) 年 2月9日 福岡県出身
- ・1967 (昭和42) 年 東京大学教養学部基礎科学科卒業
- ・1972 (昭和47) 年 同大学大学院理学系研究科博士課程終了
- ・1996 (平成8) 年 岡崎国立共同研究機構（現自然科学研究 機構）基礎生物学研究所教授
- ・2009 (平成21) 年 東京工業大学統合研究院先進研究機構特任教授
- ・2010 (平成22) 年 同大学フロンティア研究機構特任教授
- ・2014 (平成26) 年 同大学栄誉教授
- ・2016 (平成28) 年 ノーベル生理学・医学賞受賞



栄養飢餓状況下において細胞が自らのタンパク質を分解し栄養源とする自食作用「オートファジー」について、酵母を用いた遺伝学的な研究を進めて世界をリードする成果をあげた。オートファジーの分子機構や多様な生理的意義の解明において、その後も多大な貢献を果たしている。

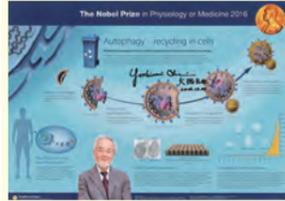
酵母で同定されたオートファジー関連遺伝子に相当する遺伝子が哺乳類を含む他の生物でも配列検索により見つかった。これによりオートファジーは様々な生命現象に重要な役割を果たし、多くの病気とも深く関わることが急速に明らかになりつつある。

# 2017年

平成29年

## 2017 平成29年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
2月6日～4月4日	3月6日古賀逸策「水晶振動子」IEEEマイルストーン記念式典	3月 大隅良典記念基金を創設。
4月7日～4月27日		<ul style="list-style-type: none"> <li>・東工大学内保育所「てくてく保育園」開園</li> <li>・女子寮「洗足池ハウス」オープン 地上3階建</li> <li>・細胞制御工学研究センターを設置。</li> </ul>  <p>「てくてく保育園」</p>
5月19日～6月9日		
6月12日～	東京工業大学百年記念館・博物館 休館（空調改修工事のため）	
11月18日		

展示・講演会	備考	学長・館長
大隅良典栄誉教授 ノーベル賞メダル公開記念展示  大隅良典栄誉教授展	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月19日「もっと身近にサイエンス！音声コミュニケーションの仕組みと音声技術」 篠崎隆宏 准教授、郡山知樹 助教</li> <li>・3月30日 サイエンスカフェ「腸内細菌ってなんだ？」 山田拓司 准教授</li> </ul>	
LATVIA. ARCHITECTURE AT CONVERGENCE ーラトビア、融合の建築ー展 シンポジウム：4月8日 		
常設企画 『浅草文庫』～蔵前時代～ 		
	目黒区教育委員会連携講座「東工大キャンパスの歴史とツアー」 遠藤康一 特任講師	

### 益 一哉 学長 (1954- )

- ・1954 (昭和29) 年10月17日 兵庫県出身
- ・1977 (昭和52) 年 東京工業大学工学部電子物理学科 卒業
- ・1979 (昭和54) 年 同大学大学院理工学研究科 電子工学専攻 修士課程 修了
- ・1982 (昭和57) 年 同大学大学院理工学研究科 電子工学専攻 博士課程 修了
- ・1993 (平成5) 年 東北大学 助教授 電気通信研究所
- ・2000 (平成12) 年 東京工業大学教授 精密工学研究所
- ・2010 (平成22) 年 同大学教授 ソリューション研究機構
- ・2014 (平成26) 年 同大学教授 フロンティア研究機構
- ・2016 (平成28) 年 同大学教授 科学技術創成研究院
- ・2018 (平成30) 年4月 同大学 学長

専門分野：電子デバイス、集積回路工学、異種機能集積回路技術、ワイヤレスセンサネットワーク

### 指定国立大学法人の指定書



### 百年記念館外観、本館外観・資史料館

大岡山駅から見た百年記念館



本館



資史料館  
(本館3階336・337・401号室)



2018年

平成30年

2018  
平成30年

	百年記念館・東京工業大学博物館のあゆみ	東京工業大学のあゆみ
3月15日		2020年10月に学生向け国際交流施設（Taki Plaza）を建設することを決定。（設計：株式会社隅研吾建築都市設計事務所、地上2階・地下2階、延床面積約5,000m <sup>2</sup> ）
3月20日		指定国立大学法人の指定を受ける。
4月1日	<b>【空調設備の改修】</b> ・熱源設備をモジュールチラーに更新 ・外調機、ファンコイルユニット更新 ・パッケージエアコン、換気設備更新 ・空調用配管、ダクト更新  <b>【内装改修】</b> ・4F会議室床貼り替え ・4F会議室の天井を耐震化改修	益一哉学長就任 新執行部発足 学長：益一哉 総括理事・副学長、理事・副学長（企画担当）：佐藤勲 理事・副学長（教育担当）：水本哲弥 理事・副学長（研究担当）：渡辺治 理事・副学長（財務担当）事務局長 芝田政之 監事（常勤）：榎並和雅 監事（非常勤）：三矢麻理子
6月24日～ 7月16日		
8月1日	東京工業大学百年記念館・博物館再オープン	
12月1日		

展示・講演会	備考	学長・館長
		益一哉 学長  任期 2018年4月～
 本館1館 展示ケース		
東工大POTTERY CAMP 2017*2018報告展 於：益子陶芸美術館		佐藤勲 館長  五代目館長 任期 2018年4月～
	目黒区教育委員会連携講座「東工大キャンパスツアー」 山崎綱介 准教授	

佐藤 勲 五代目館長（1958- ）

- 総括理事・副学長 理事・副学長（企画担当）
- ・1958（昭和33）年12月14日 東京都出身
  - ・1981（昭和56）年3月 東京工業大学工学部機械工学科卒
  - ・1983（昭和58）年3月 同大学大学院理工学研究科修士課程修了
  - ・1984（昭和59）年3月 同大学大学院理工学研究科博士課程進学
  - ・1984（昭和59）年4月 同大学工学部助手
  - ・2000（平成12）年8月 同大学工学部教授

専門分野：伝熱工学

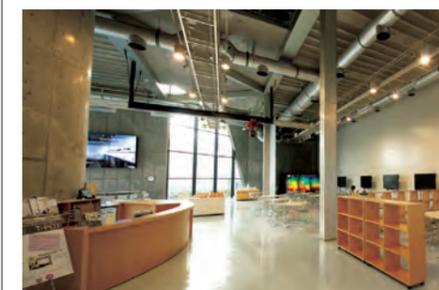
Taki Plaza 完成イメージ



提供：隅研吾建築都市設計事務所

百年記念館内観

1階 ラーニングインフォメーション・commons T-POT



2階 展示室



4階 ミーティングスペース



# 東工大百年記念館建設の経緯

東京工業大学名誉教授 平井 聖



## はじまり

創立百年記念として、記念となる建物を建てようという動きは、私が建設にかかわる前から既にはじまっていた。その役は、建築学科の吉見吉昭教授でした。その吉見先生からある日突然自分の後を引き継ぐようにというお話が降ってきたのです。やってみてわかったことですが、おそらく何を考えてもどこかの学科らの反対が出て、計画を進めることができなくなっていたのだらうと思います。大学の中でそのような役が、公式であったのか、どこからの命令だったのかは覚えていないのですが、(百年記念館専門委員会委員長ということです)とにかく一人で進めることはできないので、助手として大学院を出たばかりで行き先の決まっていなかった稲葉信子さんに、手伝ってもらうことにしました。

## 敷地を探す

その時最初にしたのは、百年記念館を学内のどこに建てるかという敷地を決めることでした。しかし、百年記念館を建てようとしてある程度の面積のある土地を確保しようとすると、その土地は自分の学科が将来実験室などの建物を建てようとしている場所なので、百年記念館に譲るわけにはいかないといわれるのです。学内のどこをあたっても、いつも同じ、その答えが返ってきました。吉見先生が、嫌気がさして辞められた理由がわかったような気がしたのです。

## ダミーの計画

稲葉さんとの最初の仕事は、何とか見つけた小さ

な土地に、必要面積を収める建物を計画してみることでした。何階建てになるかやってみることにしました。その場所は、本館前の西に下がったスロープの下、T字型の分析実験室の北西の小さな土地でした。20階近い、ペンシル型の建物、ということになりました。当然のことながら、百年記念館にふさわしくない、という声があがりました。こちらはこの案を通そうという気はなく、反対意見が出ることによって、みんなでふさわしい場所はどこかということを考える機運が生まれることを期待していたのです。その他にもいくつかの候補地を探しましたが、空き地を探しても百年記念館を建てるのにふさわしい場所はなかなか見つかりませんでした。

## 敷地さがし

次の段階としてこちらが考えたのは、何かがあるけれど、そのときは使われていない場所で、百年記念館にふさわしい場所はないかということでした。

そこで目を付けたのが、正門を入れてすぐ右側の、現在百年記念館が建っている場所です。この場所には、戦前存在した航空機工学科の実験用風洞がありました。その風洞は、戦災で焼け、むごたらしい姿を曝していました。これはいい場所が見つかった、さあ仕事にかかろうと思ったとき、また横槍が入りました。この土地は、図書館が将来拡張するときの予定地である、という市川惇信図書館長からのクレームでした。図書館を正門右側の風洞跡地まで拡張するには、正門がそこにあってはできる話ではありません。図書館長の話では、正門を将来本館の真正面に移す計画があるので、正門が移って通路がいらなくなった後に、図書館を拡張するのだということでした。図書館を北に延長するという話を聞いても、

何とか風洞跡地だけでも百年記念館にという思いで、学長室をたずねました。松田武彦学長に、記念館を建てる敷地を探しましたが、風洞の廃墟以外他にはこれ以上の場所は見つかりません。図書館が将来拡張するのに必要な土地だと言っていますが、正門を移さない限り不可能です、ぜひ風洞の跡地を百年記念館の敷地とさせていただきます、とお願いしました。学長は、二つ返事で、こちらをお願いを聞いてくださいました。そこで、今度は図書館長のところへ行き、学長から許可をいただいた旨を伝えました。学長が任命した図書館長でしたから、学長の意向には逆らえないということで、だいぶご機嫌は悪かったのですが、ようやく風洞の廃墟が百年記念館の敷地になることになりました。

## 正門のこと

どうして正門を本館の真正面に移すという案がなくなったか覚えていませんが、その後、正門を移す計画はなくなりました。しかし、それが架空の話でなかったことは、東急の大岡山駅が地下化されたとき、今の出口と反対側の緑が丘寄りに出口が用意され、閉鎖されたまま現在も残っていることからわかれると思います。

## 設計者を決める

次の課題は、設計者を決めることでした。吉見先生からは、お前が自分で設計してもいいと言われていましたが、私は自分は建築史の研究者で百年記念館を設計する力量はないとはっきり自覚していましたので、建築学科の現役の教授である建築家の篠原一男を設計者にすることにしました。それまで建築学科で設計教育を担当してきた教授を振り返ると、谷口吉郎先生は水力実験室や70周年記念講堂、清家清先生は本館裏の多くの新校舎を設計なさっていましたが、当時現役の篠原教授にはそれまでそのような機会がなかったのです。施設部の力が強くなって、建築学科の先生が大学内の建物を設計するという機会がなくなっていたのです。しかし、今度の百年記念館は、文部省からの予算で建てるのではなく、同窓会である蔵前工業会が母校の創立百年を記念して

募金をし、記念事業の一つとして建物を建て、大学に寄贈するということでしたので、募金会が設計者を選ぶことができたのです。そこで、篠原さんの設計した建物を残したいという思いから、私は篠原さんに設計を依頼することにしました。

そのとき、篠原さんに伝えたのは、設計に伴う大学や募金会等との折衝などの雑務は私が引き受けるから、思う通りの設計をしてほしいということでした。ただ、メンテナンス・フリーということを考えて、塗装の塗り替えをしなくて済むように、電球が切れたままではみっともないので、天井の高い部屋でも電球は手の届くところにつけてほしいということ、細かいことですが、頼みました。ほとんど守ってもらいましたが、南側外側の大きな白い扉だけ、どうしても白くしたいということで、白いペンキの塗装になりました。現在30年を経過して、一部ですが茶色い鉄錆が見えるところが出てきました。譲らなければよかった、と反省しています。

## 模型ができて

設計がある程度進んだころ、建築学科の篠原研究室では、百年記念館の模型ができていました。50分の1の縮尺の模型で、アルミやステンレスの板、ガラス、コンクリートがはっきりとわかる模型でした。模型ができたのでということで、末松安晴工学部長に見ていただきました。そうしたら、工学部長から全く色がないというのはさびしいので、色をつけてはどうか、というおすそめがありました。それを聞いた篠原さんは、一晩のうちに、アルミの板を想定していたところに、ピンクと黄緑色の色紙を貼ったのです。翌日その模型をご覧になった工学部長は、愕然として、色はもう結構です、元のままでとおっしゃいました。皆さんは、ピンクと黄緑色に色のついた百年記念館が想像できますか？そのピンクと黄緑色は、3階のフェライト記念会議室のロビーの談話室のソファの色です。

## 見積もり合わせ

設計が終わって、その次に建設業者も決まりました。建設にあたるのは、母校ということもあって、

大手建設5社の共同企業体ということになりました。入札ということではなく、この企業体と随意契約ということ。このような時、往々にして企業体の見積もりは、設計者の意図より高いのですが、募金会の予算に比べてもはるかに高く、一もっとも設計者が予算をどのくらい意識して設計していたかは怪しいものですが一設計変更を繰り返しても、どうしても8億円を切ることはできませんでした。募金会の予算は6億円でしたから、その差は2億円。見かねた卒業生のTDKの設立者山崎貞一先輩がボンと懐から1億円出してくださることになりましたが、まだ1億円足りません。そこで、企業体の幹事会社であった大成建設に、相談に行くことになりました。相手は建築学科の先輩である専務の中里昌弘さん(昭和24年建築学科卒)。こちらはあいさつに行けば、何とか打開策を提示してくださるだろう、との望みを抱いていました。どういうことになるのか心配だったので、募金会の専務理事をなさっていた制御工学科の竹中俊夫教授が、同行されました。新宿の大成建設に着いて応接室に通されても、金額の話は全く出ません。お話はわかっていますので食堂で一杯いかがですかということになり、この時竹中先生には、阿吽の呼吸で7億円で引き受けてもらえるということが、ご理解いただけたのでした。

ついでに言うと、フェライト記念会議室の名称は、1億円を私費で寄付してくださった山崎貞一先輩を記念してつけた室名です。そして、ロビー側の壁の色は、フェライトの色なのです。

## 蔵前工業会の募金会で説明

これも設計ができ着工前のことですが、蔵前工業会が母校のために建て、国に寄贈する建物ということで、蔵前工業会の関係の方々の了解が必要でした。説明に行ったのは私ですが、お歴々の前で寄付のお礼を言い設計の説明を概略したところ、質問というよりも早く、昭和28年卒の森京介さんが、同級生である篠原一男の設計がいかに時代をリードした設計であるかということとを滔々と述べてくれました。ほかの役員の方々はその説明を聞いて、全員賛成ということになり、無事帰ってくることができました。

## 文部省内での了解を取る

設計ができた頃、事務局の施設部長が文部省の関係係局に、寄付される建物がこのような建物ですと、説明に行くということになり、篠原さんに透視図を描いてほしいと言ってきました。これに対して篠原さんは、当時としては珍しかったと思いますが、コンピューターを使って設計を進めていたので、ブラウン管に出た透視図を、四つ切ほどの大きさの印画紙に、プリントしてくれました。手書きのもっと大きな透視図を施設部長は期待していたのでしょうか、受け取ってくれませんでしたので、やむなく私が百年記念館から本館までの俯瞰図を描きました。これをもって施設部長は文部省内の関係部局を回ったとのことでした。

## 計画通知を区役所に出す

国の機関が建築を始めるときには、計画を記した書類を図面とともに区役所に出すことになっています。国の方が区より上位機関ですので、区が国に対して許可するということはありません。国の機関である東京工業大学からの届を、区が受け付ければ、それで建築の届は完了し、建築することができることなのです。ところが、事務局が区役所に計画通知を持って行っても、どういうわけか、受け取ってもらえないということになりました。区は何でも受け付けるのではなく、気に入らない届は受け取らないという手があったのです。篠原一男の設計では受け取らないということでしたので、困っていたところ、構造設計者の木村俊彦先生が、届け出上の設計者を引き受けてもいいと言ってくださいました。木村先生は東京都関係の建築にいろいろと助言をなさっていた関係もあり、私なら受け取らないはずはないと考えてくださったのでした。そのようないきさつで、構造設計をお願いしていた木村俊彦先生の名前で計画通知を出しなおすことにしました。そうした結果、計画通知は受け取ってもらえたということでした。今となっては、どこの段階で意地悪をされたのかはわかりません。

そのため、竣工式の祝賀会で、木村先生はスピーチの中で、冗談めかして、この建物の設計者は私で

すとおっしゃいました。(この文を書くにあたり、許可された計画通知書を確認したところ、設計者欄は大成建設の名になっていました。)

## 百年記念館の構造

百年記念館の構造について、お話しておきましょう。木村俊彦先生の構造設計事務所では、先生が構造の計画を立て、奥様が計算をなさるということで、いつもお二人でお見えになりました。あの変わった形の建物をどのように解析なさるのが注目されましたが、うかがってみると、実に単純で、東側と西側にある鉄筋コンクリートの板壁の上に、途中で少し曲がった半円筒の最上階を載せ、その半円筒の曲がった部分を、回り階段の円筒で支える、ということでした。最上階の半円筒は、鉄骨で組み、床にコンクリートを流し込むということでした。コンクリートを流し込む前は、鉄骨の半円筒の中央部、丁度階段室で支える辺りがやや高くしてあり、コンクリートを流し込むことによって、その荷重で半円筒が水平になる、という設計だと聞きました。そのコンクリート打ち込みの際には、木村先生は付きっきりでした。

## 懇親会

建設途中で、大学の施設部の方々、建設にあたった企業体の方々、設計にあたった篠原研究室の方々等と懇親のために、バーベキューパーティーを催そうということがありました。みんなが賛成ということでその準備をしていると、その中で篠原さんは一人だけワインパーティーと主張して、バーベキューパーティーに賛成しないのです。どちらかといえば、篠原さんは設計者として皆の協力にお礼を言う立場ですから、これでは懇親会は開けません。困っていたら、構造設計の木村俊彦先生が主催者の立場を引き受けてくださり、事なきを得ました。

## 如水会からの贈り物

一橋大学の同窓会である如水会から、東京工業大学の創立百年を記念して、百年記念館の竣工に合わ

せて贈られたものがあります。それは、3階の土光記念応接室のテーブルの上にある、ガラスのコンポートです。如水会からは、置時計をという話がありました。人の背ほどもある大きな時計で、歌にもあるおじいさんの古時計というようなデザインの時計、ということでした。せっかくモダンな百年記念館を作った中に、いかに贈り物といっても骨董のような不似合いなものを置くのは嫌でしたので、お断りしたところ、そちらの希望するものでよいからということになり、考えました。清家先生にご相談したところ、各務クリスタルの各務紘三さんは蔵前時代の卒業生だから各務クリスタルの製品がいいのではないかということになりました。調べたところ、その頃はもう初代の作品は作っていない、作者は次の世代になっているということでしたので、清家先生にまたお願いして、2代目の作品をということになりました。2代目の各務さんは、上野の東京美術学校の卒業生で東工大の卒業生ではありませんが、清家先生の美術学校時代のお友達ということだったのでした。

5月だったか6月だったか覚えていませんが、学長のお客様を迎えたとき、コンポートに水を張り、紫陽花の花を山盛りに盛ったことがありました。とても綺麗でした。緑が丘の紫陽花の花です。

## 高浜和秀さんデザインの椅子

百年記念館の4階にある食堂のイスとテーブル、4階と1階のバーカウンターの椅子のデザインは、高浜和秀さんです。高浜さんは篠原さんと同級生の建築学科の卒業生で、卒業後熊本大学を経てイタリアに渡り、家具のデザイナーとして活躍した方です。その家具等は、イタリアのガビナ社他の家具メーカーから発売されています。バーカウンターの椅子はその当時カタログにはなく、通常の高さの椅子の足を延ばしてバーカウンター用に設計し直してもらったものです。

もう一か所、高浜さんの椅子を使おうとしたところがあったのですが、当時の田中郁三学長に嫌われて、使えなかった部屋があります。それは、3階の土光記念応接室です。偉い人が集まる部屋で、食事をするということも考えて、ハイバックチェアを

入れることにしました。その候補は、高浜さんデザインのカズキという名称のハイバックチェアでした。この椅子は全く曲線のない平らな板を組み合わせたデザインですが、座ると背筋が伸びて、意外に座り心地のいい椅子です。田中学長には、この平面を組み合わせたデザインがお気に召さず、別の既製品にかわりました。

今も、その高浜さんの椅子が一脚、応接室の片隅に置いてあるはずですが。

## 事務局からの様々な注文

事務局からの手直しについて、一つ二つあげておきます。一つ目は、回り階段の手摺です。設計された手摺の高さは、法規的にも常識的にも問題の無い高さだったのですが、事務局から、最上階にバーがあるので、酔っぱらって落ちるといけない、もう少し高くするように、ということでした。現在回り階段の平らな板状の手摺の上に、鉄筋状丸棒の手摺がついているのはそのためです。今は、さらに回り階段の途中に網が張ってあります。これはおそらく下を覗き込んだ人が胸のポケットから物を落とすといけないということで貼ってあるのだと思いますが、ペンや手帳、携帯電話くらいだと網の目を通してしまい、効果がないのではないのでしょうか。汚れた網がきたないので、取ってほしいと思います。

二つ目は、掃除のときに蹴とばして移動できるよう、椅子にはキャスターを付けるように、という要求です。確かに、掃除のときに椅子を動かして、その下を清掃するには手間がかかります。提案自体は理解できるのですが、蹴とばして移動させるという言い方は納得できません。感覚的な問題ですね。

## 博物館の展示物

館内の2階と地階は、博物館として百年の間に学内の先生方が発明、発見、創作されたものを展示する計画が科学史専攻の道家達将先生を中心に進められていきました。学内から使われなくなった機械・器具が集められ、作家となった先生や卒業生の作品も収集されました。作品としては、G.ワグネル、浜田庄司、河井寛次郎など、発明品としては、水晶発

振子、フェライトと磁気テープなど、実験用機器としては、紡織機器、関東大震災の振動を再現する振動台、ムカデ型ロボットなどです。紡織機器に関しては百年記念館より先に東京農工大学の博物館施設ができたときに移管してしまったことがあって、機械系の竹中先生から実物展示は場所を取るし、実物は集めるのに苦労するから、展示は縮小したプラスチックモデルでいいのではという発言がありました。これを聞かれた時の道家先生の呆気にとられたお顔が思い出されます。

もう一つは、スターリングエンジンです。スターリングエンジンは、内燃機関が発明される前から使われていたエンジンで、東工大では大岡山に移ってきたころから、水を汲み上げるために使われていました。そのエンジンが機械工学科の工場にあるということを知り、博物館の展示品にということになったのですが、ずーっと機械工学科の工場の片隅にあって、誰もいじったことがないので、機械工学科の先生や学生では動くようにすることはできません、と言われてきました。その頃、私はたまたま工学部の付属工業高校の校長を兼務していて、機械科の岩城純教諭の下で課題研究としてスターリングエンジンを制作していた生徒たちがいたことを知っていましたので、大学で直せないなら附属の生徒たちにやらせてみようと思いました。生徒たちは大喜びで、外したり組んだりいろいろ調整して、ついに炊口に薪をくべてエンジンを動かすことに成功したのです。私は喜んで、大学の先生や大学生にもできないことを、実物教育をしている付属工業高校の先生と生徒がやってのけたと言いつらしたので、機械系の先生方からは大分にらまれたようでした。その後、もう一度大学の機械工学科の方で調整してくださり、がたつかずに動くようになったようです。

## 百年記念館の標識

百年記念館の入り口の右側に、人の背ほどもある、円形のステンレスの輪が立っています。その上部にあるプレートに、「東京工業大学百年記念館」の文字が彫られています。この文字は、蔵前時代の大先輩である土光敏夫さんの筆です。裏には竣工年月日と揮毫者の名前が彫ってあります。作った最初の

プレートは、裏に何も書いてないプレートでした。ステンレスの輪にプレートを付けたところ、事務局から裏には竣工年月日を彫るようという指示がありました。竣工年月日を彫ったところ、事務局が考えていた月日と違ったということで、もう一度作り直しました。ですから、現在標識についているのは三度目のプレートです。そのステンレスのプレートも結構お金がかかるということで、1度目と2度目のプレートはステンレスの厚い板でしたが、3度目は薄いステンレスの板を曲げて作ってあります。

## プレートの百年記念館の文字

プレートの「東京工業大学百年記念館」の文字は、蔵前時代の大先輩土光敏夫さんの揮毫です。あらためて土光さんに書いていただくわけにはいかないので、それまでに土光さんがお書きになった文字を転用することになりました。記念誌その他に土光さんの東京工業大学あるいは百年記念館の文字はあったのですが、いくら探しても横書きでみつかったのは百年記念館だけで、横書きの東京工業大学という書はなかったのです。プレートに彫るのは横書き。縦書きを横書きに直し、バランスを取るのには、言うほどにやさしいものではありません。一字ずつ、大きさ、上下の位置、左右の字との間隔を調整しながら作りました。うまくいっていなかったら私の責任です。(今、このプレートの裏を見ると、揮毫者の名前として土光敏夫と中山一郎と二人の名が彫ってあります。横書きの百年記念館の文字は中山一郎先輩の書だったのでしょう。)

# 寄附・募金活動について

蔵前工業会 事務局長特任補佐 吉松 明



## 百年記念事業募金会発足に至るまでの経緯

東京工業大学創立百年記念事業は、昭和52年〔1977〕1月に発足した田中郁三教授(当時理学部長)を委員長とする「東京工業大学創立百年記念事業企画委員会」によって、その内容が検討され、その結論は同年6月に当時の川上正光学長宛答申された。それによると、個人と法人からの募金額の比率を1対4と想定し、募金目標額の目安は約20億円とされた。

その後、昭和53年〔1978〕10月に斎藤進六学長の下で、記念事業の準備と事業内容が協議・検討され、準備委員会を発足することとなった。

### (1) 百年記念事業実施委員会の発足

かくして、昭和54年〔1979〕4月に「東京工業大学創立百年記念事業実施委員会規則」が制定され、正式に「百年記念事業実施委員会」(委員長:斎藤進六学長)が発足した。この委員会の下に、「百年記念式典・記録委員会」(委員長:竹中俊夫工学部長)、「百年記念事業計画委員会」(委員長:田中郁三理学部長)、「百年史編集委員会」(委員長:小林靖夫教授)および「百年記念事業学内募金委員会」(委員長:松田武彦総合理工学研究科長)の4つの専門委員会が設置された。

「百年記念事業計画委員会」は、百年記念事業計画自体を煮詰め、将来学外募金をもって行う百年記念事業そのものに結びつけることが目的であった。

### (2) 学内募金に対する協力依頼

「百年記念事業学内募金委員会」では、昭和54年〔1979〕11月に斎藤進六学長名で学内教職員に向け

て以下の協力依頼が発信された。

「本学は、明治14年5月に東京職工学校として創立されて以来、昭和56年5月をもって創立百周年を迎えることとなりました。この光輝ある記念の日を祝うとともに、さらに本学の将来にわたる発展を期して諸種の記念事業を計画すべく学内に東京工業大学創立百年記念事業実施委員会を設置し検討を重ねてまいりましたが、その具体的な計画として百年史の刊行、百年記念館の建設、国際交流基金の設定などの計画を進めております。この事業計画に係わる資金は、今後卒業生等を中心とした後援団体を設立し、広く全国の有志に呼びかけて学外募金を行い、この事業計画を達成する予定といたしております。また、この学外募金の開始時期は諸般の準備等の都合上、創立百周年に当る昭和56年頃から開始される見込みであり、かつ、ある程度長期にわたることが予想されます。一方、百周年に当る昭和56年には、別紙のように記念式典の挙行、映像記録等の作成等が計画されております。これらの行事を達成し、かつ、学外募金の準備に必要な経費に充てるための資金のうち、その一部については、財団法人東京工業大学後援会に援助をお願いすることになっていますが、なお相当額の学内募金を行なわなければならない情勢であります。つきましては、教職員各位におかれては以上の趣旨に御賛同いただき、下記の学内募金にご協力下さるようよろしくお願いいたします。

1. 募金目標額 2千万円
2. 募金金額
  - 1口5千円(教授会構成員)
  - 1口千円(上記以外の教職員)
  - 1口以上何口でも結構です。

3. 申込締切日 昭和54年12月27日(締切り後もいつでも申込みを受付けます。)]

### (3) 記念事業内容の絞り込みと実施事業の進捗

委員会での度重なる議論を経て、募金目標額は約12億円に縮小され、事業内容も①百年史の編集、②百年記念館の建設、③国際交流基金の創設等に絞られた。この内、百年記念館の建設は、設置場所、規模等について種々の議論が重ねられたが、この間、蔵前工業会では蔵前工業会館の改築問題が持ち上がり、その調整についても協議された。

昭和56年〔1981〕5月26日には、東京工業大学創立百周年記念式典が大学講堂において盛大に挙行された。同年9月28日には、土光敏夫氏を会長とした「東京工業大学創立百周年記念事業資金募金会」が発足し、計画された3つの事業を推進すべく募金活動が進められた。

記念事業の進捗は下記のとおりであった。

#### ① 百年史の編集・刊行

百年史は、昭和60年〔1985〕5月に完成・刊行され、工業技術教育関係者をはじめ多くの方々に貴重な文献として活用されている。

#### ② 百年記念館の建設

昭和60年〔1985〕11月に設計契約が締結され、翌昭和61年〔1986〕10月に建設工事契約が締結された。昭和62年〔1987〕9月竣工。

#### ③ 国際学術交流基金の設定

基金は、昭和59年〔1984〕6月と7月に設定され、同年8月から、その目的である国際学術交流事業が有効に実施された。

上記、①と③については、比較的早期に事業の実施に至ったが、②については度重なる募金期間の延長の末、昭和62年〔1987〕9月の会館竣工に至った。この間の募金活動の経緯については、東京工業大学百年史(通史)、蔵前工業会誌No.769(1981年11月創立百年記念特集号)、No.774(1982年5月)、No.782(1983年2・3月)、No.790(1983年12月)、No.803(1985年4月)、No.808(1985年10月)に記事が掲載されている他、No.831(1988年1月・東京

工業大学百年記念館特集号)には当時の募金会専務理事であった藤本盛久(S21建)、竹中俊夫(S22機専25応物)両東工大名誉教授による「創立百年記念事業資金募金の経過」と題した詳細な報告が掲載されている。これらの記事を辿りながら、募金会関係者の多大な苦勞を偲ぶこととする。

## 募金の概要

- ・募金目標額 12億円(個人・法人)
- ・募金目的
  1. 百年記念館の建設所要経費8億円(建物面積:約2,600m<sup>2</sup>)
  2. 国際学術交流基金の設定  
所要経費 3億3千2百万円
  3. 東京工業大学百年史の編集・刊行費等  
4千万円
  4. 募金経費 2千8百万円
- ・募金期間 昭和57年〔1982〕1月1日より昭和58年〔1983〕12月31日まで(募金期間は、最終的には昭和60年〔1985〕12月31日まで延長された。)

## 東京工業大学百年記念事業資金募金会の発足

創立百年記念の事業資金は、総額12億円を学内外から募金募ることとなり、昭和56年〔1981〕3月19日に学内世話人(代表 高島洋一教授)と蔵前工業会側世話人(代表 中山一郎日本軽金属(株)相談役)による第1回世話人会がもたれ、記念事業の募金に関する検討が開始された。同世話人会は、募金趣意書、募金会の会則案の作成、役員候補者の人選、募金会の認可を受けるための準備等を進めた。並行して学内世話人会では、事業内容の検討等を進め、昭和56年〔1981〕8月27日「東京工業大学百年記念事業資金募金会設立準備懇話会」を開催し、役員就任予定者の意見調整を行った。同年9月28日、国立教育会館において、同募金会の発起人会(座長:斎藤進六学長)が開催され、以下の議案を審議の結果、

いずれも異議なく原案通り可決された。

- ① 募金会の結成
- ② 募金趣意書及び募金要項の作成
- ③ 募金会会則の制定
- ④ 募金会役員の数（理事545名、常任理事77名、専務理事3名、監事2名としたが、今後の成り行きにより多少の増減を認めることとし、理事550名内外、常任理事80名内外、専務理事数名、監事数名となった。）
- ⑤ 理事及び監事の選任
- ⑥ 顧問就任の依頼
- ⑦ 発起人会議事録連署人の依頼

次いで役員を選任を行い、会長に土光敏夫氏、副会長には、下記の4氏が選任された。

- ・会長 蔵前工業会相談役  
土光 敏夫 氏（T9機）
- ・副会長 蔵前工業会理事長  
白沢 富一郎 氏（T15電）
- ・同上 蔵前工業会相談役  
中安 閑一 氏（T7機）
- ・同上 東京工業大学長  
斎藤 進六 氏（S18東北大・航空）
- ・同上 次期東京工業大学長予定者  
松田 武彦 氏（S18東大・造兵）

なお、常任理事、専務理事、常任監事の選任はあらかじめ就任依頼をして了承を得ている方々として承認を得、評議員についても同様の手続きにより委嘱することが承認された。

募金会は常任理事会を執行機関とし、実務に関しては専務理事の担当で運営されることとなったが、常任理事会はその構成上、頻繁に開催することが困難であるため常任理事連絡会により円滑な実務処理を図ることとなった。

## 東京工業大学創立百年記念事業資金募金趣意書

東京工業大学は、明治14年〔1881〕5月26日東京職工学校として創立されて以来、本年を以て満百年

を迎えました。その間、東京工業学校、東京高等工業学校、東京工業大学（旧制）、東京工業大学（新制）と名称および組織の変更はありましたが、常に時代の要請に応えつつ、科学・技術の教育・研究を通じて、我が国の発展に大きな貢献をして参りました。

すなわち創立当初においては、欧米からの輸入技術を当時の在来工業および近代工業の育成に生かし、その先達者となるべき技術者を養成し、その後次第に我が国固有の近代技術の開発に努め、すでに戦前において我が国が先進諸国に伍して決して劣らぬ工業国と称し得る地位を占めるに至る基盤作りと人材育成に貢献して参りました。

戦後はいち早く大学の制度を抜本的に改革し、民主的な学術の教育・研究体制を確立し、新制大学および大学院の発足に対しても適切に対処し得て、昭和30年代から40年代にかけての理工系大学の一大拡張期において、多数の有為な科学者・技術者を世に送り出すことができました。更に、昭和42年からは、理・工の二学部からなる複数学部の大学となり、工業技術の根底からの教育・研究のための体制を作り上げ、また長津田地区に新キャンパスを得て、そこに大岡山地区における理工学研究科とは別に、学際的な理工学研究の新分野を開拓するため、新たに総合理工学研究科という大学院組織を設置するとともに、研究所等の移転も行い、ほぼその完成を見、今日の高度かつ複合的技術の研究開発の要請にも対処しうる教育・研究体制を整えて今日に至りました。

かくして東京工業大学は、東京職工学校創立以来今日までの百年間において、関連付設校の卒業生を含めて約55,000名という多数の人材を世に送り出しました。うち新制大学における大学院修了者だけでも8,100名に達しております。また東京工業大学は創立以来外国人留学生の教育に力を入れ、そのための特別な教育機関をもっていた程であります。その卒業生数は総計1,400名に達しており、大いに教育の国際化の実をあげております。さらに東京工業大学における数多くの研究業績が、学会および産業界において高い評価を得ていることは周知の通りであります。いまその一例をあげれば、フェライトの発明、水晶振動子の研究、歯車の研究、ビタミンB<sub>2</sub>の合成等があります。

以上のように東京工業大学百年の歴史は、正に我

が国の発展を支えた科学・技術の教育・研究の歴史そのものであり、したがって東京工業大学には、その教育・研究に用いられた貴重な器材や文書・記録が数多く集積されております。これを体系的に整理し展示することは、たんに東京工業大学にとってだけでなく、我が国全体の科学・技術の教育・研究の発展のため先人の果たした業績を明確にする意義をもつものであり、さらにこれを踏まえて今後の一層の発展を図るための貴重な礎石となると考えます。

そこでこの記念すべき創立百年の時期に当り、正に「科学・技術の教育・研究百年」の業績の展示・保存を中心とする「百年記念館」を建設し、そこに現在における科学・技術の最先端の所産をも併せて展示して、東京工業大学の遠き将来に向けての一層の発展のための一大モニュメントとする計画であります。そこにはさらに公開講座をはじめとする地域社会サービスのための設備を設ける等、多角的な活用を図る計画であり、完成の暁には、これを国に寄附する予定であります。

さらにこの創立百年記念事業の一環として、少壮有為な研究者の国際交流のための海外渡航費の援助、外国人研究者の招致の費用を賄うため「国際学術交流基金」を設定すること、また「東京工業大学百年史」を編集・刊行すること等が計画されております。

以上の諸記念事業を遂行するために必要な巨額の資金を調達するため、ここに私達有志が相計り、大方の御賛同を得て、東京工業大学創立百年記念事業資金募集を行うものであります。なにとぞ以上の趣旨を諒とされ、本事業の達成に対して絶大なるご協力を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

## 昭和57年〔1982〕12月31日時点の状況

### (1) 募金会役員状況

募金会発足当時の副会長4氏に加え、下記の3氏が副会長に選任され、茅 誠司氏が名誉顧問に就任した。

- 副会長 倉田 元治 氏  
旭硝子(株)取締役相談役（T14窯）
- 同上 大久保 謙 氏  
三菱電機(株)常任相談役（T10機）
- 同上 田中 勇 氏

東京急行電鉄(株)取締役相談役、東亜国内航空(株)会長（T15電）

名誉顧問 茅 誠司 氏  
東京大学名誉教授（T9電・T12東北大・物理）

### (2) 募金会の構成

顧問26名、理事413名、監事2名、評議員894名

### (3) 法人企業関係の募金

法人企業関係の募金は目標額を10億円と設定し、東工大卒業生が在職している企業を業種別に分類し、それぞれ学内の担当教授と蔵前工業会側の先輩の相談役とで、卒業生社員数、前回の80周年募金の状況、業種としての景気の動向、経団連資料などを慎重に検討し、会社毎に募金依頼額を定めた。この時点での募金申込みは、91社、203,670千円であった。大学側としても1,000万円以上を依頼する企業には学長が、それ以下については理学部長、工学部長、研究科長などが担当の教官共々手分けして直接お願いすることとした。

### (4) 個人関係の募金

個人関係の募金は、この時点で3,809名、約155,238千円の申し込みがあった。趣意書発送数約23,000名に対してはまだまだ少ない状況であった。

### (5) 募金事務

膨大な募金事務の処理は、蔵前工業会及び大学事務局関係各課の協力を得て行われ、百年記念事業遂行のために専用の事務室も設けられた。

### (6) 蔵前工業会館の新・改築問題の取り扱い

蔵前工業会が、かねてより検討していた新橋の蔵前工業会館の新・改築問題については、やはり募金活動を伴う事業であることから、その検討を一時延期して、大学側の募金活動に全面的に協力し、大学の募金終了後にあらためて進めるとの決定がなされた。

## 昭和58年〔1983〕10月15日時点の状況

### (1) 募金会の構成

顧問24名、理事415名、監事2名、評議員891名

### (2) 常任理事連絡会

常任理事連絡会は、募金活動の中心的な推進機関であり、下記のメンバーから構成されていた。

中山 一郎	(座長) 日本軽金属(株)相談役 (S5 窯・S8 応化)
関 博雄	王子製紙(株)顧問 (S9 機)
大西 亥輔	大成建設(株)常任顧問 (S9 建)
山崎 貞一	TDK(株)監査役 (S10 電化)
松田 新市	三菱電機(株)常任顧問 (S10 電)
井上敬次郎	宇宙開発委員会委員 (S11 電化)
遠藤 疆	蔵前工業会事務局長 (募金会専務理事) (S6 電・S9 電化)
竹中 俊夫	東京工業大学教授 (募金会専務理事) (S22 機門・S25 応物)
田中 郁三	東京工業大学教授 (S22 東大・化)
小口 武彦	東京工業大学教授 (S22 東大・物)
岸 源也	東京工業大学教授 (S26 電)
真壁 肇	東京工業大学教授 (募金会常任監事) (S26 応化)
藤本 盛久	東京工業大学名誉教授 (募金会専務理事) (S21 建)
小林 靖雄	東京工業大学名誉教授 (S19 一橋・商)
関口 利男	東京工業大学名誉教授 (S24 電)

### (3) 法人企業関係の募金

この時点(10月31日)での募金申込みは、194社、610,520千円で、目標額には程遠い状況であった。このため、その後、募金期間を2度にわたって延長することとなった。

### (4) 個人関係の募金

個人関係の募金は、この時点(10月15日)で約5,200名、約220,000千円の申し込みがあり、目標は一応達成してはいるが、趣意書発送数約23,000名に対してはまだ少ない状況であった。また、学内の寄附申し込み状況は以下のとおりであった。

教授	255名	申込み	147名	11,800千円
助教授	214名	申込み	114名	3,405千円
助手	508名	申込み	126名	1,655千円
計	977名		387名	16,860千円

## 募金活動の終了と募金会の解散

### (1) 寄附申込金額累計

総額12億円の募金目標額は、昭和59年〔1984〕末までに達成され、同年12月31日をもって3年間にわたる募金活動は終了した。昭和59年〔1984〕12月31日時点の寄附申込金額累計額と個人、法人の内訳は以下のとおりであった。

寄附申込金額累計	1,413,483,877円	
法人の部	1,048,425,000円	317社
個人の部	365,058,877円	6,565名

### (2) 募金会の解散

募金会は、昭和63年〔1988〕3月31日をもって解散した。

## 東京工業大学創立百年記念事業報告書

目標募金額を達成した募金会は、昭和63年〔1988〕3月に百年記念事業に係わる報告書を作成し、寄附者へ送付した。報告書には土光敏夫募金会会長および田中郁三学長の謝辞、事業報告、決算報告、寄附者芳名録および役員名簿が記載された。

### (1) 土光敏夫募金会会長挨拶

東京工業大学の前身である東京職工学校が明治41年に創立されて以来、幾多の先達者の積年にわたる研鑽によって、輝かしい歴史が築かれ、高度の学問水準をもとに優秀な人材を世に送り出し、また、同窓の各位が産業界において、常にその時々の社会の要請に応えつつ、斯学の研究と先端技術の開発に多大の業績を挙げ、我が国の科学技術の進展に貢献してまいりました。

昭和56年5月に東京工業大学の百年記念式典が挙行されたのを機に、同9月、多数の関係者のご賛同

を得、東京工業大学創立百年記念事業資金募金会を発足いたしました。東京工業大学がこの一世紀に果たしてきたその社会的役割の大きさに思いをいたすとき、今後、さらに飛躍を遂げ、我が国の進運に多大の貢献をなすことを願い、かつ、確信し、そのモニュメントとして百年記念事業を企画いたしましたところ、同窓の諸氏だけでなく、多数の個人、法人各位のご理解をいただき、心温まるご援助を賜りました。ここに、深甚なる謝意を表する次第でございます。

募金会は、昭和57年1月から昭和60年12月まで募金活動を行い、その趣旨に沿って、国際交流基金の設定および百年史の編集・刊行を行ってきたところでございますが、このたび、百年記念館の完成をしまして、事業目的は滞りなく完了いたしました。このたび、募金会がその目的を達成し、昭和63年3月31日に解散いたしましたので、その事業、決算に関するご報告、寄附者のご芳名を録し、ご送付申し上げますが、これまでに寄せられましたご懇情に対しまして、あらためて心からお礼申し上げますとともに、各位のますますのご自愛、ご発展をお祈りいたします。

### (2) 田中郁三東京工業大学長挨拶

本学が、昭和56年5月26日に創立百周年を迎えたことを記念して、数多くの卒業生ならびに法人各位の御寄附を基に、国際交流基金が設けられ、百年史の編集・刊行ならびに百年記念館の建設と、おかげさまでいずれもその目的を達成することができました。これもひとえに同窓生・有志各位の御協力と、長期にわたって並々ならぬ御苦勞をいただいた東京工業大学創立百年記念事業資金募金会の会長、副会長をはじめ、各役員ならびに多数の委員各位の御尽力の賜物と心から感謝しているところであります。

本学は、今日、理学部、工学部、大学院総合理工学研究科、4附属研究所、その他多くの教育・研究施設を擁し、学生数約6,000名(うち留学生約450名)、教職員数約1,700名を数え、昭和61年度から新しい学問分野としてバイオ関係学科をもスタートさせて、名実ともに理工系の総合大学に発展しております。

御寄附いただいた国際交流基金につきましては、本学の教職員の海外派遣、外国人研究者の招聘、学生の国際学会出席ならびに外国人留学生等に対する援助として有効に使用させていただいております。また、百年記念館につきましては、地階および1階に本学の百年の歴史の貴重な資料として、本学の創設期のリーダーの事蹟、代表的な教育・研究業績、卒業生の芸術作品等を展示し、2階および3階に会議室、談話室を、4階にレストランを置き、卒業生ならびに本学の教職員を主体とする学術・研究の交流の場として大変好評を得ております。

御寄附をいただいた基金及び百年記念館等は、いずれも本学のこれからのなお一層の発展の礎として、日々皆様に感謝しつつ、私どもに寄せられた御好意と御期待にお応えいたしたい所存でございますので、今後とも御鞭撻と御支援の程をお願い申し上げます。どうか、本学へお立ち寄りのうえ、ぜひ、百年記念館を御高覧下さいますようお願いいたします。

ここに、本学関係者一同と共に、各位の御芳志に対し厚くお礼申し上げますとともにますます御健勝で、御活躍をお祈り申し上げます。

### (3) 決算報告(昭和63年〔1988〕3月31日現在)

収入額	1,586,674,056円
支出額	1,586,674,056円
残 金	0円

## 収支の内訳

収入の部		
項目	収入額	備考
寄附金	1,413,483,877	
預貯金利子	173,190,179	
計	1,586,674,056	
支出の部		
項目	支出額	備考
百年記念館建設費	973,749,056	
国際交流基金の設定	431,955,000	利付国庫債券購入 (額面金額 439,600,000)
東京工業大学百年史の刊行	41,120,000	通史 2,000部 部局史 2,000部
募経費	31,850,000	
奨学寄附金	108,000,000	東京工業大学の教育研究等助成のため
計	1,586,674,056	

\*上記の他に下記のとおり寄贈を受けている。  
ビデオ装置 10組、100万円(奨学寄附金として東京工業大学創立百年記念国際交流基金に組入れ)

## 募経会の活動経過詳細

### 昭和56年〔1981〕

- 9月 ・「東京工業大学創立百年記念事業資金募経会」発起人会を開催
  - ・百年記念事業資金募経会趣意書を作成
  - ・百年記念事業資金募経会要項を制定
  - ・百年記念事業資金募経会会則を制定
  - ・第1回理事会開催
    - ―会長に土光敏夫氏を選出
    - ―副会長、専務理事、常任理事、常任監事の選任
    - ―評議員の委嘱
- 11月 ・東京都から募経許可を受ける  
(許可期間：昭57年1月～昭57年12月)
- 12月 ・東京国税局から寄附金の免税措置の確認を受ける

### 昭和57年〔1982〕

- 1月 ・募経活動を開始
- 3月 ・学内教官(助手以上820名)に「募経趣意書」を配布
  - ・蔵前工業会会員(学外21,895名)に「募経趣意書」を発送
- 5月 ・一部及び二部上場企業役員(蔵前工業会会員)に対し、中山一郎氏、山崎貞一氏の連名で個人寄附に特段の配慮方を要請(399名)
- 7月 ・法人宛「募経趣意書」を発送(496社)

- 11月 ・既募経者を除く学内の教官に募経協力方を要請
- 12月 ・東京都から募経更新許可を受ける(許可期間：昭58年1月～昭58年12月)
  - ・蔵前工業会において会費納付依頼状に併せて各会員に募経協力を要請

### 昭和58年〔1983〕

- 6月 ・既募経者を除く学内の教官に再度募経協力方を要請
  - ・蔵前工業会において会費納付依頼状に併せて各会員に募経協力を再度要請
- 9月 ・第2回募経会理事会開催、募経活動期間を昭59年12月31日まで延長することを承認
- 12月 ・既募経者を除く学内の教官に再々度募経協力方を要請
  - ・第25回常任理事連絡会開催、国際学術交流基金設定のための長期国債(額面金額2億円)の購入が承認される
  - ・東京都から募経更新許可を受ける(許可期間：昭59年1月～昭59年12月)
  - ・東京国税局から寄附金の免税期間延長の許可回答を得る

### 昭和59年〔1984〕

- 2月 ・第26回常任理事連絡会開催、国際学術交流基金設定のための長期国債(額面金額1億円)の追加購入が承認される
- 3月 ・百年記念国際学術交流基金規則を制定
- 6月 ・利付国庫債券(額面金額2億円)購入、同日付けで東京工業大学に奨学寄附金(国際学術交流基金)として寄附
- 7月 ・利付国庫債券(額面金額1億円)購入、同日付けで東京工業大学に奨学寄附金(国際学術交流基金)として寄附
- 12月 ・東京都から募経更新許可を受ける(許可期間：昭60年1月～昭60年12月)
  - ・東京工業大学百年史(通史2,000部、部局史2,000部)の発行に当り、凸版印刷(株)と契約締結

### 昭和60年〔1985〕

- 3月 ・国税局へ収支報告書(中間)を提出
  - ・第32回常任理事連絡会開催、国際学術交流基金設定のための長期国債(額面金額約1億4千万円)の追加購入が承認される
- 5月 ・百年記念館の名称を「東京工業大学百年記念館」に決定
- 6月 ・東京工業大学百年史刊行、同日付けで東京工業大学に寄附
  - ・第3回募経会理事会開催、募経目標額の超過配分の決定及び各記念事業の達成・経過報告
- 8月 ・利付国庫債券(額面金額約1億4千万円)を購入、同日付けで東京工業大学に奨学寄附金(国際学術交流基金)として寄附
- 11月 ・百年記念館の設計契約を締結
  - ―設計業者 (株)木村俊彦構造設計事務所
  - ―履行期限 昭和60年11月～昭和61年8月
- 12月 ・募経活動終了
  - 諸先輩を始め、学内教官各位の絶大なる協力により、目標額の12億円を達成することができた。内訳は下記のとおりであった。

一人	6,565件	365,058,877円
法人	317件	1,048,425,000円
計	6,882件	1,413,483,877円



この内、学内の教官による募金状況は以下のとおりであった。

一教授	212名	15,235千円	(構成員比82.8%)
一助教授	187名	5,355千円	(構成員比84.2%)
一助手	232名	2,918千円	(構成員比44.4%)
計	631名	23,508千円	(構成員比63.1%)

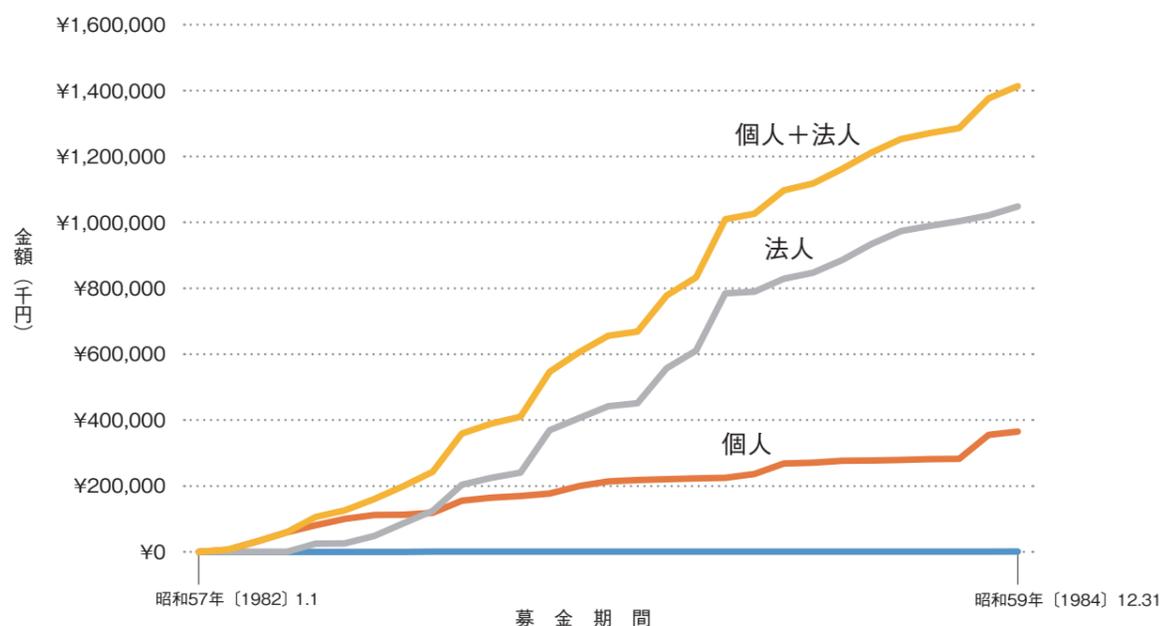
#### 昭和61年〔1986〕

- 6月 ・東京工業大学長あて百年記念館の寄附申し込み
- 9月 ・東京都に百年記念館建設計画通知書を提出
- 10月 ・百年記念館の寄附承認
- ・百年記念館建設工事契約の締結
- 一施工業者 建設工事共同企業体（構成は下記の5社）  
大成建設(株)（代表）、(株)大林組、鹿島建設(株)、清水建設(株)及び(株)竹中工務店
- 一工事期間 昭和61年10月～昭和62年9月
- ・百年記念館建設工事監理業務を委嘱
- 一委嘱業者 (株)木村俊彦構造設計事務所
- 一委嘱期間 昭和61年10月～昭和62年9月

#### 昭和62年〔1987〕

- 9月 ・百年記念館竣工
- 10月 ・百年記念館規則を制定
- 11月 ・百年記念館竣工披露式典を挙行
- ・百年記念館を募金会から東京工業大学へ寄附
- ・百年記念館開館

### 累計寄付金額の推移



# 百年記念館の建築家・篠原一男



東京工業大学教授 奥山信一

## 孤高の足跡

### ●カリスマは死なず

東工大百年記念館の建築的な意義を語る際に、その設計者を抜きにして話を進めることは難しい。母校が百年という永きにわたり発展してきた事実を、卒業生と現教職員および学生の誇りとして形象化し、そしてそれを後世に繋げることが記念館の責務であることはあらためて問うまでもないが、しかし同時に、この記念館には、設計を担当した建築家の生涯を賭けた活動軌跡のすべてが凝縮し、さらに次なる時代へ向けた建築的メッセージが刻まれているからである。

設計者の名は篠原一男（1925-2006年）、当時、東工大建築学科の意匠部門を背負う看板教授であった。しかしその名は旧聞に伏すとしても建築家として周知の存在である丹下健三や黒川紀章などに比べて、篠原一男の社会一般での知名度はそれほど高くなかった。しかし、それでも建築デザインの真摯な学徒、あるいは芸術分野の先鋭化した知性のなかでは、圧倒的な存在感を示していた。それはグローバルな水準で世代を超えていた。

例えば今から10数年前、たしか2000年前後のことである。スイスのある若手建築家から「シノハラに会いたい」と私に打診があった。当時の篠原は、東工大退官後に開設したアトリエ（設計事務所）を閉じていたので連絡の術がなかったのである。ラブレターを書く必要があるとの私のアドバイスに応じて、即座に届いた彼からの手紙には下記のような文面が綴られていた。

1979年から80年にかけて、篠原の個展と講演会がヨーロッパ5都市を巡回したことがある。そのうち

のひとつ、ETH（スイス連邦工科大学チューリッヒ校）主催の講演会を、建築学部に入学したばかりの一青年として彼は聴講していた。照明を落とした講演会場に映写された篠原作品の美しさを忘れられず、その日以来、展覧会のパンフレットを机上から離したことはないという。

その手紙を受け取った篠原は当然面談に応じた。来日したその青年は数多くの質問を用意していたが、いざ篠原に直面すると自身の紅潮を抑え、篠原の言辞に傾聴するのが精一杯であった。ちなみにその青年は、その後ETH教授としてスイス建築界を牽引する建築家となった。こうした若者の登場は、生前の篠原を知っているか否かにかかわらず、篠原逝去後10余年を経た今でも跡を絶たない。「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」というD.マッカーサーの名言を晩年の篠原は時折口にしたが、「カリスマは死なず、そして消え去ることもない」と読み替えるのが妥当な状況にある。

### ●パリジャンを走らす

1982年4月、私は東工大の建築学科に入科した。45名の新学科生を前にして、当時の学科長の訓示があった。その末尾で偶然に列席していた篠原を「日本の、いや今や世界のシノハラと呼ばれる建築家です」と紹介されたのが、なぜか脳裏に焼き付いている。

先にも述べたが、1979年から80年にかけて、建築家・篠原一男の初の海外個展がヨーロッパ5都市（パリ、アーヘン、ローザンヌ、チューリッヒ、バルマ）を巡回した。その勢いは大西洋を渡り1981年から83年にかけてアメリカ・カナダの5都市（ニューヨーク、ニューヘブレン、モントリオール、モントパ、ケンプリッジ）を巡り、1984年東京の日本建築学会会館大ホールにおける凱旋帰国展で幕を閉じた。

その皮切りは、フランス建築家協会主催のパリ展であった。篠原招致の強力な推進者が、今では世界的な建築家となったが、当時はフランスの若手建築家の先鋒であった若きジャン・ヌーベルであったことを後で知った。若干30代半ばのフランスの気鋭が、遙か極東の島国で小さな住宅に精魂傾ける篠原を注視せざるをえなかったのである。彼の熱意なしに篠原の海外巡回展の実現はありえなかった。

1979年の師走に開幕した展示会場は当初、聖誕節の雰囲気包まれた街の喧騒に押されてか、静かな空気が流れていたという。しかし年が明けると一転して、来場者は急増し、最終的にはル・モンド紙が「日本の建築家・篠原一男、パリジャンを走らす」とのキャプション付きで展示会評を報じた。伝統を踏襲しつつ、しかし常にそこへ新風を注ぐことを忘れないパリ市民の厳しい審美眼に、シノハラ建築は見事に応えたのである。

#### ●数学から建築へ

篠原が、抽象の極北である数学から、具象の最たる建築へ転向したことは建築界では周知の事実である。東京物理学校（現在の東京理科大学の前身）の数学科を1947年に卒業し、その年の6月から1950年3月まで東京医科歯科大学予科で数学の教鞭を執っている。その間、数学の学会が京都であった。敗戦直後の当時の日本では、ナショナリズムに直結する日本の伝統は見向きもされず、どの寺社仏閣も閑散とし、誰一人いない空間で仏像との対話を享受できたという。篠原にとって静かで、しかし貴重な時間が流れていた。学会の合間に奈良にも足を延ばし、唐招提寺を訪れた。通り雨の過ぎ去った後の陽光に咽ぶその大屋根の美しさに触れた瞬間、建築への転向を決めたと、後年篠原は述懐していた。

1950年4月、東工大建築学科に学士入学を果たす。一旦得た教職を辞してまで建築を専攻するその志に篠原の強固な決意を看取できるが、しかし、人事録上では東工大入学後の1年間は数学教官の職は継続し、「1951年3月、旧制課程廃止に伴い辞職」とある。自らの生き方に厳しかった篠原であったが、若き一青年の心中には、進路転向に際し一抹の不安を抱えていたのかもしれない。再び数学へ復帰可能なわずかな回路を残したのであろう。しかし篠原は、現代

の数学者を目指すには、あまりにもロマンティストの香りを纏いすぎている。古代ギリシャへの憧憬を幾何学への溺愛を含めて幾度となく語っていたからである。

そもそも近代の科学革命以前の数学では、数式という概念は希薄であったと言われている。またアリストテレス以前の古代ギリシャの科学哲学者たちの探求は、原則幾何学に限定され、その言辭は現代から見ると科学的言説というより詩人の言葉に近かったと、ノーベル物理学賞を受賞したS・ワインバーグの著書にある（『科学の発見』）。だからこそ建築に転向した篠原は、幾何学（形）と言葉（詩）で建築の未来を生涯描き続けねばならなかったであろう。

#### ●プロフェッサー・アーキテクト

1953年3月に建築学科を卒業後、篠原はその4月から図学講座の助手として東工大に残ることになった。当時の図学は一般教養の全学科目であり、すべての新入生が履修する必須科目であった。この講座に専任の構成員として教授および助教授が当時在籍していたかどうか詳らかではないが、事実上すべての授業と演習を篠原助手と数名の補佐員が担当していた。その後に助教授（1962年）、そして教授（1970年）と昇任する。助教授として研究室を構えてからは、建築の卒論生および修論生の研究指導を担当してはいたが、職務は一般教養の図学の教官であり、その傍らで建築意匠の研究と建築家活動を並走させていたのである。

篠原が建築学科に着任したのは、定年退官を数年後に控えた1982年、師である清家清が退官して3年の月日が過ぎていた。したがって篠原が、谷口吉郎、清家清といった歴代のプロフェッサー・アーキテクトの後を受け、東工大建築学科の看板教授として建築デザイン教育の指揮を執ったのは、わずか5年に過ぎなかった。

谷口吉郎（1904-1979年）は、東工大が官立大学へ昇格した1929年に講師として着任した。在職中に、千鳥ヶ淵戦没者墓苑（1959年）、東宮御所（1960年）などを設計し、1965年の退官後も国立博物館東洋館（1968年）、国立近代美術館（1969年）など国発注の建築を手掛け、ある意味で宮廷建築家の一翼を担う

存在であった。そして1973年に文化勲章を受章している。谷口の後を継いだ清家清（1918-2005年）は、第二次世界大戦後のアメリカナイズされた日本の住宅設計に逸早く和の感性を変奏し、新風を吹き込んだことで知られている。その後、東京オリンピック選手村メインゲート（1964年）、EXPO'70での幾つかのパビリオンを手掛け、また多くのプリンスホテルを設計した。そして篠原を筆頭に、数多くの次世代の建築家を輩出し、事実上現在まで続く東工大建築意匠系の系譜をもたらした。谷口にしても清家にしても、その偉業はここでの紙幅では紹介し尽くすことはできないが、あえて対比的に位置づければ、谷口が「官」の建築家であるとしたら清家は「民」の建築家であった。この2人の先人教授の偉大さは揺るぎないが、しかし、日本の、あるいは東工大の建築デザインを世界的水準で認知させたのは篠原であることに異論の余地はない。篠原は谷口から「官」の崇高性を、清家から「民」の身体性を建築デザインの根幹として引き継ぎ、そしてそれが百年記念館に結実したとも言える。東工大創立百周年記念事業と自身の定年退官が符合するという幸運を引き寄せたのも、時代のなせる技であった。

## 住まいの空間を「建築」に変換する論理

#### ●日本伝統と住宅設計

百年記念館の設計を手がける頃から、非住宅系の設計を開始し、後述するようにそこで大きな成果を残すことになるが、しかし、篠原は住宅設計を通して建築の存在意義を問うことに生涯を賭けた建築家であった。最終的には戦後日本を代表する大建築家となったが、しかし数学から建築への転向目的が建築家への道であったか否かは不明である。本意かどうか定かでないが、日本の伝統建築を研究対象とする建築史家を目指したが、1年先輩に平井聖という俊才がいたので諦めたと、後年冗談めかして洩らしたことがある。数学者への道を棄てまでしての転向であったから、別文脈の学者への志望は自然な選択に思える。建築設計という市井の職には生涯を賭すだけの価値を見出せなかったのかもしれない。しか

し、卒論指導を仰ぐことになった清家清が当時設計した住宅、おそらく「斎藤助教授の家(1952年)」であったと思うが、そこを訪れた瞬間、戦慄が走ったという。

敗戦後間もない当時の日本の国力下では、官も民も、いまだ大きな建築を実現する状況にはなかったが、着実に復興への足掛かりを胎動させていたはずである。それでも篠原は住宅という日常生活の舞台に、長い歴史を背負う建築の大文脈と拮抗しうる価値を見たのかもしれない。いずれにしても篠原は、日本の伝統建築の研究と並行して住宅設計に邁進することになった。その足跡をたどってみよう。

#### ●4つの様式

住宅の設計とは、住まい手という依頼者が存在してはじめて成立する仕事である。日常生活を営む場であるがゆえに、住まい手のライフスタイルが色濃く反映される。したがって、設計の解法は原則として住まい手に合わせた個別解にならざるを得ない。しかし設計を担当する建築家の方も、自身の得意とするスタイルがあり、それを研ぎ澄ますことで自身の方法と論理を確立するのが通例である。

当然、若き篠原も自身のスタイルを見定めて建築家活動を開始したが、しかしそれは洗練化への道に向かうことはなかった。約半世紀にわたる活動の中で3回、自身のスタイルを大きく変貌させた。しかもそれぞれのスタイルに自ら序数を付して〈様式〉と命名した。その〈様式〉とは、建築に纏わる大文脈をターゲットに組み立てられた。その変貌は単なる気紛れではなく意識的に実行され、〈様式〉ごとに見え掛かりこそ全く異なる相貌を示したが、しかし設計姿勢としては捨て去った〈様式〉の思想を内包する方法を貫いたから、変貌を重ねるたびに考慮すべき因子が増し、設計の難易度は確実に高まった。しかし、この厳しい姿勢は大学に籍を置く建築家の責務と自らに課したのである。

第1の様式（1953-1968年）で取り上げたターゲットは、日本の伝統建築であった。すでに述べたように数学から建築へ転向する切っ掛けが日本伝統建築との衝撃的な出会いであったから、これ以外の選択肢はありえなかった。日本の伝統建築に潜む空間の本質に迫る研究と、そこで得られた成果を小さな

木造住宅の創作へ還元させる試みであった。

この時期の日本の建築界の状況は、戦後復興の旗印のもとで、住まいの空間から都市計画までを滑らかに繋ぐアメリカナイズされた思想とデザイン手法が席卷していた。そんな状況下で、日本伝統と個人住宅の設計のみに向き合う篠原の姿勢は、その趨勢からみれば孤立と見做しうるが、しかし一蹴できない作品の魅力を携えていたからであろうか、「孤立」がいつしか「孤高」に転化した。この時期の名作「白の家(1966年)」は竣工後50年を経た今でも、国内外のメディアで引用紹介が跡を絶たない。

第2の様式(1970-1974年)では、ヨーロッパオリジナルのモダニズム建築(近代主義建築)の精神と向き合うことになった。モダニズムとは歴史を背負った古典主義の系譜からの脱却を目指して世紀末から20世紀初頭のヨーロッパで勃興した芸術運動であり、現在の私たちを身の回りの空間と直結するものである。篠原の言によれば、戦後の日本に導入されたモダニズムはアメリカ経由で輸入された通俗化したものであり、ヨーロッパオリジナルのそれとは別種であるという。第1の様式の日本伝統との対応と同様に、モダニズムの本質に迫る要請に駆られたのであろう。そこで篠原が目指したのがキューブ(四角い箱)であった。

多雨多湿な日本の気候風土では、深い軒の出が住宅の必須条件であった。この深い軒の出を消し去ってもなお成立するキューブの造形に、日本独自のモダニズムを模索する試みであった。しかもそこに篠原独自の空間イメージを重ねたのである。それは日本の伝統建築の研究時代に旅した漁村での印象的な光景、狭く暗い通路の先に広がる海の明るさであった。その瞬間の光景を抽象化し、<亀裂の空間>と自ら命名した空間をキューブに挿入することで、日本独自のモダニズムを篠原独自のモダニズムに変換させたのである。このコンセプトが明快に示された一連の住宅設計に対して、日本建築学会は1972年に学会作品賞を授与した。

#### ●旅の意味：都市論の構築へ

第2の様式を特徴づける<亀裂の空間>は、旅の途上で出会った光景がインスピレーションの源にあったと述べたが、都市への眼差しは、実は第1の様

式の頃から携えたテーマでもあった。1964年に上梓した最初の著書『住宅建築』で、東京郊外の住宅地風景を描写するくだりがある。それは雑多な住居が建ち並ぶ雑然とした情景であり、当時の進歩的建築家の多くが忌避する格好の対象であったが、そこに篠原は<混乱の美>とポジティブな評価を与え、それを現代都市の条件としたのである。しかし、当時の篠原はそれをそのまま住宅設計に反映させる段階に達していなかった。

第3の様式(1974-1982年)では、そうした現代都市の現実そのものと対応することになる。ある時は上空に迫る高圧線に、ある時は沖合に浮かぶ孤島に、またある時は落ち葉に咽ぶ緩斜面に、それぞれ直截に反応し、そこに篠原の内面に宿る心象風景を重ねながら住宅の空間を編んでいったのである。

日本の伝統に傾倒していた1960年代まで、篠原は国外に出ることはなかった。しかし一転して1970年にヨーロッパ・北アフリカへの視察の旅に出掛けた。そして1975年には、西アフリカへ再び旅立った。その時の印象記はいくつかの雑誌に掲載されたが、東工大クロニクルにも寄稿がある(「象牙海岸の街で」1976.9)。その目的は、しかし、常人の海外視察のように見知らぬ街への憧憬ではなかった。ターゲットはあくまで現代都市・東京。戦後に未曾有の復興を遂げた東京の空間的メカニズムを見定めるための旅であった。東京を相対化するため、もう少し明確に言えば、異邦人の眼差しで東京を掴まえるためであった。

すでに何度かこの原稿で触れたが、篠原の初の海外個展が1979年にフランス建築家協会の主催のもとパリで開催され、その記念講演がポンピドーセンターのレクチャーホールで始まった。冒頭で篠原は、自ら撮影した渋谷駅前の雑踏風景をスクリーン一杯に写し出した。ハチ公前広場から109ビルへ向かうショットであった。瞬間的にだが、聴衆の中に嘲笑に似たざわめきを篠原は感じたという。重厚な石造りの町並みに慣れたパリの人びとには、あまりにも乱雑で浅薄な情景と映ったのであろう。そして聴衆の緊張を解きほぐすために篠原が周到に準備した仕掛けと即断したのかもしれない。

しかし、篠原の真意は違っていた。この一瞬乱雑に見える都市風景のなかにこそ、現代の資本主義都

市が到達した象徴的内容を見定めていたのである。それをプログレッシブ・アナーキーと抽象し、自身の最も新しい作品コンセプトと連動させたのである。篠原の講演が進むにつれて、嘲笑は静寂と注視へと次第に変質することを篠原は実感したという。篠原の東京カオス論が、往年の芸術の都パリを舞台に、インターナショナルで認知された決定的な瞬間であった。

21世紀を迎えて10数年を経た現在では、渋谷駅前のスクランブル交差点は、世界中から東京を訪れる観光客にとって、最もポピュラーなセルフポートレートのあるという。いわゆる東京を象徴するインスタ映えする風景となった。今やニューヨークのタイムズスクエアと並んで、渋谷のスクランブル交差点は世界で最もよく知られた交差点となった。

しかし、今から約40年前、嘲笑こそあれ、この場所の魅力に反応しうる知性と感性は、篠原以外の誰一人の内にも宿ってはいなかった。

#### ●小さな空間に大文脈を

1950年代前半から始まった篠原の建築家活動は、1980年代初頭まで、第1から第3の様式として展開し続けた。その約30年間に篠原が設計した個人住宅は、平均してほぼ1年1作と寡作であったが、毎年コンスタントに話題作が建築界を賑わした。様式の展開につれて、その建築表現は大きく変貌を遂げたが、しかし、論理と作品の相互連関の見事さは、多くの建築学徒を魅了せずにはおかなかった。

そして何よりも篠原の設計する住宅は美しかった。活動初期の1962年に「住宅は美しくなければならない。失われたのは空間の響きだ」と高らかに謳い上げたのだから、そう易々と幕を引くわけにもいかなかったとも言えるが、様式の変貌にもかかわらず、たとえ都市の雑踏をテーマに掲げたとしても、そこでは<混乱の美>と逆説を込めて美しさを譲ることはなかった。

そこには当然批判もあった。人間の日常生活を耽美主義で貫いていいのかという至極真つ当な論駁であった。しかし篠原の場合は、通俗的な住宅作家が陥りがちな啓蒙主義の香りは払拭されていた。篠原の空間を求めるクライアントにのみ最高のパフォーマンスを示したに過ぎなかった。例えばすでに触

れた第1の様式の代表作「白の家」の敷地は、竣工直後に都市計画道路の範囲に指定された。約40年後の2009年、施策実施となった際に80歳を過ぎたクライアント夫妻は、「私たちのもっている唯一の芸術作品です」と言い放ち、近傍の土地への移築を決意した。このクライアントの永年の生活と移築までして遺したいという所懐が、空間の美と日常生活は同時並存可能であるだけでなく、むしろ美があるからこそ日常がより豊かになる事実を余すことなく伝えてくれる。

しかし、戦後の日本のように社会的生産物としてしか建築を位置づけられない社会的風土においては、小さな個人住宅をどれだけ豊かに、住みやすく、かつ美しく設計できたとしても、住宅作家としての局所的な評価しか得られない。だからこそ篠原は小さな住宅の空間を建築の大文脈に乗せるという困難な歩みを選んだのである。第1から第3の様式までを枠付けるテーマ、日本伝統、オリジナルなモダニズム、現代都市東京は、それぞれ建築デザインを前方へ送り出す可能性の海から篠原が意識的に選び取った大文脈であった。

この約30年にわたる、小さな空間と社会文化的な大文脈との真摯な交信を続けた末に、母校の創立百周年記念事業との遭遇という幸運が待っていた。篠原にとって、百年記念館の設計は、こうした建築家としてのセルフストーリーを背景に開始されたのである。そしてそれは、篠原自身の第4の様式の幕開けでもあった。

## 木立の上の金属質のシンドリカル・サーフェス

#### ●2つの伏線

百年記念館の設計の経緯について、篠原は蔵前工業会誌に文章を寄せている(「木立の上の金属質のシンドリカル・サーフェス」1988.1)。それによると、1983年の春からの1年間は、キャンパス内のいくつかの候補地が現れては消え、そして計画条件も不確かな中でのスタディが繰り返されたが、しかしこのスタディの過程のかなり早い段階で、ひとつのイメージが確定されたという。それは「木立の上

に輝く金属質の円柱面」あるいは「空中に浮遊するプライマリーな幾何学の機械」と記されていた。そして、あるひとつの計画案がその伏線にあるとの記述もあった。

1980年、UIA国際建築家同盟主催のDOM指名設計競技に、世界の著名建築家約30名の1人として篠原は招待されていた。DOMとは当時の西ドイツ・ケルンにある建築用の鍵を製造するメーカーで、その本社屋の設計者を特定するためのコンペティションであった。篠原が提出した案は、空中で水平に浮かぶガラスの4角柱を、地上から垂直に立つ金属質の4角柱2本が貫入して支持する幾何形態であった。残念ながら篠原の提案は、当時の建築界を席巻していた過度な装飾性を基調とするポストモダニズムとは掛け離れた抽象性を示したためか、最終設計者には特定されなかった。しかし篠原は、この計画案のイメージの再起を、百年記念館を題材に謀ろうとした。永い期間継続された住宅設計においても、自身の作品コンセプトを繰り返し反芻し、次なる表現へ昇華させるセルフリファレンスが篠原の様式を前進させる原動力であったことはすでに述べたが、百年記念館の設計においても同様な思考が働いたのである。

またDOM本社屋の計画案作成に取り掛かる少し前から、篠原にとって初の非住宅作品となる日本浮世絵博物館の設計が始まっていた。延床面積900㎡弱の小さな私設美術館であった。遺されたスケッチから最終実現案とは異なるさまざまなスタディの試行が確認できる。最終的には、幾何学好みの篠原には珍しく、奇妙な角度で屈折した4角柱が地上に置かれた案で実現した。DOMのように4角柱を浮遊させるにはコストと規模に無理があったのであろう。しかしこの4角柱はもはや単純なガラスの立体ではなかった。コンクリートとガラスによるさまざまなパターンの正方形が連なる、グラフィカルな構造体で実装された魅力的な建築が立ち上がった。後述するが、DOMの変奏ではあっても、この美術館はDOMとは異なった水準で百年記念館のデザインをドライブさせるもうひとつの伏線となった。

#### ●インビジブルマシン

現在の正門脇に敷地が確定したのは1984年の5月

頃であった。その時点で曖昧であった計画条件もある程度明確になっていたにちがいない。当初は科学技術博物館が主機能であったと聞くが、この時点でコンファレンスにも使えるホールや会議室などの学術交流の拠点施設であることが次第に重要性を帯びてきたのであろう。篠原と篠原研究室のスタディは一挙に具体化への方途を探ることになった。1984年の夏、いくつかの敷地で試行された完全な円柱と他の立体との加算的な複合体が、曲面を下向きにした半円柱と直方体との相貫という実現案に近い骨格がまとまり、それが記念事業委員会で第1次案として承認されたという。

その直後、1984年の8月末から、篠原はイェール大学の客員教授としてデザインスタジオを担当するため渡米することが決まっていた。栄えある第1回エーロ・サーリネン・チェアとしての招聘であった。エーロ・サーリネンとはアメリカの近現代建築の巨匠であり、伝統あるイェール大学建築学部がその名を冠して設立した記念講座の初代客員教授に抜擢されたのである。百年記念館の設計という大仕事を抱える篠原は多忙ではあったが、断る理由はなかった。ニューヘブンの授業を終えた後、ニューヨークに短期滞在し、その間百年記念館のスケッチ作業が日々繰り返された。

帰国はその年の暮れであった。4か月ぶりに研究室に戻った篠原は、最終実現案に直結するスケッチを研究室のスタッフに披露したという。半円柱を支える立体は単純直方体から大小2つの直方体を同じ高さの台形柱で繋いだ複合立体へと変化した。そしてこの立体の各面は、ガラスと金属面とが地と図の関係で反転可能なさまざまなパターンで構成され、全体として離散的なキューブの相を成していた。またこの立体と相貫する半円柱の直線軸はその中間から少し逸れた位置で屈折していた。

メインボディである複合立体の各面を構成するパターンの連なり、そして幾何学的には説明不能な半円柱の屈折角度、この2つは日本浮世絵博物館の造形手法の展開であることは明らかである。デザインの出発点はDOMから引き継いだ空中に浮かぶ単純幾何形であったが、そこに別種のファクターを重ねる作業がアメリカ滞在中の篠原の関心の中心であったことがわかる。

ちなみに、遺された篠原のスケッチを観察すると、最終案の最大の特徴である半円柱の屈折それ自体に、当初から能動的な意味を篠原が与えていたかどうかは不明である。まず、要求された部屋の機能配列からメインボディの複合立体が決定され、そこに直線軸の半円柱を架け渡したとき、縦動線を担う円形平面の階段室との交錯が生じた。それを回避するためのスタディとして、半円柱をカーブさせたスケッチが存在している。最終的には日本浮世絵博物館で試みた奇妙な角度の屈折を採用したが、そのモチベーションの発端は、形と機能の最適結合を探るスタディの反復から構想されたことが窺える。

いずれにしても、この最終案は第1次案に比べて、構造力学的な難易度は格段と増していた。離散的なパターンである壁面構成は、各構面では安定せず、すべての構面が寄り添ってはじめて安定する架構体であった。また地上に置かれた日本浮世絵博物館と違って、百年記念館の半円柱は、その屈折箇所にも構造的な支持部材はなく、そのままでは下向きに回転する力が働いてしまう。したがってメインボディと屈折した半円柱との相貫体として立体解析する必要があった。80年代中頃の当時のコンピュータの能力は現在では想像できないほど陳腐であったので、日本における建築構造設計界の権威である木村俊彦氏と和田章教授の要請を仰ぎ、そして大型コンピュータを駆使することで解析可能となった。構造力学的な難易度を機械における高性能と置換し、プライマリー幾何立体でカバーしたそれを、篠原はインビジブルマシンと名付けた。さらにそれを<零度の機械>と別称した。

#### ●零度の機械（ゼロディグリーマシン）

<零度の機械>とは、フランス現代思想界の巨人ロラン・バルトの『零度のエクリチュール』の翻案であることは明白である。1970年代中頃、非統一的な造形を主題とする第3の様式のコンセプトを編むために、文化人類学者のレヴィー・ストロースの『野生の思考』を<野生の空間>と読み替えたこともあった。言葉の響きに敏感であった篠原は、優れた思想家の言説と常に交信していたのである。しかし、<零度>も<野生>も、篠原が援用する場合は、思想家の哲学的論理のフォローとは別種の思考が働い

ていたと考えるべきである。

実は篠原は、バルトと直接の面識があった。パリでの個展開催時期の終盤、1980年2月8日に2人の対談が企画され、その内容が日本の建築専門誌に掲載されている（「いまはネオ、非創造性の時代・・・？」1980.7、新建築）。話題は、自由と多様性、伝統とヌーヴォーなどの概念を巡って展開され、その対談の末尾は、この年の春のバルトの日本再訪予定を問うた篠原に対し、「明日にでも日本をまた訪れたい気持ちでいっぱいです。」とのバルトの言葉で終わっている。しかし、残念ながらその対談から約2週間後に交通事故に遭ったバルトは、その1か月後に世を去った。次の対談が待ち遠しいほど2人の知性は交感していたが、しかし、篠原が自身のデザインコンセプトを構築する際には、言葉の響きもたらす思考の煌めき、ある種の詩人にも似た感性が稼働したと考えた方が妥当である。

バルトの『零度のエクリチュール』とは、文学において社会的立場を示唆する作家の文体が剥奪された状態（ラングとスタイルの間）の可能性を論じていると考えてよい。その解釈の是非をここで展開する紙幅はないが、バルトの『零度』とは社会的価値体系を相対化するために選びとられたのに対して、篠原の<零度>は造形とその内側の仕組みとの関係式に主眼が置かれていた。

例えば、『第1機械時代の理論とそのデザイン』を著した建築史家のR.バンナムによれば、産業革命から自動車の登場までを第1機械時代と暫定される。それは私たちの都市生活のインフラストラクチャーを司る機械の時代であり、そこでの機械の形は機構そのものが視覚化されていた。その後、家庭電化製品が日常に浸透する第2機械時代が始まる。バンナムの著書の刊行はこの時期と符合している。この時代の機械は、人間の身体スケールでハンドリング可能な形へと変質する。そして将来に向けて、情報技術との関係による新たな機械時代の到来を予告している（第3機械時代）。

21世紀の現代に生きる私たちにとって、バンナムの慧眼は容易にイメージ可能である。パーソナルコンピュータやスマートフォンなどの情報端末は、もはや機械と呼べないほどに私たちの身体とほぼ同化し、その内側に内包された驚異的な性能に比べて、

その形はあまりに簡素である。むしろ今やパッケージのシンプルさが逆説的に能力の高さを示す状況すら生じている。この一見してその機構を押し量ることのできない様相を、篠原はインビジブルマシンと直示し、そこでは造形と内部機構との関係式を成立させる根拠が限りなくゼロと考えられることから、アナログ的に百年記念館を<零度の機械>と命名したのである。

実はこの時期、篠原は自邸（ハウスインヨコハマ）の設計も同時並行で進めていた。それは延床面積約21坪と、篠原の住宅作品の中で最小規模に属するものであった。しかし篠原は、この小住宅と百年記念館を同一コンセプトで束ねることを目論んでいた。それは篠原が敬愛してやまないモダニズムの巨匠、ミース・ファン・デル・ローエが、かつて成し遂げた偉業でもあった。ミースは鉄とガラスと設備コアといった限定されたエレメントで個人住宅（ファンスワース邸）と高層ビル（レイクショアドライブ・アパートメント）を見事にひとつのコンセプトで貫き、モダニズムの金字塔を打ち建てた。しかし、その後の建築界の趨勢は、とりわけ篠原が活動を始めた戦後の日本では、個人住宅とそれ以外の建築一般とは別々の道を歩むことになった。第1から第3の様式へと、個人住宅を展開する際に、常に建築の大文脈をターゲットに掲げたのは、そうした状況への篠原の抵抗姿勢でもあったが、非住宅と住宅との統合を実作として示す機会がなかったのもまた事実であった。そうした意味で百年記念館と自邸の同時設計は、大きな空間と小さな空間を同一の造形言語で実践できるか否かの挑戦でもあった。<零度の機械>はそのために用意された造形言語であった。

## Modern-Next from Tokyo Tech

### ●ガンダムビル誕生

ニューヘブンおよびニューヨークで描き続けたスケッチをもとに、1985年の年明けから、百年記念館を具体化する作業が、大学が提示する細かな施設内容との調整も含めて、篠原研究室で一挙に進んでいった。そして、その年の秋には設計は完了した。その後、工事の竣工を待たずして国内外の主要な建築

専門誌でのプロジェクト発表が続いた。模型写真と篠原のテキストによる表明であった。篠原独特の造形理論を携えたその特異なフォルム、日本浮世絵博物館に続く篠原の非住宅作品の登場、そして東工大創立百年を記念するシンボリズムなどの条件が輻輳し、完成前から期待と不安が錯綜した大きな反響が交錯した。当の篠原本人の胸中にも同じ空気が流れていたのではないだろうか。

1987年秋の竣工直前、全貌を現した百年記念館を眺めながら、構造設計を担当した木村俊彦氏が篠原に告げたという。

「一步間違えばグロテスクな建築になる危険な造形でしたが、その一步を篠原さんは間違えませんでしたね」と。

篠原作品の技術的側面を永年サポートしてきた木村のこの言葉を受けた瞬間、胸中に巣食っていた不安は、すべて期待へと回収されたことを篠原は確信したという。

その後、プロジェクト発表時を凌ぐ勢いで、数多くのメディアがこの建築を取り上げることになった。そのほとんどは建築または芸術系のメディアであったが、なかには新聞や一般雑誌も含まれていた。ある時、大衆週刊誌が巻頭グラビアで百年記念館を取り上げたことがあった。そこには「ガンダムビル誕生」といったキャプション付きで説明文が付されていた。当時の目蒲線（現在の目黒線）も大井町線も、その軌道はキャンパス脇の地上を走っていたので、その車窓から百年記念館の偉容を仰ぎ見ることは容易であった。瞬間的に窓を横切るその光景に「ガンダムだ！」と子どもが連呼するのを耳にしたのがグラビア取材の切っ掛けであると記されていた。

最上階の半円柱シリンダーは建物内で屈折しているため、金属質のボディーから突き出すシリンダーの両端の角度は異なる。そのどこか生命力を仄めかす外観が、ロボットヒーローが高らかに両腕を掲げる勇姿を子どもに連想させたのであろう。原則としてポピュリズムを忌避する篠原であったが、社会的先入観の希薄な子どものストレートな反応を、<零度の機械>の一側面として好意的に受け取ったことを覚えている。

### ●モダンネクスト

百年記念館は建築界のみならず、一般社会においても当時の日本を代表する建築のひとつとなったが、しかし、1980年代後半は、多少の陰りは見せてはいたがポストモダニズムという状況下に未だあったことは否めない。歴史的折衷様式だけでなく多様なエレメントとその複合、あるいは非整合的な造形手法による形の豊饒さが無媒介に容認されていた時代である。百年記念館もその一変種と見做されかねない状況に晒されていた。そこで篠原は自身の立ち位置を、未来へ向けてより明快に表明する必要性に駆られていた。モダニズムの次の様式を示唆する<モダンネクスト>という造語はそこから放たれた言葉であった。ポストモダニズムは字義通りにモダニズムの後を受ける様式と解釈されるが、篠原はそれを、第二幕（次の様式）の開始までに暫定的に演じられる本筋とは無関係な幕間劇と断定していたので、第二幕を直截的に明示する言葉で差異化を謀ったのである。正確な英語では、ネクストモダン(Next Modern)となるが、ポストモダニズムとの違いは微妙である。だから英語文法の不備を告げられても自身の直感を譲らず、英語原稿での使用の際には、この単語に“©kazuo Shinohara”が付されることになった。それほどまでにポストモダニズムからの逸脱の必要性を実感していたのであろう。

1926年初版のアメリカにおける権威ある芸術史の入門書として“Gardner's ART THROUGH THE AGES”がある。まだ芸術とは呼べず、人類の祖先による芸術的な営為の嚆矢と目されるラスコーの壁画から始まる1000頁超の大部の書である。この第10版の20世紀後半期の建築部門で、ナイトの称号を受けたイギリス人建築家N.フォスターの香港上海銀行とともに百年記念館はその掉尾を飾った。この時点で、百年記念館は20世紀を締め括る最重要なメルクマークのひとつとして、世界の中で認知されたのである。

しかし、百年記念館には“Deconstruction”が、香港上海銀行には“Functionalism Again”が、それぞれ項目名として付されていた。あくまでもポストモダニズムの範疇で捉えられていたのである。

### ●ゴールデンライオン・メモリアル

2001年、“Gardner's ART”の第11版が刊行された。この時点で上記の2つの建築は、アメリカ人建築家、フランク・O・ゲーリー設計のビルバオ・グッゲンハイム美術館に置き換えられた。この建築は、『ダビンチコード』で世界的な知名度を誇る人気作家ダン・ブラウンの最新刊『オリジン』の冒頭の主舞台で取り上げられたので、ご存知の向きも多いかと思うが、大魚が大きな鱗を捲れ上がらせたかの如き豪快な造形で話題をさらった。“Gardner's ART”の編者たちがこの建築に付した項目名は“Disorder and Disequilibrium”である。ここからポストモダニズムの幕引きをいわゆるデコン（構成の破棄）に寄せる編者の意図を窺うのは容易である。しかし、ビルバオと百年の造形理論は真逆であった。ビルバオの特徴である鱗の如き捲れ上がる造形エレメントのすべてには、それらの位置関係を決定する根拠は皆無である。しかし、百年の場合は原則として完全なる幾何学で構成されながら、最上階の半円柱シリンダーの折線角度の1か所のみ奇妙な数値を導入することで、ガンダムに象徴される生命感を表出させたのである。

ビルバオがスーパーポピュリズムという名の時代を映す鏡であるならば、百年は20世紀の最終章から21世紀の空気を掴みつつ、近代以降の時間軸すべてを串刺しにする建築である。それでも、ポストモダニズムという範疇を超えて、それへの訣別を示す<モダンネクスト>が“Gardner's ART”の理解に届くには、今少しの時間と時代の風が必要だったのかもしれない。しかしその風は確実に吹いている。例えば、竣工後30年を経た今でも、世界中の建築の知性がこの建築に眼差しを注ぐだけでなく、実見を目的に東京を訪れることはその証左である。さらに時代を透徹した篠原作品とその理論が評価され、2010年のヴェネチアビエンナーレが、他界した芸術家としては異例のヴェネチアビエンナーレ記念金獅子賞を故人となった篠原に授与した。通常金獅子賞は、その作家個人の優れた業績のみを対象とするが、篠原の場合はその足跡は言うに及ばず、直接間接を問わずグローバルな水準で後世に多大な影響を与え続けている事実が評価されたのである。

すでに紹介した蔵前工業会誌に寄せた文章のなか



で篠原はいつにもなく謙虚に以下のように記している。

「この空間装置が私のプログラム通りに稼働していくことを期待している。しかし、一般的な学校施設とは異質な装置であり、これからの国際化の時代への対応を重要な問題として計画された装置の運転への特別な配慮を、同時にお願いしたい。」

ここには、この百年記念館が造形だけでなく、平面計画や設備計画などすべての側面において、通常

の建物とは一線を画するものであることへの自認と同時に、その価値を理解した上で未来永劫使い続けたいという願いが込められている。

篠原の建築作品のほとんどは個人住宅であるから、そこへのアプローチは原則不可能と考えた方がよい。そうした意味で百年記念館は学内にとどまらず、世界的な意味で貴重かつ稀有な存在であることを再認識したいと思う。

ヴェネチアから運ばれたゴールデンライオン像は、ご遺族のご好意により大学へ寄託され、百年記念館2階の特別展示室で、今でも光彩を放っている。

## 東工大百年記念館から 東工大博物館へ



東京工業大学 特命教授 道家達将

### 創設後100年を迎える東工大

東京工業大学は、明治14年〔1881〕5月26日に、「東京職工学校」という名称で、高等でなく、中等程度の工業技術の素養のある現場リーダーや工業教員を育てる日本最初の国立の科学・技術系学校として創設されました。その後、この名称が「東京工業学校」（明治14年）、「東京高等工業学校」（明治34年）となり、あわせて、教育内容も次第に高等化し、昭和4年〔1929〕には旧制の国立大学「東京工業大学」となり、単科大学とはいえ東京大学や京都大学等と肩を並べるようになり、昭和56年〔1981〕には、「創設100年」の記念日を迎えることになりました。思えば、この間に実に多くの本校の卒業生が社会的に大活躍して、今日に至りました。

今、ここで報告しようと思っていることは、この東京工業大学が、「創設100年」を迎える日のおおよそ7年前の昭和49年〔1974〕2月13日のことでしたが、当時、東京工業大学の学長であられた川上正光学長が、この日に開かれた全学教授会で、東京工業大学の「創設100年記念の準備を始めたい」という提案をされたことです。

このとき川上学長が、「記念事業の各種のものを思いつくままに列挙すれば」ということで挙げられた提案事項に、次のような「事業名」がありました。

1) 東京工業大学百年史の刊行、2) 創立百年記念館の建設、3) 百年記念研究奨励制度の創設、4) 百年記念国際研究会議の開催、5) 百年記念奨学金制度の創設、6) 東京工業大学歌の制定、7) 教職員表彰制度の創設、8) 財団法人東京工業大学後援会の充実、9) 東京工業大学カリフォルニア分校の建設。

その後の検討の結果から見ますと、これらの事業

案の中で、記念事業の代表的なものとなったのは、(1)の「東京工業大学百年史の刊行」と(2)の「創立百年記念館の建設」でした。

後者(2)についての川上学長の発言を「東工大クロニクル」(No.59 May, 1974)は、こう書いています。「適当な規模の「記念館」を建設し、本学の記念すべき研究機器、その他各種研究成果を収蔵、展示して、わが国工業教育史上、理工学界史に占める本学の地位を明らかにすることに役立てるため、一種の博物館的施設としてはどうかというもの。」と。

川上学長の御意見には、賛意は多々ありましたが、その実現には困難が予想されました。資金すなわち、博物館の建設費および展示のための費用や東工大における研究成果等の歴史的調査および展示準備作業等が必要でした。一部には「創立100年記念のための諸事業は、すべて100年の当該年中に完了あるいは創始すべきであろう」との意見がありましたが、それはとうてい不可能なことでした。

要するに、川上学長の提案を実現するには、「全学的な準備のための活動と時間」が必要でした。

川上学長は昭和48年〔1973〕10月24日に学長に就任、昭和52年〔1977〕10月23日に学長を終えられ、翌日からは次期学長として齋藤進六（昭和52年10月24日就任～昭和56年10月23日退任）に代られました。川上学長の提案は、次期学長に引きつがれました。川上学長の時代に、「創立百年記念準備会」（昭和49年〔1974〕4月4日～）、「記念事業企画委員会」（昭和52年〔1977〕1月～）と「百年記念事業案」が検討されていたものが、齋藤学長時代に具体化され始めました。昭和54年〔1979〕4月6日に開かれた評議会において、「創立百年記念事業実施委員会設置」が承認され、その3日後の昭和54年〔1979〕4月9

日に「第1回百年記念事業実施委員会」が開催され、「事業計画委員会」を含む4専門委員会が設置されました。

そして、昭和54年〔1979〕11月2日の「事業計画委員会報告」は、記念事業として、①百年記念館の建設、②国際交流基金の設定、③百年史の刊行の3事業の計画を述べています。そして昭和54年〔1979〕12月14日の「事業計画委員会」において、記念館の建設を具体的に進めるために小委員会を設置しています。メンバーは、平井 聖、安盛岩雄、藤本盛久の3教授と施設部長でした。

昭和55年〔1980〕9月4日には、「事業計画委員会」において「百年記念館の予算額」として「8億円の配分を決定」と書かれています。

昭和56年〔1981〕5月1日、実施委員会において、「事業計画委員会」から百年記念館の規模および内容が検討中であることが報告されました。

そして、「創立100年」の当日が来ます。昭和56年〔1981〕5月26日、東工大の創立70周年記念講堂で「創立百年記念式典」が挙行されました。

式典は、委員長関口利男教授の開会の辞に始まり、齋藤学長の式辞、手島精一の孫で東京芸大の助教授であった手島有雄氏の手になる「究理」と「精技」の2本の「百年旗」の贈呈の儀があり、次いで文部大臣田中龍夫、日本学術会議会長伏見康治、国立大学協会会長代行香月秀雄、蔵前工業会会長白沢富一郎ら各氏の祝辞がありました。

そして、翌27日には卒業生の土光敏雄（1920年東工大機械科卒、前経団連会長）の「建学百周年の回顧」と題する講演と森政弘教授の制作した百年記念の映画「究理と精技、東京工業大学の100年」が上映されました。いずれも参会者の心に深く残るものばかりでした。

## 蔵前工業会、東工大学長、百年記念館委員会の連携

「東京工業大学創立百年記念式典」は盛会裏に終わりました。では、「百年記念館」の方は、その後、どうなっているのでしょうか。着実に準備が進められておりました。

昭和56年〔1981〕9月28日には、「東京工業大学

創立百年事業資金募金会発起人会及び同会長・副会長の選任についての会議」が開催され会長に土光敏夫氏が選出されました。

募金活動を中心に百年記念館づくりの軸となったのは東工大の卒業生であり、同窓会の皆さんでした。

昭和56年〔1981〕10月13日、実施委員会において、「事業計画委員会」を改組し、新たに（百年記念館委員会等）3専門委員会が設置され、百年記念館の具体的な計画については「百年記念館委員会」で検討されることになり、吉見吉昭教授が百年記念館委員会委員長に任命されました。

この年昭和56年〔1981〕10月24日 松田武彦教授が新学長に就任されます。（～昭和60年〔1985〕10月23日任期満了、退任）

昭和57年〔1982〕1月1日 募金活動が開始され、昭和59年〔1984〕12月31日募金活動終了、と報告されました。

昭和57年〔1982〕5月20日の記念館委員会・交流基金委員会合同委員会において記念館委員会の中に①建設に関する小委員会（平井委員長）②展示に関する小委員会（道家委員長）を設置したことが報告されました。

昭和58年〔1983〕6月30日に「教授会構成員各位」として「東京工業大学創立百年記念館収蔵・展示物品および資料について再調査のお願い」の文書が、そして、その3か月後の1983年11月30日に、「百年記念館委員会展示部会委員の選出について（依頼）」が吉見吉昭百年記念館委員長から教授会の皆さまに出されました。内容は次のとおりでした。

「教授会構成員各位 1983年6月30日、東京工業大学創立百年記念館収蔵・展示物品および資料について再調査のお願い」

「東京工業大学創設100年」を記念し、百年記念館設立の準備が進められております。

東京工業大学の歴史、各学科・各研究室の歴史を後世の人、とくに入学してくる学生、院生諸君また学校内外の研究者、教育者に知っていただき、今後の科学者・技術者の教育・研究に役立てていただくべく、各学科・各研究室、そして、全学の研究・教

育に関する記念物・資料等をこの百年記念館に集めて、保存、研究調査し、その一部を展示したいと思います。

すでに、これまで幾度かの調査が行われ、理学部：情報科学科（6点）、工学部：有機材料工学科（20点）、無機材料工学科（289点、標本数百）、機械工学科（2点）、建築学科（3点）、精密工学研究所（12点）、工業材料研究所（2点）および古賀逸策先生遺品（約100箱）が提示され、一部は収蔵もされています。

しかし、まだ御提示のない学科が多く、しかも貴重な記念物が移転等により失われております。個々の物品や資料に対する評価につきましては見解の分かれることもあると思いますが、まずは、東京工業大学の100年の歴史において、共に学び、共に研究した際の記念物、資料（ノート、論文、原稿、書簡等を含む）で、後世に残したいものは、多々ある筈でございます。これまでの調査が不徹底であるとの意見もございまして、今回改めて、各学科さらに各研究室、さらには東京工業大学百年の間に教育・研究にあたられた皆様において、記念物、資料等残すべきものの調査をさせていただきたく思います。

まずは、このような物品、資料が存在するといったインフォメーションで結構でございますから、当委員会まで、文書にてお知らせいただきたく、よろしくお願ひします。当委員会では各物品、資料について、できるだけの故事来歴をお伺いして記録し、用意した倉庫にひきとらせていただきたく思います。

なお、設備更新の対象となった備品も、保存が可能ですので、ご相談下さい。

東京工業大学百年記念館委員会  
委員長 吉見 吉昭  
委員・展示部会主査  
道家 達將  
委員・記念館部会主査  
平井 聖

昭和58（1983）年11月30日  
「百年記念館委員会展示部会委員の選出について（依頼）」  
東京工業大学百年記念館委員会  
委員長 吉見 吉昭

創立百年記念館建設のための実施計画を推進するため当委員会に下記の構成による展示部会を設置して頂きたいと存じますので、貴部局より委員を御選出賜わりますようお願い申し上げます。

なお、この件につきましては、展示部会主査の道家達將教授にご相談に伺いますので、よろしくお願ひ申し上げます。

記

百年記念館委員会展示部会（案）

主査 道家達將

委員 理学部、工学部各系、大学院総合理工学研究科、各研究所、募金委員会、蔵前工業会より各1名、百年記念館委員会建築部会主査（平井）、事務局長

以上

昭和58年〔1983〕11月30日、吉見委員長から百年記念館委員会展示部会委員の選出について各部局に依頼状が出され、第1回展示部会委員会が昭和59年〔1984〕4月5日に開催されました。

東京工業大学百年記念館委員会  
第1回 展示部会委員会  
（1984）昭和59. 4. 5（木）  
13：00～

1. 経過報告について
2. 展示部会委員会について
3. 百年記念館に収蔵・展示する物品・資料について
4. 展示の方法について
5. 今後の方針について
6. その他

百年記念館委員会展示部会委員会名簿  
昭和59（1984）年4月5日

所属	職名	氏名	内線	備考
理学部	教授	栗野 満	2448	
工学部	助教授	高久 明	2434	

〃	教授	加藤 誠 軌	2518
〃	〃	谷口 雅 男	2194
〃	〃	西本 謙	2162
〃	〃	小野田 真穂樹	2145
〃	〃	福田 豊 彦	2264
〃	〃	安居 院 猛	2082
総合理工学研究科	〃	関根 太 郎	2428
〃	〃	武者 利 光	2546
資源化学研究所	助教授	石田 愈	2254
精密工学研究所	教授	河原 田 弘	2050
工業材料研究所	〃	宗宮 重 行	2309
原子炉工学研究所	助教授	有富 正 憲	3059
教育工学開発センター	教授	森 政 弘	3230
募金会専務理事	教授	竹中 俊 夫	2542
百年記念館委員長	〃	平井 聖	3148
百年記念館委員	〃	吉見 吉 昭	2267
〃	〃	道家 達 將	3159

東京工業大学百年記念館委員会  
第1回 展示部会委員会議事メモ

日時 : 昭和59年(1984)4月5日(木)13:30~  
場所 : 事務棟2F会議室

出席者: 高久 明、小野田真穂樹、西本 廉、谷口雅男、福田豊彦、関根太郎、武者利光、川原田弘、宗宮重行、有富正憲、竹中俊夫、吉見吉昭、道家達將

議事 : 東京工業大学百年記念委員会委員長 吉見吉昭教授から、教務部長に就任したため、委員長を平井 聖教授にかわった旨報告があった。

展示部会主査道家達將から、展示部会委員会成立までの経過報告がなされた。そのなかで、百年記念館に収蔵・展示が期待される物品・資料のうち、これまでにリストアップされたものの一覧が示された。展示の方法につき物品と情報が提案された。

展示部会の今後の仕事について、各委員から次のような意見が出されました。  
・百年記念館は、多目的に使えるようにし、一部を

博物館とするには、何をいかに展示するかが問題である。

- ・博物館の性格として、記念碑的なものにするのか、系統だてられたものにするのか。
- ・収蔵するものは、ある部分のものであるとしても、系統だてられたものにすべきだ。
- ・過去に顕著な業績を挙げたものを集めるべきだ。
- ・系統的にするには数点ではだめで、数多く集める必要がある。
- ・重要なもので、これまで軽視して棄ててしまったものが多い。また空襲で焼けもした。
- ・百年記念館は、今後コレクションをふやしてゆく拠点としての機能をもたせるべきだ。
- ・収蔵には広い場所が必要。たとえば国立歴史民俗学博物館では、展示部分少なく、収蔵庫は広い。
- ・当面は、1) 研究室であずかっていたかく、2) 記念館用倉庫にあずかる。3) 別に収蔵庫を用意する、等考えてはどうか。
- ・一般に展示する部分と研究者にのみ展示する収蔵庫部分として分け、一般展示部分は小さくしてはどうか。
- ・展示する以上は物語がなくてはならない。
- ・とりあえず数本つくってみてはどうか。例として古賀先生・加藤與五郎先生・ワグネル先生。
- ・工作機械の歴史、歯車、旭焼から近代窯業へ。
- ・これまでに使ってきた計測装置を集める。など本学で始まったものはシナリオが書きやすいのではないか。しかし、それにこだわらず、各委員がつくってみる。
- ・展示の方法として、物品の展示だけでなく、“情報だけを展示する”方法を重視したい。
- ・“情報を主とした博物館”のアイデアをつぶさないで発展させるべき。うんと新しいことをやっらい。
- ・図書館の情報もひっくるめて入れる。文献の情報も。
- ・ビデオテープ、光ディスク、スーパーコンピューターなどを使う。
- ・これまでの東工大を見せるだけでなく、それ以上にこれからの東工大を展示するような思想と方法が必要である。
- ・東工大の百年記念事業として、東工大がイニシアティブをとって世界各国から知識と情報を得、世

界各国に使ってもらえる新しい情報博物館の構想を実現すべきだ。

- ・大阪の国立民族学博物館や金沢工大のライブラリーセンターよりもっと新しいものにする。具体案を検討してみてもどうか。

●百年記念館の展示について考える。

百年記念館の百年史記念展示について、考えるようにと、当時の工学部長関口利男教授、募金会専務理事竹中俊夫教授、百年記念館専門委員会委員長吉見吉昭教授から申し渡されたのは、建物の計画がすでにかなり進んでいた数年前の時期でした。まずは、学内に残されている記念物の調査から始めました。学内記念物については、すでに初代技術史教授山崎俊雄先生の学内記念物調査研究があり、これが大いに役立ちました。(山崎教授は「平野コレクション」(Dr.ワグネル先生の門下生で、助手となり教授となられた平野耕輔のコレクション)や「和田改革の資料」なども大切に保存してこられた。それらをもとに、さらに学内全域の調査を行ったところ、保存展示すべき記念物、つまり「東工大の宝物」が学内のあちらこちらに丁寧に保存、あるいは廃棄寸前の状態で放置されていることがわかりました。まずは、価値ありと思われるものの一覧表と資料づくりから始めました。

同窓会の蔵前工業会館には、手島精一先生の遺品が保存されており、学内の無機材料学科の加藤誠軌教授の研究室にはすでに、「平野コレクション」の展示室があり、有機材料学科には、多数の繊維関係の大型の機械が、機械学科には、スターリングエンジンやパーソンズ・タービンなど世界的に貴重な機械の記念物が、電気三学科には、浅場技官の手で多数の計測器機や、東工大で研究された真空管などが、また長津田の精密工学研究所には、古賀先生の水晶関係物品が、建築には、谷口吉郎教授関連コレクションやプレコン一号がありました。

いわゆる記念物だけでなく、百年史編纂に際し、小林靖雄教授や田代和久さんが集められた文書類も多数存在することがわかりました。博物館だけでなくアーカイブス(記録保存館)も設けた方がよいと思いました。

昭和59年〔1984〕4月5日、正式に「百年記念館

専門委員会展示部会」が発足しました。学内の各分野からの18名の委員の先生方と、幹事役としての施設部企画課、経理部経理課の人たちとで、この日第1回の展示部会委員会をもちました。(以後開館までに32回開催しました)

まず性格としてここが記念館か展示博物館か、誰に何を見せようとするかが論議され、論議の中から単に過去のを並べるのではなく、未来の東工大のためになる展示を、未来のために過去との対話を可能にする展示を、さらには過去のを集めるだけでなく、むしろ、これからの百年に向かって、日々ここを拠点として、史料や記念物を集めていこうということが申し合わされました。展示の性格としては、記念館的なものと、展示博物館的なものとを兼ねることになりました。見てもらう対象は、むしろ若い人、これからの人に、という意見が多かった。

何よりも、物品を置くにも収蔵するにも、展示できる面積が少ない(地下、1階各400m<sup>2</sup>)ことが悩みでした。とすれば、情報博物館、つまり豊富なデータ・ベースを備え、コンピュータ・グラフィックスなど電子器機を駆使して、過去および現在の科学、技術と対話できる展示室をつくろう。夢はふくらんだが、現実は、きびしく、予算の壁が大きかった。

検討の結果、まずは第一段階として開館時を考え、大筋で次のような展示計画をたてました。

1. 地階の2室のうち1室(約200m<sup>2</sup>)を常設の特別展示室とし、ここに本学ゆかりの人びとの記念物を展示する。
2. 地階の他の1室(約200m<sup>2</sup>)として、一部を特別展示室の延長としての展示に使う。他は、記念物を収蔵保管するが、見たい研究者には、収蔵庫展示として公開する。
3. 1階展示室は企画展示室とするが、3種の展示を行い、一部は常設とする。
  - A(常設)写真(パネル)で見る東京工業大学の百年。歴史的な写真パネル約80枚(数十cm四方のもの)を展示台と壁面とを使って展示する。
  - B(常設)光ディスクによる東工大百年記念映画「究理と精技」の随時上映。映画を光ディスク化する。
  - C(常設)スライドで見る東工大各学科等案内。学部各学科、各群、各研究所、研究施設、各センター、付属高校、大学院各専攻等、さらに大学全体

をスライド約50枚と、テープで解説したものを置き、自分の見たいものを随時見れるようにする。人の入れ替えもあり、毎年さしかえねばならぬので、光ディスク化する費用が著しく安くなったときは、光ディスク化するが、当分は、スライドでいく。スライドは各学科等で作成していただく。作り方は森政弘先生に御指導いただく。

D（1か月のみ）東工大における最近の研究に関係あるもの、具対的には、光通信システム、ホログラム、ロボットの3つを展示させていただくことにしました。

4. 東工大百年史の史料（文書、写真など）を集め、整理し、目録をつくり、保管し、研究、教育に利用できるようにする。この部門は東京工業大学アーカイブズの基礎となるようにする。また、次期の東工大の歴史編纂（例えば百二十年史、二百年史）に役立つようにする。

地階の特別展示室に何を展示するかについてはかなりの議論がありましたが、結果として、次のように決まりました。

- Ⓐ 東工大設立と基礎づくりに尽力された人のうちから、G.ワグネル博士、正木退蔵初代「東京職工学校」校長、手島精一校長に関するもの。
- Ⓑ 東工大に学び芸術家として活躍した人たちの中から河井寛次郎、浜田庄司、島岡達三および先輩の板谷波山（東京美術学校の彫刻家卒、ワグネルの門下の北村彌一郎に陶芸を学び、東工大の窯業科の教員（嘱託）となり、のちに独立し、昭和28年〔1953〕に陶芸家として初の文化勲章を受章した人）（以上陶芸家）、芹沢銈介（染色家）の諸氏の作品および平野コレクション。
- Ⓒ 東工大において挙げられた研究成果の中から、古賀逸策先生の水晶発振子の研究、森田先生のマイクロ波用電子管の開発と通信実験。そして、加藤興五郎、武井武、星野愷先生らのフェライトの研究、また中田孝先生らの歯車の研究。
- Ⓓ 谷口吉郎先生の「清らかな意匠」を求めた建築設計研究。
- Ⓔ そして、内田俊一先生らの本邦最初の「化学工学科」設立に関するもの。
- Ⓕ 星野敏雄、佐藤徹雄先生のビタミンB<sub>2</sub>の工業的合成等の研究に関するもの。

Ⓖ 第二次大戦後、「和田改革」と呼ばれる東京工業大学の民主的改革、再出発のリーダーとして活躍された和田小六学長に関するもの。

Ⓖ 東工大における原子核物理と原子炉工学研究に関するもの。

1階における写真でみる東工大百年史については、展示する写真の乏しいことに悩まされ、「蔵前工業会誌」を始め、学内各位に写真の提供をお願いした。その結果は、昭和20年頃までの写真史料は、アルバムなど、多くの卒業生の方々から多数申し出があり、お借りすることができて甚だ幸いでした。

展示の設計に関してはGK設計（東京都豊島区南池袋1-11-22、山種ビル内）栄久庵憲司社長、施工は白水社（東京都中央区日本橋茅場町2-2-8）にお願いし、篠原先生の指示をいただきました。

## 東京工業大学百年記念館の竣工

建物のデザインは昭和58年〔1983〕度中に篠原一男教授に委託され、昭和61年〔1986〕10月に着工、翌昭和62年〔1987〕9月に竣工し、11月3日に竣工式典を行い開館しました。

開館に伴い百年記念館規則が制定され、館長である田中郁三学長のもと、百年記念館運営委員会が組織され、その下に展示部会を引き継ぐ形で百年記念館展示部門専門委員会が設置され、博物館活動の実施にあたりました。歴代展示部門専門委員会委員長は、平井聖教授（昭和63～平成元年〔1988～1989〕度）、（平成2年〔1990〕度は空席）、小出耕造教授（平成3～4年〔1991～1992〕度）、小野田真穂樹教授（平成5～6年〔1993～1994〕度）、入野修教授（平成7～13年〔1995～2001〕度）、森泉豊栄教授（平成14～16年〔2002～2004〕度）、亀井宏行教授（平成17年〔2005〕度～）です。

事務組織は、開館前は庶務部庶務課が担当していましたが、寄附建物のためか担当部局が定まらず、昭和63年〔1988〕4月から研究協力部研究協力課、平成16年〔2004〕4月には学術情報部情報図書館課、平成23年〔2010〕7月からは研究推進部研究企画課と変遷しています。

百年記念館は、構想段階では博物館として考えられていましたが、学内の会議室不足などの問題から、

コミュニケーションを図る場所としての機能も必要ということで、2階の大部分は貸し会議室として開館しました。そのような状況下で、博物館活動は続けられ、1階や地階の展示室を飾る以下の作品を寄附として受け入れました。

・岡本陸郎（昭和44年〔1969〕金属工学科卒）の絵画作品「風景」

・石井勢津子（昭和45年〔1970〕応用物理学科卒）のホログラム作品「アクエウスのつぶやき」（平成15年〔2003〕1月23日、石井勢津子寄贈ホログラム点灯式開催）

・島岡達三（昭和16年〔1941〕窯業学科卒）の陶芸作品群（中澤三知彦：昭和16年〔1941〕窯業学科卒より多数寄贈。平成12年〔2000〕12月15日、重要無形文化財保持者（人間国宝）島岡達三作品展・記念講演会開催）、また、かなり後のことですが、濱田庄司・24点、濱田晋作・9点、バーナード・リーチ・1点の陶芸作品群を株式会社日立ソリューションズより、本学卒業生小野 功氏のお力添えによりご寄贈を受けました。

### ●特別展示と講演会の開催

平成11年〔1999〕度からは、百年記念館特別展示・講演会などの企画を実施するようになりました。現在までの特別展示・講演会は以下のように12回を数えました。

第1回（平成12年2000. 3.21～3.25）内藤喜之・亀井宏行「古賀逸策生誕百年記念展・講演会－光輝く水晶の業績－」、第2回（平成13年2001. 6.19～6.21）「島岡達三陶芸作品特別展・記念講演会」、第3回（平成14年2002. 7.10～7.12）相澤益男・北條春夫「中田孝記念展示・講演会～学遊一如の多彩な人生～」、第4回（平成15年2003.10.15～10.18）森泉豊栄・白川英樹・池田富士太・石曾根隆「神原周記念展示・講演会～高分子新時代への道～」、第5回（平成16年2004.10. 5～10.10）水谷惟恭・阿兄雄之「G.ワグネルが開いた近代日本陶芸・先端セラミックスの美・用・学の世界」、第6回（平成16年2004.12.14～12.18）山本直紀・高柳邦夫「電子顕微鏡がみせる新たな世界 ナノワールド展～ナノからピコへの挑戦～」（特別展示のみ）、第7回（平成18年2006. 5.11～5.23）辻内順平・石井勢津子・山口

雅浩「ホログラフィー～サイエンスからアートへ～」、第8回（平成18年2006. 7.22～7.30）広瀬茂夫「先端ロボットの世界～社会に役立つロボットの創造～」、第9回（平成19年2007. 7.19～7.28）広瀬茂久「進化するスーパーバイオワールド」、第10回（平成20年2008. 7.17～7.26）末松安晴・伊賀健一「光で拓がるネットワーク－レーザと光通信－」、第11回（平成20年2008.10. 2～10.21）「坂本一成 建築展『日常の詩学』」、第12回（平成22年2010.11. 4～12. 3）遠藤康一「東工大大岡山キャンパス－その歴史と未来－」（「東工大130」協賛事業）。

そのほかの企画では、「萬來舎」写真展・シンポジウム「谷口吉郎とイサム・ノグチ 建築と彫刻のコラボレーション」（平成18年2006.11.13～11.25）、特別企画「マザーマシンの原点をみる」機械遺産第3号「足踏旋盤」里帰り展示・講演会（平成20年2008.11.22～平成21年2009. 3.26）、島岡達三回顧ローテーション展示（平成21年2009. 7～平成22年2010. 3）、IEEEマイルストーン受賞記念特別展示「フェライトの80年～東工大とTDK日本オリジナルの発明が世界的事業に～」（平成22年2009.10.13～10.20）などがあります。

また、平成12年〔2000〕度には、白川英樹のノーベル賞受賞を記念した展示コーナーを開設し、その除幕式展も実施しました（平成12年〔2000〕12月21日）。

さらに平成19年〔2007〕度からは、軽食をとりながら気楽に科学の話聞く企画「サイエンスカフェ」を始め、平成19年〔2007〕度は7回、平成20年〔2008〕度は4回、平成21年〔2009〕度は4回、平成22年〔2010〕度は1回（10月現在）実施して好評を博しています。

### ●収蔵品の増加

上記の活動を通じて、寄附等により収蔵品も増加の一途をたどっています。百年記念館は、開館当時は地階の特別展示室（195平方メートル）・収蔵庫（212平方メートル）のみが、常時展示・収蔵に使える空間でしたが、収蔵品の増加に伴い、平成12年〔2000〕年には内藤喜之学長の配慮で本館地階に収蔵庫（38平方メートル）を設置、さらに平成15年〔2003〕には相澤益男学長の配慮で西地区に収蔵庫（83平方メートル）を建設しました。展示スペースに関しては、

平成16年〔2004〕に特別展示室内に美術館展示ケースを設置、平成17年〔2005〕度の地階収蔵庫の展示室への改装（平成18年〔2006〕3月24日オープン）、平成22年〔2010〕度には2階の会議室の展示室への改装を実施しました（平成22年〔2010〕7月22日オープン）。

この改装は、平成22年〔2010〕度グッドデザイン賞を受賞しました。平成17年〔2005〕度の改装では、倉庫に眠ったままになっていた繊維機械類などの大型機器の常設展が可能となりましたが、平成22年〔2010〕度の改装では、東京職工学校創設から現在に至る本学の沿革を紹介する展示室、百年記念館の設計者である篠原一男名誉教授の作品を紹介する展示室、旧地球史資料館の展示室を引き継いだ「地球史展示室」、水晶発振子からマイクロ波・光通信に至る研究開発の歴史を紹介する展示室、と4つのテーマ別の展示室を設けました。おりしもこの年ベネチア・ビエンナーレで篠原一男が「金獅子賞」を受賞し、自らが設計した建物とそのなかに展示室がセットで存在する形となり、百年記念館が篠原を記念する世界的モニュメントと位置付けられることになりました。

収蔵品には、パーソンズ・タービンや世界で唯一可動状態で保存されているスターリングエンジン、近代窯業発展過程の資料集「民芸運動」の中心を担った河井寛次郎・濱田庄司・芦沢銈介・島岡達三の作品群、世界最大のホログラムコレクションなど、世界的に貴重な資料も多い。

#### ●東工大博物館へ

百年記念館は、平成22年〔2010〕の改装で博物館の体裁を備えるようになりましたが、博物館としては人的組織もスペースも十分ではありません。博物館をつくらうという構想は、創立百年記念事業の終了後も続き、末松安晴学長時代には、百年記念館、東京都選定歴史的建造物であった水力実験室と、線路沿いの一角を博物館地区として整備する構想もたてられました（東京工業大学の将来構想、平成5年〔1993〕7月、p133）。また、平成9年〔1997〕度からは、博物館設置へ向け概算要求も作成されましたが、実現に至りませんでした。

そこで学内措置として博物館を設置することと

し、平成22年〔2010〕12月に発足した東京工業大学博物館設立準備会（主査：三島良直教授）にて検討を重ねました。その結果、まず百年記念館とすずかけ台フロンティア創造共同研究センター棟1階にある展示室「東工大新技術コーナー」をあわせて「東京工業大学博物館」を組織する案が上申され、平成23年〔2011〕4月1日をもって、東京工業大学博物館が設立されました。

#### ●展示に協力してくださった人たち

ロボットについては、森 政弘先生、梅谷陽二先生、広瀬茂男先生に、ホログラムについては、辻内順平先生、安居院猛先生、本田先生、山口雅浩先生に、光通信システムについては、末松安晴先生、伊賀健一先生に大変お世話になりました。関係各位に深く感謝の意を述べさせていただき次第です。

なお、本学の宝物の1つで、機械科に大切に保存されてきたスターリングエンジンは、本学付属高校機械科の先生や生徒の申し出を受けて修復をお願いしていましたが、その後修復成り、開館記念特別展示期間中の去る11月20日午後、百年記念館西側で公開運転実験を行い、木炭を燃料に、かなりの速度で動くことが実証され、見学者一同を驚かせました。（本件は、平井聖教授の御協力を得て実行でき感謝しています）。現在は風雨を避けるべく、地下の収蔵庫に保管してありますが、できれば運転することのできる場所に置いて、年に一度くらい動かして欲しいとの要望がよせられています。あらためて工夫したい。

なお、本展示準備は、多くの人の協力でき上っていききましたが、とりわけ、平井研の大学院博士課程修了生で、博士論文を執筆しつつ本展示に献身的に努力してくださった稲葉信子さんには格別にお世話になりました。心から感謝する次第です。ありがとうございました。

#### ●東工大百年記念館の学外出張

平成8年〔1996〕9月6日～8日、国立磐梯青年の家からの要望で「磐梯博覧会'96」が開催されました。国立科学博物館・東大・東北大等24団体と共に「東工大百年記念館」が参加し、所蔵品の実物展示とスターリングエンジンやリボン織機、地震振動

装置等の実演を行いました。

展示品には、東工大が発明した歯車・ロボット・マイクロマシン、水晶時計、ホログラム、マイクロ波・ミリ波通信装置、フェライトなどがあり、多数の参観者がありました。本展示会開催については、辻内順平先生、奥山信一先生および事務局の竹田和彦氏ら多数の東工大の方に格別の世話になり成功することができました。

私は、平成3年〔1991〕7月すでに本学を定年退官し、茨城大学、電気通信大学、放送大学に勤務しておりましたが名誉あることに、本学の末松学長から、本学の百年記念館の資料調査員として資料収集・調査の業務を行うよう委嘱され、今日も勤務しております。（平成18年〔2006〕特任教授の称号付与、平成20年〔2008〕より特命教授の称号付与）。展示部門専門委員会の下には、平成3年〔1991〕受け入れ資料の評価にあたる歴史部会が組織されました。平成20年〔2008〕7月には、館長を学長から企画担当理事・副学長とする規則改訂が行われました。

# 百年記念館から博物館へ

東京工業大学 教授 副館長 亀井宏行



一種の博物館施設として構想された百年記念館でしたが、コミュニケーションをはかる場所としての機能も追加され、竣工時には展示室と会議室の集合体となってしまいました。そうした中で、博物館活動を継続し、最終的には、2011年3月31日に博物館相当施設の指定を受け、翌4月1日に東京工業大学博物館が組織されました。百年記念館開館から博物館設置に至るまでの道程をふりかえり、最後に博物館として課せられた役割についてまとめてみました。

## 博物館機能を担った百年記念館展示部門専門委員会

百年記念館における博物館活動の中心を担ったのが、百年記念館展示部門専門委員会です。展示部門専門委員会は、1982年5月、百年記念館委員会の中に設置された建築と展示に関する2つの小委員会のうちの一つ、展示小委員会に起源を持ちます。展示小委員会の委員長には、道家達将教授が任命されました。小委員会は、1983年に部会と改称され、委員長も主査という呼称になりました。1983年11月30日に、百年記念館委員会委員長吉見吉昭教授（吉見教授は1984年4月に、教務部長に就任されたため、委員長は、平井聖教授に交代）より、展示部会委員の選出について各部局に依頼が出され、第1回展示部会委員会が1984年4月5日に開催されました。この時選出された委員の方々は、安居院猛、有富正憲、粟野満、石田愈、小野田真穂樹、加藤誠軌、河原田弘、関根太郎、宗宮重行、高久明、谷口雅男、西本廉、福田豊彦、武者利光、森政弘の15氏で、それに募金会から竹中俊夫氏、百年記念館委員会から、平井聖、道家達将、吉見吉昭の3氏を加えて、展示部会が構成されました。展示部会は、当初は月一回の

ペースで開催され、何を集めどのように展示するかについて議論されました。百年記念館の初期の展示の準備を行い、1987年度末を持って、その使命を終えました。活動の基本方針は、1985年6月20日の「百年記念館展示部会 作業基本計画について」の前文に、

「百年記念館資料室は、過去百年の東京工業大学の歴史或いは本学関係者の研究業績に関する資料の収集・整備・保存・展示などといった大学資料館としての基本業務を行うことはもちろんのこと、これらを軸としてより広範囲に工学教育・科学技術に関係する情報を今後の東京工業大学の百年を展望しつつ収集し提供するセンターとなることを期待されている。」

とあります。展示の当初案としては、手島精一関係、ワグネル関係、フェライト関係、谷口吉郎関係、古賀逸策関係の常設展示、東京工業大学百年史及び新しい科学技術の企画展示を中心とし、コンピュータによる情報検索、光ディスクによる文書や写真の保存・検索などの当時の最新技術の導入も検討されていました。その後、平野コレクション、中田孝の歯車研究、内田俊一の化学工学関連、ビタミン研究展示などが追加されていきました。また、各学科等案内のためのスライドと音声からなる資料の作成も検討されました（地下展示室に設置された）。

百年記念館開館に伴って、1988年には展示部会を引き継ぐ形で展示部門専門委員会が設置されました（1988年5月13日）。委員の構成は、展示部門主事と、博物館活動に興味をお持ちになり積極的に参加していただく「資料調査員」と、館長（学長）が必要と認める専門委員（おおよそ各系（附属高校も含む）1名、任期2年）からなっていました。資料調査員は、学長指名で、任期はありません。

初代展示部門専門委員会委員長は、展示部門主事の平井聖教授（1988～1989年度）で、資料調査員は、道家達将、山崎正勝、藤岡洋保の3氏でした。1989年度には小野田真穂樹、木本忠明、小佐野重利の3氏が、追加で任命されています。最初の年度の企画展示については、工大祭に合わせて企画を立てようとしたのですが、防犯上及び事務職員に過度の負担をかけられないという大学側の事情により、工大祭期間中に百年記念館は開館できないこととなり、企画は頓挫しました。そして、翌年度までも含めた展示計画を立てることになりました。翌1989年2月に、電子顕微鏡展、さらには篠原一男作品展などが企画されました。1990年3月末には、日仏文化会館懸賞設計展示、同年4月には、西独シュテューデル・シューレ校関係展示と、建築関連の展示が開催されました。

1990年度は委員長は空席でしたが、当時の資料調査員、小野田、木本、山崎、小佐野、藤岡氏の連名で、末松安晴学長（在任1989年10月～1993年10月）に対して、「百年記念館資料調査室整備に関する要望」を提出しています（1991年3月1日）。前年度末に展示部門主事であった平井聖教授が退官された後、委員会活動が休止状態になってしまったことを憂い、専任の教員、研究員からなる組織の必要性を説き、展示部門専門委員会を、展示計画の主要業務を担う「展示部会」と、過去及び将来の資料などの収集・整理・保存・展示を担う「歴史部会」の2部会体制への分割を要求するものでした。

翌1991年度からは小出耕造教授（1991～1992年度）が委員長に任命されました。小出委員長時代の資料調査員は、吉川昌範、小野田真穂樹、山崎正勝、木本忠明、藤岡洋保、小佐野重利、櫻井実の各氏です。また、博物館活動の停滞を懸念した末松安晴学長の命を受け、1991年7月15日より、すでに退官されていた道家達将名誉教授に資料調査研究員として資料収集・調査の業務を委嘱されました（道家名誉教授には、2006年特任教授の称号付与、2008年より特命教授の称号が付与されました）。そして、展示部門専門委員会の下に、受け入れ資料の評価にあたる歴史部会が組織されました（1991年11月25日）。これにより、博物館活動をするための一通りの体制が出来上がりました。歴史部会の主査には、小野田真穂

樹教授が指名されました。その他の主な活動として、当時地下に設置されていた学科等を紹介するスライドとプロジェクターを一階の展示室に移動させ、さらに紹介する学科の数の増加を図りました。

1993～1994年度は、小野田真穂樹教授が委員長でした。小野田委員長時代の資料調査員は、小野田真穂樹、吉川昌範、山崎正勝、木本忠明、藤岡洋保、櫻井実の各氏です。小野田委員長時代は、博物館化に向けて動き始めた時代でした。末松安晴学長が1993年7月にまとめられた「東京工業大学の将来構想」では、百年記念館、東京都選定歴史的建造物であった水力実験室を含む、線路沿いの一角を博物館地区として整備する構想が明記されています。展示部門専門委員会では、山崎委員を中心に、東京工業大学技術博物館・資料館構想（1994年6月）を練り上げていました。また、別途理学部内で、地球史資料を対象とした、「東京工業大学地球史ミュージアム（仮称）」の設置に向けた準備も始まりしました（「地球史資料館」は、1995年3月に開館）。以後、百年記念館と地球史資料館と合同で、大学博物館設置に向けての動きが、始まっていきます。

次の委員長は、入野野修教授（1995～2001年度）です。入野野委員長時代の資料調査員は、当初は吉川昌範、山崎正勝、木本忠明、藤岡洋保、櫻井実の5氏で、1996年度から亀井宏行、中島秀人、梶雅範の3氏が、さらに、1999年度から吉川委員に代わり大竹尚人氏が任命されました。入野野委員長在任中の一番大きな活動は、定期的に特別展を開催することになったことです。この時まで、博物館活動をするための経常予算というものは計上されていませんでした。というのは、百年記念館は寄付建物なので、文科省からの予算は手当てされていなかったからです。何かをしようとするためには、その都度、資金調達から考えねばならなかったのです。内藤喜之学長（在任1997年10月～2001年10月）が就任されると、「年に一回程度、各学系を代表するテーマで特別展を実施してほしい。資金は学長裁量経費で持つ。」という提案を受けました。資金の不安が無ければ、計画も立案しやすくなります。そこで、展示部門専門委員会で議論をしたところ、1999年が、東工大3大発明の一つ、温度特性に優れた高安定水晶振動子を発見した古賀逸策生誕100年にあたるので、古賀

逸策をテーマの特別展を計画するのがいいのではないかということになりました。当時学内で、水晶振動子を使った研究をしている先生を探し、センサとして水晶振動子を利用していた森泉豊栄教授に実行委員長をお願いして、電気系の資料調査員であった亀井宏行助教授とともに、計画を立案することになりました。そうして、第1回特別展示・講演会「古賀逸策生誕百年記念展・講演会-光輝く水晶の業績-」（開催期間2000年3月21日～3月25日）の開催に漕ぎ着けました。翌年には、第2回（2001年6月19日～6月21日）「島岡達三陶芸作品特別展・記念講演会」を開催しました。この特別展のきっかけは、島岡達三氏の同級生中澤三知彦氏より島岡氏の陶芸作品100余点を寄贈いただいたことによります。そして、収蔵品が急増したことにより、美術品などの収蔵も可能な収蔵庫を設置することになりました。百年記念館は、開館当時は地階の特別展示室（195平方メートル）・収蔵庫（212平方メートル）のみが、常時展示・収蔵に使える空間でしたが、2000年に本館地階に収蔵庫（38平方メートル）を設置することができました。

第一回特別展示の実行委員長を務めた森泉豊栄教授が2002～2004年度の展示部門専門委員会委員長に就任されました。森泉委員長時代の資料調査員は、藤岡洋保、櫻井実、大竹尚人、亀井宏行、木本忠昭、山崎正勝、中島秀人、梶雅範の8氏です。2002年度に、博物館に副館長を置くことが決まり、展示部門主事が副館長につくという規則を定め、森泉教授が、初代副館長に就任されました。森泉委員長時代は、大学博物館設置に向けて大きく動いた時代でした。これまでも地球史資料館と共同して大学博物館を作ろうとして概算要求を出していましたが、平成15年度概算要求「科学・技術の歴史と未来館（東京工業大学ユニバーシティ・ミュージアム）」に対しては、附属図書館、国際学術情報センターからも構想に参加したいという意向を受け、4者合同で建物を要求する計画を立て、実際、建築学科の坂本一成教授の研究室に具体的な設計案を作ってくださいました（2002年）。概算要求と並行して、百年記念館の展示スペースが手狭だったことから、展示室の拡充や学内の建物のピロティ部分などを使った分散展示を計画しましたが、この計画も実現には至りませんでした。

た。しかし、学長らとの折衝により、2003年には西地区に収蔵庫（83平方メートル）を建設していただきました。そして、翌2004年には百年記念館地階の特別展示室に、美術品専用の展示ケースを設置することができました。森泉委員長時代の、特別展・講演会は、第3回（2002年7月10日～7月12日）「中田孝記念展示・講演会～学遊－如の多彩な人生～」（精密工学研究所から専門委員として選出された松村茂樹助教授が中心となって計画）、第4回（2003年10月15日～10月18日）「神原周記念展示・講演会～高分子新時代への道～」（実行委員長、中浜精一教授）、第5回（2004年10月5日～10月10日）「G・ワグネルが開いた近代日本陶芸・先端セラミックスの美・用・学の世界」（実行委員長、水谷惟恭教授）、第6回（2004年12月14日～12月18日）「電子顕微鏡がみせる新たな世界 ナノワールド展～ナノからピコへの挑戦～」（特別展示のみ）です。

展示部門専門委員会の最後の委員長は、亀井宏行教授（2005～2010年度）です。亀井委員長時代の資料調査員は、藤岡洋保、櫻井実、大竹尚人（2005年度のみ）、山口雅浩、木本忠昭（2008年度まで）、山崎正勝、中島秀人、梶雅範、亀井宏行の9氏です。亀井委員長時代の初年度2005年には、百年記念館の地階収蔵庫の展示室への改装が行われました（2006年3月24日オープン）。この改修のため特別展の開催は見送られましたが、倉庫に眠ったままになっていた繊維機械類などの大型機器の常設展示が可能となりました。さらに、2010年度には2階の会議室の展示室への改装を実施し（2010年7月22日オープン）、東京職工学校創設から現在に至る本学の沿革を紹介する展示室、百年記念館の設計者である篠原一男名誉教授の作品を紹介する展示室、地球史資料館の旧展示室を引き継いだ「地球史展示室」、水晶発振子からマイクロ波・光通信にいたる研究開発の歴史を紹介する展示室、と4つのテーマ別の展示室を設けました。おりしもこの年ベネチア・ビエンナーレで篠原一男が「金獅子賞」を受賞され、自らが設計した建物とそのなかに展示室がセットで存在する形となり、百年記念館が篠原を記念する世界的なモニュメントと位置付けられることになりました。亀井委員長時代の特別展・講演会は、第7回（2006年5月11日～5月23日）「ホログラフィー ～サイ

エンスからアートへ～」（実行委員長、山口雅浩准教授）、第8回（2006年7月22日～7月30日）「先端ロボットの世界～社会に役立つロボットの創造～」（実行委員長、広瀬茂男教授）、第9回（2007年7月19日～7月28日）「進化するスーパーバイオワールド」（実行委員長、広瀬茂久教授）、第10回（2008年7月17日～7月26日）「光で広がるネットワーク－レーザと光通信－」（実行委員長、浅田雅洋教授）、第11回（2008年10月2日～10月21日）「坂本一成建築展『日常の詩学』」（実行委員長、藤岡洋保教授）、第12回（2010年11月4日～12月3日）「東工大大岡山キャンパス－その歴史と未来－」（「東工大130」協賛事業）（実行委員長、藤岡洋保教授）です。

亀井委員長時代、相澤益男学長・館長（在任：2001年10月～2007年10月）や本蔵義守理事・副学長と、百年記念館の博物館活動を担う専任教員を配置していただく交渉をし、学芸業務ばかりでなく研究にもたずさわるという条件で1名の助教相当の資料調査研究員（有期雇用単年度契約）を配置していただけのこととなりました。その結果、2007年5月に、前年度から補佐員として採用されていた遠藤康一氏が着任しました。続く伊賀健一学長時代（在任：2007年10月～2012年9月）も引き続き交渉を進め、2008年4月から阿見雄之研究員（助教相当）を採用することができました。2名の専任の教員が配置されたことで、安定した博物館活動ができるようになりました。この二人は、2013年4月からは、特任講師（任期5年）となり、2018年3月まで勤められました。

また、亀井委員長時代の、2008年7月に、博物館長を学長ではなく、学長の指名する理事・副学長とするという規則改正がありました。

## 博物館への道

博物館をつくろうという構想は、創立百年記念事業の終了後も続き、前述のように末松安晴学長時代には、百年記念館、東京都選定歴史的建造物であった水力実験室と、線路沿いの一角を博物館地区として整備する構想もたてられました（東京工業大学の将来構想、1993年7月、p.133）。1996年1月18日には、文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会

より「ユニバーシティーミュージアムの設置について」という報告が出され、本学でも大学博物館設置への機運が高まり、1997年度からは、博物館設置向け概算要求も作成されましたが、実現に至りませんでした。

文部科学省からの予算措置を受けた大学博物館となることはありませんでしたが、博物館法に規定された「博物館」として認められることは可能です。博物館法では、大学が設置した博物館のうち、正式な博物館として認められたものは、「博物館相当施設」に分類されます。正式な博物館として認められれば、他の博物館との資料の貸し借りが容易になるなど、活動の幅が大きく広がります。「博物館相当施設」に指定されるためには、施設の大きさ、収蔵品の数量、学芸員を含む職員体制、そして定期的な活動状況などについての審査を受ける必要があります。2010年までの、百年記念館の改修や収蔵庫の新設などで、一応の施設は整いました。2名の特任教員の採用もでき、人員体制も整いました。特別展・講演会の定期的な開催も行なってきました。そこで、伊賀健一学長が館長であった2008年5月30日の百年記念館運営委員会で、博物館相当施設への登録を目指すことが議決され、準備を進めた結果、2011年3月31日付けで百年記念館は文部科学省より博物館相当施設として指定されました。

また、学内措置として博物館を設置することとし、2010年12月に発足した東京工業大学博物館設立準備部会（主査：三島良直教授）にて検討を重ねました。その結果、百年記念館とすずかけ台フロンティア創造共同研究センター棟1階にある展示室「東工大新技術コーナー」をあわせて「東京工業大学博物館」を組織する案が上申され、2011年4月1日をもって、東京工業大学博物館が設立されました。そして、これまで博物館機能を果たしてきた、百年記念館展示部門専門委員会は、役目を終えることになりました。その後、2012年4月1日に、亀井が、博物館兼務となり、翌2013年4月1日には、博物館専任教授となり、博物館組織として独立したものになりました。

## 博物館の意義と役割

三島良直学長（2012年10月～2018年3月）の下、

東京工業大学の使命として、「世界に雄飛する気概と人間力を備え、科学技術を俯瞰できる、優れた理工人材を輩出し、人間社会の持続可能な発展を先導する革新的科学技術の創出と体系化によって社会に貢献することによって、世界最高の総合理工系大学を目指す。」ことが掲げられ、教育改革が進められました。どのようにしてその目標を達成していけばいいのでしょうか。大学院重点化、研究大学化という旗印のもと、学部教育のゆとりがなくなり、さらにJABEEなどの教育課程の標準化で、教育の硬直化が問題になってきています。がんじがらめにされていく大学教育のなかで、世界のトップテンを目指すためにはどのような東工大の独自性を示せばいいのでしょうか。

終戦直前から戦後にかけて学長を務めた和田小六（在任1944年12月～1952年6月）は、当時硬直した工業教育一辺倒に対する危惧を感じ、改革を断行しました。東工大を「ユニバーシティらしい大学」にしたいと標榜し、学科制の廃止、人文系の強化、くさび形教育の導入により、幅広い理工系の素養と人文系の素養のバランスの取れた人材の育成を目指し、一応の成果をあげ、評価された時代がありました。しかし、その後、内外の要因により学科制の復活、大学院重点化（人文教養教育の大学院化）、コースカリキュラムの強化、専門の細分化が進み、和田の理想は退行していきました。

そして今から30数年前に、旧来の専門の垣根を越えた学際領域の教育研究を進めるようという理想を掲げ、本邦初の学部を持たない大学院として、総合理工学研究科が設立されましたが、新しい学問領域の創成にどれほどの貢献があったか、学際的な能力を持った人材の育成に成功したのか、その評価はむずかしく、現在の教育改革で解体されてしまいました。戦後70年、35年ごとの繰り返して、教育改革議論が立ち上がっているように見えます。

三十数年で世代交代が進むのは事実でしょうし、社会情勢の変化によるものだと言ってしまうのは簡単ですが、大学という一つの組織が、大学の教育はどうあるべきかという普遍的理念というものを継続して持ち続けることができないということが、一つの原因だと思われます。組織として理念を継続できないというのは問題です。大学という高等教育機

関が何百年と存続することができなくなります。

博物館というと、古いものを集めて展示するものというのが一般的な概念ですが、大学博物館は大学に属する教育研究機関でなければなりません。平成23年2月に出された東京工業大学博物館（仮称）設立準備部会報告書では、博物館の概要と目的を、「東京工業大学博物館（以下、博物館）は、本学で生み出された歴史的な研究成果、現在進行している様々な先端研究や社会への応用実績、本学のOB達の社会における成果など、実体資料としての『東工大の産物』を収集・保存し、その価値を調査して伝承の方法を検討し、それらを日常的なキャンパス生活において経験することを可能にするための展示・発信を行う。これにより、学内に東工大のidentityを育む環境を構築し教育に資するとともに、それに関わる技術・研究開発に携わる人材を育成し、社会に向けて広く東工大を表現する拠点とすることを目的とする。」と謳われています。この答申に基づき、2011年4月に博物館が設立され、2013年4月からは、資料館部門が併設され、東工大の意思決定に関わる文書類、教育行政関連文書などの収集・保存・分析・公開の機能も併せ持つようになりました。こうして東工大の研究開発から教育にいたるすべての足跡について評価し、未来へつなげることができるようになりました。大学の自己評価を行い、未来へ継承すべき理想を護る独立監査機関というのが、博物館に課せられた大きな役割なのでしょう。

現在の大学の基礎を築いたのは、戦後の和田改革です。和田の目指した「ユニバーシティらしい大学」というのをもう一度問いなおしてみましょう。ユニバーシティの起源は、中世ヨーロッパで発生した学びたい者の自治的な同業組合（ギルド）であり、自主的で創造的な教育研究活動が展開されていました。学外からの干渉を排した自由な活動の結果、そこに知の集合体ができあがり、更なる知の母胎となって、ユニバーシティとなっていったのでしょうか。振り返って日本の場合、多くが明治維新後の殖産興業、富国強兵政策に取り込まれた官制大学で、総合大学といえども、実利主義に偏った教育研究が行われていました。東工大は職工学校からはじまっていますので、大学には昇格したものの、その傾向はさらに強かったものと思われます。そのような教育に

危惧を感じ、教育改革に舵を取ったのが和田改革でした。和田が、「大学らしい大学」といわずに「ユニバーシティらしい大学」と言った背景には、日本の大学教育全体に対する閉塞感も背景にあったのでしょう。戦後の未来を託す優秀な科学者・技術者として求められる資質として、一つの考え方にとらわれず多様なものの考え方ができる柔軟性があげられます。そのためには幅広い理工系の素養と人文系の素養の涵養が必要なのです。大学が包括的な知の母胎なら、そこで学んだ者の個のなかに包括的な知を宿して世に送り出す、それが理想でしょう。

博物館は、包括的な知の象徴として存在する意義を持っています。いろいろな分野の学術成果を収集し展示公開する場であり、それらに触れられる場です。過去から現在に至る先人たちの発想法、研究法の多様性というものを感じとり、自らの成長に役立ててもらうことも可能です。現在の学生にとって、理工系の中にも異分野の研究に触れる機会は少なく、ましてや学際領域の研究というものがどのようなものかを知る機会はほとんどありません。博物館は、「博物」という名のとおり、あらゆるものに触れる機会がある場所で、博物館の活動を通して、学生にいろいろな分野の研究が存在することや「学際」とはどのようなことであるかを知らしめることができます。また、東工大で開発された世界的な技術や発見、東工大の卒業生が開発した世界的な技術を公表し学生に周知することにより、卒業生が東工大で学んだということに誇りを持つようになるのではないのでしょうか。

先に大学（ユニバーシティ）は外部からの干渉を排して運営されていくことが理想であると述べましたが、外部から閉ざされている存在であってはなりません。大学から生み出された知は社会に還元され、人々の物質的・精神的生活を豊かにしてきたからこそ、大学の存在が人々に認められ何百年も存続してきたのです。大学の活動を社会に広く知らしめるための装置となるのが、博物館のもう一つの大きな役割となります。難解な科学技術を、一般人に理解できるように説明するテクニックは、科学者・技術者としての技量として重要視されています。学生参加の博物館活動を通して、学生のサイエンスコミュニケーション能力の育成という教育もなうことが

可能となります。

以上まとめますと、東工大博物館の役割は、「自己評価・監査機関」「ユニバーシティ教育の象徴」「社会との連結装置」の3つに集約されると思います。学内外の圧力によりこの役割を演じることが難しくなることが起こるかもしれませんが、今後百年、さらにその先東工大が存続するためにも博物館活動の継続が必要であると考えます。博物館が未来永劫活動できるようその基盤を固めていくことが、私たち博物館メンバーの義務だと思っています。

# 資史料館部門と公文書室の設置

東京工業大学 資史料館部門長・公文書室長 特命教授 広瀬茂久



本学の創立百年を記念して博物館を兼ねる百年記念館が計画された段階から、いずれ資史料館も設置したいという話が出ていましたが、この資史料館構想が真剣に検討されるようになったのは、130年史の編集作業が本格化してからでした。年史編纂をきっかけに、資史料の体系的保存と活用の必要性が再認識されたのです。特に資史料を読み解き、先人の仕事とそれに込められた思いをわかりやすい形で伝承していくことは、本学のアイデンティティの確立に寄与するのみならず、未来を切り拓く力の源泉にもなると位置づけられ、早期の実現をめざすことになりました。設立検討部会では、理想的な資史料館のあり方を議論するとともに、種々の制約を考慮した現実的な姿を模索した結果、当座は以下に記すような形でスタートしつつも、将来的には、学内情報の系統的な蓄積および発信拠点になることをめざすことになりました。効率的な運営を念頭に、組織的には博物館の傘下に入ることになりましたので、従来の博物館（平成23年〔2011〕に博物館相当施設に指定）は博物館部門と名称を変更し、新設の資史料館（平成25年〔2013〕）は資史料館部門として活動を開始しました（実際には便宜上、両者は「博物館」および「資史料館」と名乗っています）。その後、公文書管理法に対応するために資史料館部門のもとに「公文書室」（平成27年〔2015〕）を設置し現在に至っています。博物館は主として百年記念館（分館はすずかけ台のS1棟内）で、資史料館は本館内（図1）で活動しています。

料館（平成25年〔2013〕）は資史料館部門として活動を開始しました（実際には便宜上、両者は「博物館」および「資史料館」と名乗っています）。その後、公文書管理法に対応するために資史料館部門のもとに「公文書室」（平成27年〔2015〕）を設置し現在に至っています。博物館は主として百年記念館（分館はすずかけ台のS1棟内）で、資史料館は本館内（図1）で活動しています。

本学は平成30年4月1日から「指定国立大学法人」となり、世界のトップレベルの大学と肩を並べて人材育成や研究開発を進め、社会的課題の解決に率先して取り組むことによって、国立大学の推進役としての役割を果たすことが期待されています。この意味でも、資史料館と公文書室の設置は時宜を得たものだったといえます。

## 資史料館の役割

資史料館は、本学の歴史ならびに我が国を中心とする工業教育史にかかわる各資史料（大学文書および記録史料）を収集、調査・研究し、整理・保存して、学内外に公開するとともに、教育・研究・年史編纂に役立てることを主要な任務としています。単なる資史料の収集・公開にとどまらず、世界的視野と歴史的観点から資史料を読み解く研究活動も行います。そうすることにより、日本のみならず世界の理工系教育に於いて先導的役割を果たしてきた本学の軌跡に光をあて、本学のアイデンティティの確立に寄与するとともに、我が国を中心とする工業教育史を俯瞰できるようにし、社会から理工系リーダー大学として期待されている本学の責務を果たすという大切な役割を担っています。

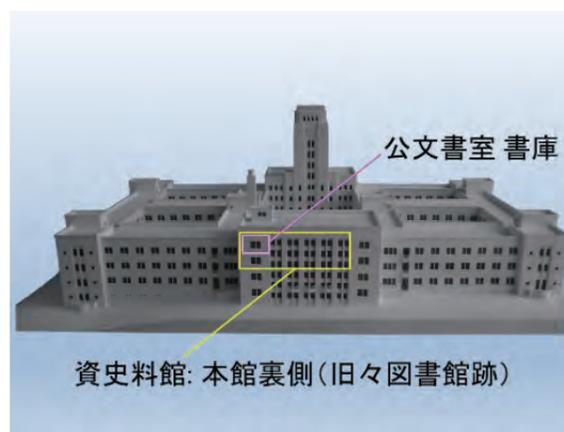
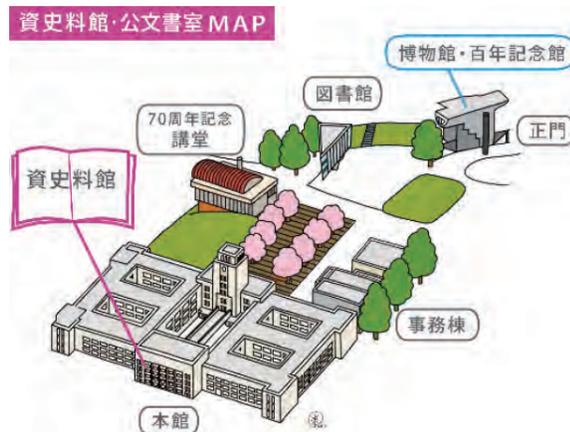


図1 資史料館と公文書室の場所

られた特定歴史公文書等を適切に保存・管理し、公開する業務を開始しました。公文書管理法の規定では、国立大学法人で作成された法人文書は、決められた保存期間が満了すると、「特定歴史公文書等」として「国立公文書館」または指定を受けた各大学の「国立公文書館等」で保存するか、廃棄するしか方法はなく、単なる資史料として今までのように各部署で適当に保存することはできなくなりました。したがって、後世に残すべき重要な法人文書を活用しやすい形で身近に保存して置くためには、「国立公文書館等」としての指定を受けた公文書室は不可欠で、早期の設置が望まれていました。今後は、法律の趣旨にのっとり、本学に関連する情報を有効活用するための情報インフラとしての使命とともに、収集した特定歴史公文書等の公開を通して、指定国立大学法人としての国民に対する説明責任を果たしていくこととなります。

## 公文書室の設置と役割

平成27年〔2015〕に資史料館の中に「公文書室」を設置し、「国立公文書館等」としての指定を受け、国立公文書館相当施設として、公文書管理法（2009.6.24成立、同年7.1公布、2011.4.1施行）で定め

られた特定歴史公文書等を適切に保存・管理し、公開する業務を開始しました。公文書管理法の規定では、国立大学法人で作成された法人文書は、決められた保存期間が満了すると、「特定歴史公文書等」として「国立公文書館」または指定を受けた各大学の「国立公文書館等」で保存するか、廃棄するしか方法はなく、単なる資史料として今までのように各部署で適当に保存することはできなくなりました。したがって、後世に残すべき重要な法人文書を活用しやすい形で身近に保存して置くためには、「国立公文書館等」としての指定を受けた公文書室は不可欠で、早期の設置が望まれていました。今後は、法律の趣旨にのっとり、本学に関連する情報を有効活用するための情報インフラとしての使命とともに、収集した特定歴史公文書等の公開を通して、指定国立大学法人としての国民に対する説明責任を果たしていくこととなります。

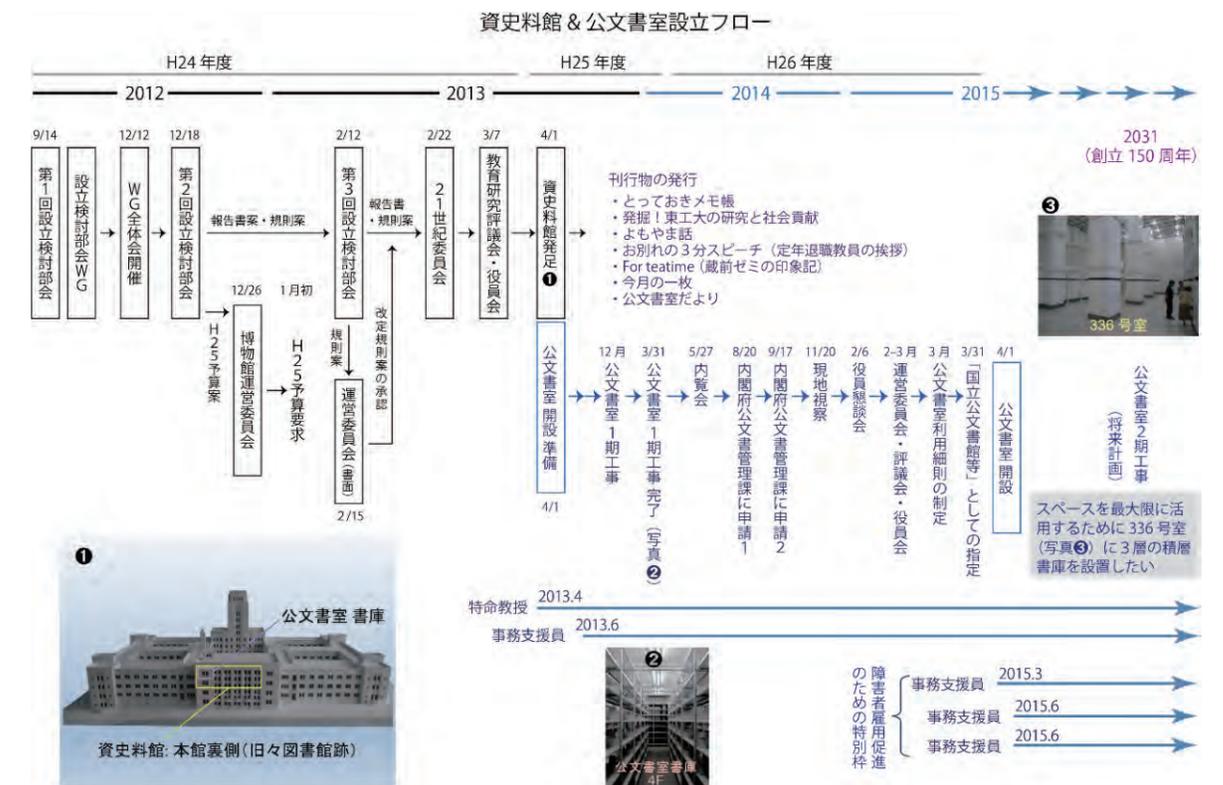


図2 資史料館と公文書室の沿革

表1 検討部会委員 (2012.7.20~2012.9.30)

理事・副学長 (渉外・情報担当)	博物館長	飯塚久夫 (主査)
副学長 (教育運営担当)	教授	岸本喜久雄
生命理工学研究科	教授	広瀬茂久 (副査)
情報理工学研究科	教授	亀井宏行
理工学研究科	教授	奥山信一
社会理工学研究科	准教授	梶 雅範
博物館	特命教授	小尾欣一
博物館	特命教授	道家達将
事務局	事務局長	山田道夫
〃	総務部長	小島浩孝
〃	財務部長	坂口広志
〃	研究推進部長	西山和徳
〃	施設運営部長	佐藤政弘
〃	参事役	橋本美克
博物館	特任助教	遠藤康一
〃	特任助教	阿児雄之
事務局	総務課長	松本胤明
〃	研究企画課長	竹田和彦
〃	研究企画課	小寺孝志
〃	〃	乙津昌弘

表2 検討部会委員 (2012.10.1~2013.2.22)

生命理工学研究科	教授	広瀬茂久* (主査)
理工学研究科	工学系長	岸本喜久雄
情報理工学研究科	教授	亀井宏行*
理工学研究科	教授	奥山信一
社会理工学研究科	准教授	梶 雅範
博物館	特命教授	小尾欣一
博物館	特命教授	道家達将*
事務局	事務局長	山田道夫*
〃	総務部長	小島浩孝*
〃	財務部長	坂口広志
〃	研究推進部長	西山和徳*
〃	施設運営部長	佐藤政弘* 12/31まで
〃	参事役	橋本美克* 1/31まで
博物館	特任助教	遠藤康一*
〃	特任助教	阿児雄之*
事務局	総務課長	松本胤明*
〃	研究企画課長	竹田和彦*
〃	研究企画課	小寺孝志
〃	〃	乙津昌弘*

\*WGメンバー

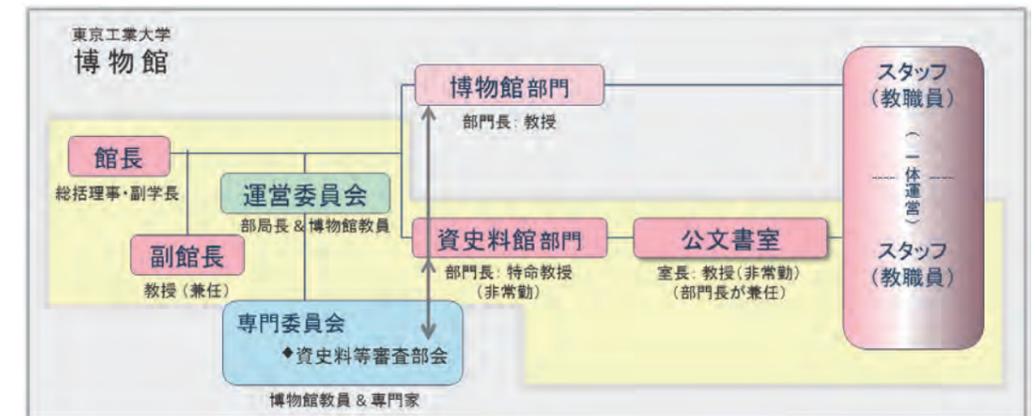


図3 博物館(資史料館部門 公文書室)組織図。資史料等の受入れを決定する「資史料等審査部会」のメンバーは博物館の教員と専門家(中島秀人、山崎綱介、金子宏直)からなる。

表3 博物館(公文書室を含む)の人員配置

博物館	部門	教員			事務系職員		
		教授	特命教授	特任教員 or 研究員	所属: 広報社会連携課		資史料館部門
					事務員(再雇用)	事務支援員	事務支援員 (障害者雇用促進枠)
博物館部門	1	1	2	1	3		
資史料館部門 (公文書室を含む)		1			1	3	

\*博物館の事務は、総務部 広報・社会連携課が担当

## 沿革と組織

新組織の設置等の重要な案件を検討するための委員会である「21世紀の個性輝く東京工業大学検討委員会」(現「将来構想検討委員会」)の下に、東京工業大学資史料館(仮称)設立検討部会が設置され、具体的な検討が始まってから、公文書室が設置されるまでの流れを図2に示します。この間に執行部体制が伊賀健一学長から三島良直学長に代わったために、検討部会委員も一部入れ替わりしました(表1、2)。

設置形態としては、限られた人的および財政的資源の効率的な活用の観点から、独立な組織とはせず、博物館のもとに資史料館を設置し、博物館機能と資史料館機能を併せもつ1つの組織として運営されています(図3)。人員配置においても両部門は、はっきり区別されていませんが、資史料館(公文書室を含む)業務を主として担当しているのは以下の5名です: 特命教授1、事務支援員4(内3名は障害者雇用促進枠)(表3)。

## 資史料館・公文書室の業務

主要な業務は以下の5つです。(1)文書類の収集・整理・保管: [i] 特定歴史公文書、[ii] 同窓生等の学内外の個人や団体からの寄贈文書類、[iii] 刊行物・印刷物、(2)閲覧窓口: 研究者や卒業生あるいはその親族等からの問い合わせに対応、(3)展示会の開催: 博物館と共催で年1~2回開催、およびシリーズで「今月の一枚」を展示、(4)講習会の開催: 職員研修の一環として実施、および年1回の部局訪問の際に面談形式で実施、(5)広報活動: 「公文書室だより」や「とっておきメモ帳」などの発行。

法人文書のうち重要なものは、公文書管理法に則り、特定歴史公文書等として公文書室に収蔵し、目録作成後、生物被害への対処その他の保存に必要な措置を講じた上で、温湿度管理された専用書庫に保存し、閲覧に供しています。

## 展望

本学は、究理(理を究める)と精技(技術をみが

く)という2本の旗を掲げ、科学技術の先端を切り拓くとともに科学技術を担う人材を世に送り出してきました。本学の前身である東京職工学校、東京工業学校および東京高等工業学校は、日本の工業化・近代化に大きく貢献し、「煙突のあるところに蔵前人あり」と称えられました。「ものづくりニッポン」は私たちの先輩の努力に負うところ大と言えるでしょう。その後も本学は社会を潤すSciTech Fountain(科学技術の泉)として高い評価を得つづけています。この泉を枯らさないためには、本学に情熱と使命感をもった若手を引き付けていく必要があります。若者を引き付ける磁石の役割を期待されているのが本資史料館・公文書室ではないでしょうか。本学の実績・伝統・魅力をいかに発信し、その任を果たすか、限られた予算とマンパワーの中での仕組みづくりが進行中です。本学の歴史的に価値のある資史料の収集・整理・保存・公開のみならず、社会から期待されている理工系リーダー大学の資史料館としてもふさわしいものにしていきたいと考えています。

ご支援ご協力をお願いします。

日々の仕事に忙殺されつつも、近未来に思いを馳せています。Digital Transformationといわれるように、デジタル(AI)の力で社会が変わろうとしています。AIも長足の進歩を遂げていますので、デジタルドキュメントをWeb上にあげておけば、

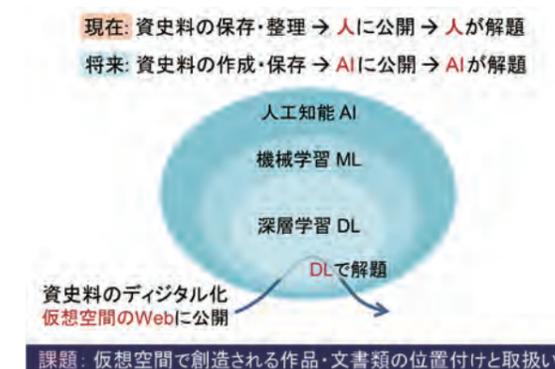


図4 Digital Transformationで到来する新しい時代を念頭に置いた文書類の公開と活用の将来像

サイバー空間で活躍するAIが勝手にそれら（毛筆のくずし字までも）を読み解き、他の資史料をも参照しながら、意味のありそうな情報を抽出してくれる時代が来るに違いありません（時には個人情報を自動的に伏せてくれる）。東工大200年史の草案はAIが作ってくれるかも知れません。そうすれば、私たちはAIが抽出した情報を吟味し、活用するといふより高度な精神活動に集中できることとなります。その意味でも歴史的文書類の保存・デジタル化と公開はますます重要になるに違いありません。

資史料館部門長・公文書室長  
特命教授 広瀬茂久

#### 参考文献

- ・広瀬茂久、阿見雄之、遠藤康一、道家達将、「資史料館が設置されました」、東工大クロニクルNo. 488、11-12、June 2013。
- ・広瀬茂久、「資史料館の見学会が行われました」、東工大クロニクルNo. 500、6頁、July 2014。
- ・博物館、「母校の資史料館の誕生と資史料寄贈のお願い」、蔵前ジャーナルNo. 1046、13頁、2014。
- ・広瀬茂久、「東工大 資史料館の誕生物語」、大阪大学アーカイブズニューズレター 第5号、4-5頁、2015。
- ・広瀬茂久、「東京工業大学博物館資史料館部門公文書室の開室一時の流れを結晶化し、後世に伝える」、国立公文書館アーカイブズニュース第58号、2015。
- ・広瀬茂久、「東京工業大学公文書室」、日本歴史2017年4月号（827号）、76-77頁。
- ・広瀬茂久、「公文書室設置の経過と現在の活動」、全史料協関東部会会報『アーキビスト』No. 88、8-9頁、2017年9月。

東京工業大学百年記念館・博物館

## 館長一覽

### 百年記念館

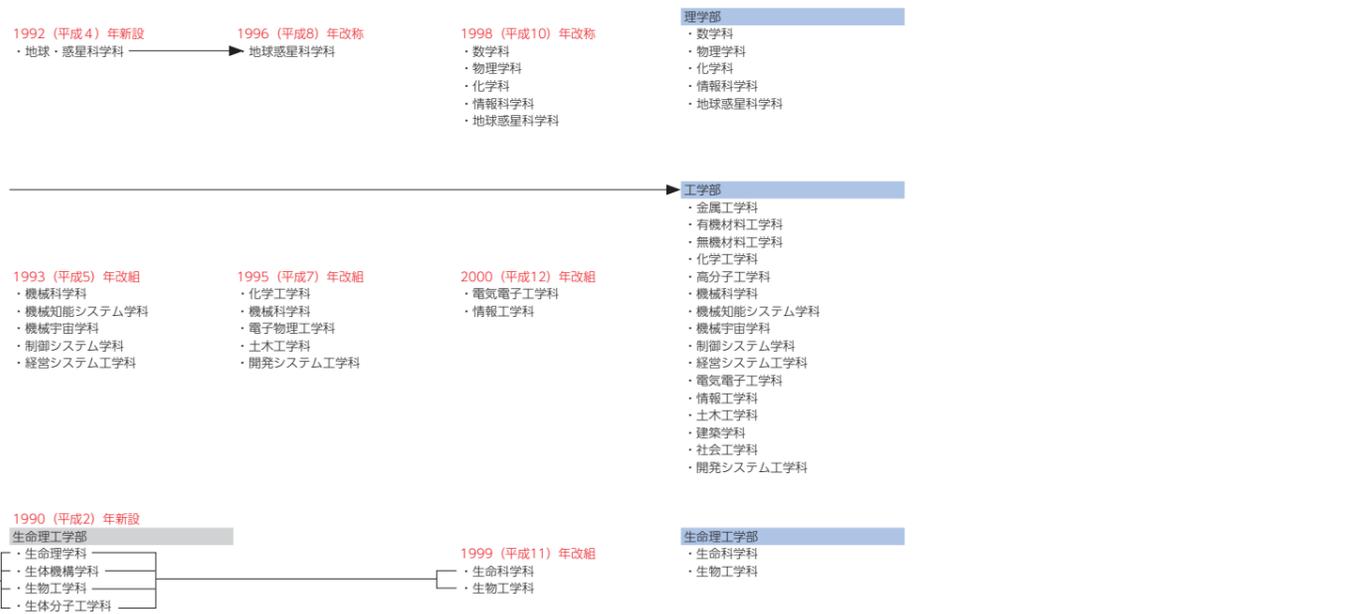
- 初代：田中郁三（1985年10月～1989年10月）
- 二代目：末松安晴（1989年10月～1993年10月）
- 三代目：木村 孟（1993年10月～1997年10月）
- 四代目：内藤喜之（1997年10月～2001年10月）
- 五代目：相澤益男（2001年10月～2007年10月）
- 六代目：伊賀健一（2007年10月～2012年10月）

### 東京工業大学博物館

- 初代：大倉一郎（2011年4月～2011年9月）
- 二代目：飯塚久夫（2011年10月～2012年10月）
- 三代目：大谷 清（2012年10月～2016年3月）
- 四代目：岡田 清（2016年4月～2018年3月）
- 五代目：佐藤 勲（2018年4月～）



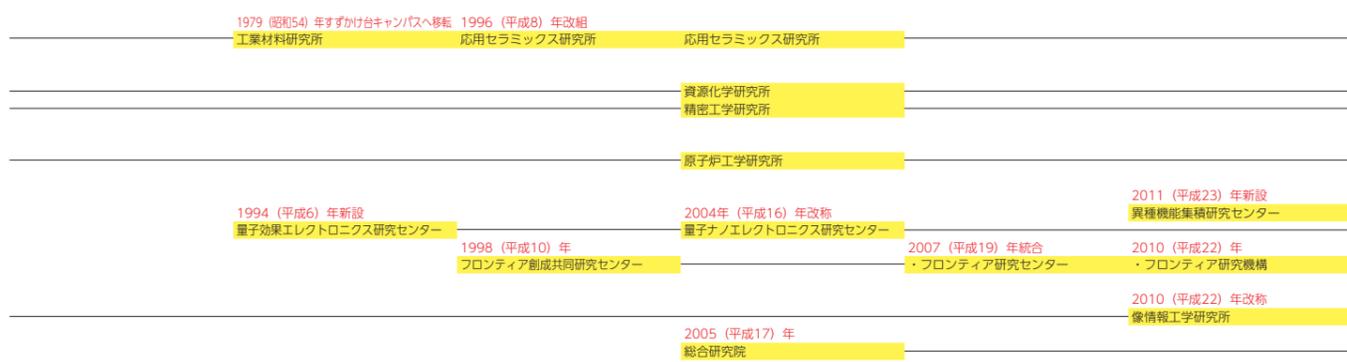
東京工業大学（新制）1949（昭和24）年移行 国立大学法人東京工業大学 2004（平成16）年移行  
○学部



○大学院



○附属研究所



国立大学法人東京工業大学 2016（平成28）年 教育研究組織の改革

理学院	数学系	数学コース
	物理学系	物理学コース
	化学系	化学コース/エネルギーコース
	地球惑星科学系	地球惑星科学コース
工学院	機械系	機械コース/エネルギーコース/エンジニアリングデザインコース/ライフエンジニアリングコース/原子核工学コース
	システム制御系	システム制御コース/エンジニアリングデザインコース
	電気電子系	電気電子コース/エネルギーコース/ライフエンジニアリングコース/原子核工学コース
	情報通信系	情報通信コース/ライフエンジニアリングコース
物質理工学院	材料系	材料コース/エネルギーコース/ライフエンジニアリングコース/原子核工学コース
	応用化学系	応用化学コース/エネルギーコース/ライフエンジニアリングコース/原子核工学コース
情報理工学院	数理・計算科学系	数理・計算科学コース/知能情報コース
	情報工学系	情報工学コース/知能情報コース
生命理工学院	生命理工学系	生命理工学コース/ライフエンジニアリングコース
環境・社会理工学院	建築学系	建築学コース/エンジニアリングデザインコース/都市・環境学コース
	土木・環境工学系	土木工学コース/エンジニアリングデザインコース/都市・環境学コース
	融合理工学系	地球環境共創コース/エネルギーコース/エンジニアリングデザインコース/原子核工学コース
	社会・人間科学系	社会・人間科学コース
	イノベーション科学系	イノベーション科学コース（博士後期課程のみ）
技術経営専門職学位課程	技術経営専門職学位課程	

リベラルアーツ研究教育院	
科学技術創成研究院	
フロンティア材料研究所	
化学生命科学研究所	
未来産業技術研究所	
先導原子力研究所	
研究センター	先進エネルギー国際研究センター/社会情報流通基盤研究センター/細胞制御工学研究センター
研究ユニット	グローバル水素エネルギー研究ユニット/ビッグデータ数理科学研究ユニット/スマート創業研究ユニット/ハイブリッドマテリアル研究ユニット/バイオインターフェース研究ユニット/革新固体触媒研究ユニット/原子燃料サイクル研究ユニット/クリーン環境研究ユニット/ナノ空間触媒研究ユニット/全固体電池研究ユニット/量子コンピューティング研究ユニット
研究拠点組織	地球生命研究所/元素戦略研究センター/『以心電心』ハピネス共創研究推進機構
附属科学技術高等学校	
附属図書館	
共通教育組織	イノベーション人材養成機構/グローバルリーダー教育院/環境エネルギー協創教育院/情報生命博士教育院/グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院/国際教育推進機構/社会人アカデミー
共通支援組織	健康管理センター/学生支援センター/ものづくり教育研究支援センター/教育革新センター/学術国際情報センター/バイオ研究基盤支援総合センター/放射線総合センター/極低温研究支援センター/博物館



東京工業大学百年記念館  
**設立30年記念誌**

2019年1月31日

発行・編集 東京工業大学博物館  
印刷・製本 第一資料印刷株式会社